富士市埋蔵文化財発掘調査報告書

岩倉B遺跡　第1地区
高徳坊遺跡　第2・3地区
沖田遺跡　第87・92次調査地点
沖田遺跡　第90・93次調査地点
児森遺跡　第2地区

2012年3月

富士市教育委員会

序

私たちのまち富士市は、北にそびえる富士山と南にひろがる駿河湾に囲まれ、豊かな水や森林を基に発展してまいりました。

私たちの祖先は、この豊かな「自然」、そして時として猛威を振るう「自然」に対してどのように対処してきたのか、遺跡の調査からはその一端を垣間見ることができます。さらに、遺跡にみる人・物の広域的交流の痕跡は、現在に通じる社会ネットワークの礎を端的に示すものとして注目されます。

このたび、報告する岩倉Ｂ遺跡、高徳坊遺跡、沖田遺跡、児森遺跡の成果は、それらの事象を考える上で、重要な学術的成果であると考えられます。

岩倉Ｂ遺跡の調査では、標高 500 mの山岳地帯において 10 世紀初頭の竪穴建物跡が検出され、山岳における集落形態と富士山の噴火との関わりを考える上で重要な成果が得られました。

高徳坊遺跡の調査では、弥生時代後期における東遠江と中部高地との地域間交流の存在と、富士川東岸地域の関わりを明らかにすることができ、児森遺跡の調査でも、集落と墓域の関係を考えうえで重要な成果が上がりました。

また、浮島ヶ原低地に存在する沖田遺跡の調査では、古墳時代、奈良・平安時代、中世の３面の水田跡を検出し、現代まで続く生産活動の実態解明の第一歩と捉える事が出来ます。

今後も、これらの成果をまとめ上げ、富士における祖先の活動の痕跡を明らかにしていく必要があります。

最後になりましたが、現地発掘調査ならびに資料整理作業において、ご指導・ご協力を賜りました多くの方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成２４年１月
富士市教育委員会
教育長　山田幸男

例　言

1．本書は、富士市教育委員会が実施した、岩倉Ｂ遺跡（第１地区）、高徳坊遺跡（第２・３地区）、沖田遺跡（第87・90・92・93次調査地点）、児森遺跡（第２地区）の発掘調査報告書の合本である。
2．各調査における調査体制、調査期間等は各報文例言に記した。
3．本報告書に伴う整理作業は平成23年４月１日から平成24年３月30日まで下記の体制で実施した。
　調査主体　教育長　平岡彦三（～平成23年12月23日）、山田幸男（平成23年12月24日～）
　事務局　教育次長　鈴木清二　　文化振興課　課長　渡井義彦　　主幹　前田勝己
　作業担当　佐藤祐樹　服部孝信（文化振興課文化財担当）
　作業補佐　藤村　翔　小島利史　若林美希　稲葉万智子　井上尚子　小田貴子　金剌才己
　　池田知子　加藤咲子
4．本書の執筆は佐藤と服部が分担して行った。編集は佐藤による。
5．現地における写真は、各担当者が撮影し、出土遺物の大部分は服部が撮影し、木製品は佐藤による。図版表紙の集合写真は小田による。
6．本書に掲載した遺跡の出土遺物・実測図・写真はすべて富士市教育委員会で保管している。
7．本書の作成にあたり、次の方々に多大なご協力とご指導を賜りました。この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。
　池谷信之　岩本貴　小崎晋　篠原和大　篠原武　滝沢誠　田村隆太郎　前島秀張　渡井英誉
（敬称略・50音順）

凡　例

1．座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系を設定して調査したもののほか、任意のグリッドを設定して行ったものがある。本書では、調査時に使用された基準点をデータ上もしくは図上で世界測地系（平成14年４月１日施行）に変換した数値を使用し提示している。抄録のデータも世界測地系によるものである。
2．遺構の標記（記号）は次のとおりである。
　ＳＢ：竪穴建物跡　ＳＫ：土坑　ＳＮ：水田跡　ＳＮＫ：畦畔　ＮＲ：自然流路　ＳＸ：性格不明遺構
3．土器については、実測図断面を以下のように表現することで、種類の違いを示した。
　土師器：□　　須恵器：■　　灰釉陶器・陶器：▒
4．土層・遺物の色調は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
5．レベル高は海抜、方位は座標北である。

総　目　次

岩倉Ｂ遺跡　第１地区 …… 1
高徳坊遺跡　第２・３地区 …… 25
沖田遺跡　第87・92次調査地点 …… 59
沖田遺跡　第90・93次調査地点 …… 89
児森遺跡　第２地区 …… 107

富士市埋蔵文化財調査報告

静岡県　富士市

岩倉B遺跡

市道富士本線改良工事に伴う第１地区埋蔵文化財発掘調査報告書

2012年3月

富士市教育委員会

例　言

1　本書は、静岡県富士市大淵字岩倉7692番地外に所在する岩倉B遺跡第１地区１・２次調査の発掘調査報告書である。

2　調査は、富士市長　鈴木清見（担当課：建設部道路建設課）による市道富士本線改良工事に伴い、平成９年度に富士市教育委員会が実施した。

3　岩倉B遺跡の試掘確認調査、本調査の期間は以下のとおりである。

試掘調査【第１地区１次調査】　平成９年10月６日～平成９年10月14日

本 調 査【第１地区２次調査】　平成９年10月15日～平成９年11月21日

4　調査体制は以下のとおりである。

富士市教育委員会教育長　太田　均　　教育次長　大竹庄二

文化振興課課長　遠藤貞幸　　課長補佐　平野孝雄　　係長　池田晴夫

文 化 振 興 課　志村　博・田中淳一・久保田伸彦

目　次

例言

目次

第１章　調査の経緯と概要 …… 3

第２章　遺跡の立地と環境 …… 4

第１節　地理的歴史的環境 …… 4

第２節　基本土層 …… 4

第3章　遺構と遺物 …… 6

第１節　竪穴建物跡 …… 6

第２節　遺構外出土遺物 …… 9

第４章　総括 …… 11

付表　出土遺物観察表

写真図版

挿図目次

第 1 図　地質図 …… 3

第 2 図　岩倉A遺跡出土土器 …… 4

第 3 図　周辺遺跡分布図 …… 5

第 4 図　調査位置図 …… 5

第 5 図　調査全体図 …… 6

第 6 図　SB01 実測図 …… 8

第 7 図　SB02 実測図 …… 8

第 8 図　SB02 カマド実測図 …… 8

第 9 図　SB01・SB02 遺物実測図 …… 9

第 10 図　遺構外出土遺物実測図 …… 10

第 11 図　弥宜ノ前遺跡第６号住居址出土土器 …… 11

第 12 図　平安時代における富士山南麓の遺跡 …… 12

挿表目次

第 1 表　平安時代の富士山噴火 …… 11

第１章　調査の経緯と概要

遺跡発見の経緯　岩倉Ｂ遺跡は、平成８年度に新規発見された遺跡である。発見の契機は、道路工事を請け負っていた土木業者からの情報提供であった。この業者は、普段から富士市内における遺跡の試掘調査や本調査の重機掘削業務を請け負っており、埋蔵文化財に対する理解があったことが幸いであった。情報提供を受け、富士市教育委員会職員が現場に向かい、地表面から遺物が採集できることを確認した。それを受け、平成９年４月、富士市教育委員会は、静岡県教育委員会と協議の上、周知の埋蔵文化財包蔵地「岩倉Ｂ遺跡」として新規登録した。

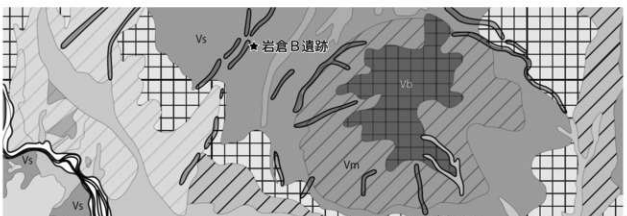
調査経緯　平成９年、富士市長鈴木清見（担当課：建設部道路建設課）は、市道富士本線改良工事（富士市大淵字岩倉7692番地外）を計画した。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「岩倉Ｂ遺跡」として新規登録したばかりであった。そのため、実態把握を目的として、工事着手前に富士市教育委員会により試掘・確認調査が実施されることとなった。

試掘・確認調査　試掘・確認調査では、対象地内に南北方向に２本のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、トレンチの南端において平安時代の竪穴建物跡と考えられる遺構を２軒検出し、土師器・須恵器・灰釉陶器などコンテナ１箱分の土器が出土した。

その結果を基に、建設課と文化財の取り扱いについて協議し、調整の結果、本発掘調査を実施することとなった。

本調査　試掘・確認調査時の２本のトレンチ間や検出されていた竪穴建物跡と考えられる遺構の周囲を拡張する形で行われた。調査は平成９年10月15日に開始し、355㎡を掘削し、11月21日に終了した。調査では、試掘・確認調査時に検出されていた遺構以外に新たに遺構を検出することはできず、竪穴建物跡２軒を掘削・完掘した。

（佐藤）



第１図　地質図

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的歴史的環境

岩倉Ｂ遺跡は富士山南麓尾根上の山間地、標高約 548m 付近に位置し、「不動沢」北東の緩斜面に立地している。

富士市の地形は古富士火山の噴出による古富士泥流（約 16,500 年前）が基盤とされる。その後は活動休止期と不定期で微細な小規模活動の可能性を含みながら、新富士火山の時期をむかえる。新富士火山の噴出溶岩は大淵溶岩流として古富士泥流を覆うこととなり、続く曽比奈溶岩流の分布は東で赤淵川に及んでいる。隆起・沈降・自然堆積・風向などの作用が時間を経て、扇状地地形と多くの沢や河川、段丘、丘陵地、尾根、谷地形などを形作ってきた。富士山南麓に広がる緩く長い傾斜地は、高地での遺跡立地を可能にした一因と考えられる。

遺跡の南方 200 m、標高 488 ～ 514 mには、岩倉Ａ遺跡が存在し、弥生時代後期の壺が出土している（佐藤 2011）。また、不動沢を挟んだ西側には大坂遺跡が立地しかつて、弥生時代中期後半の土器が採集されたという（中野 1969）。

このように弥生時代の遺跡の存在は知られているものの、その他の時代の生活痕跡は明らかとなっていなかった。後述するように本遺跡では 10 世紀前後の遺構・遺物が見つかっており、　奈良時代以降、10 世紀前後まで富士郡の中心的な位置を占めてきた東平遺跡（三日市廃寺跡を含む）との直線距離は約 9km、標高差約 530 mを測る。また、同様に富士山・愛鷹山丘陵と浮島ヶ原低地の間に存在する街道（根方街道）沿いで 10 世紀の遺構が検出されている宇東川遺跡（富士市教委 2012）や祢宜ノ前遺跡（富士市教委 2008）などとの標高差も同様である。

第２図　岩倉Ａ遺跡出土土器

岩倉Ｂ遺跡は前述のとおり、山岳地帯に立地するため、周囲には未発見の遺跡も存在すると考えられる。同時代の遺跡としては、西方約 4 km に存在する村山浅間神社遺跡が知られている。村山浅間神社は富士山修験の中心として知られ、末代上人により社会的勢力が成立するのは 12 世紀中葉のことと考えられている（若林 2005）。しかし、発掘調査により９世紀後半から 10 世紀前半にかけての遺構・遺物が発見されていることは岩倉Ｂ遺跡との関係を考える際に重要である（富士宮市教委 2005）。

（佐藤・服部）

第２節　基本土層

調査地はカクランの影響を多く受けている上、急斜面地のため、土砂の流出が激しい。それでもⅠ～Ⅶ層に分層することができた。Ⅰ～Ⅵ層は発泡するスコリアが認められ、その一部は古墳時代中期後半から後期初頭に噴出した大淵スコリアと考えられる。しかし、スコリアの対比は肉眼観察のみで決定できないため、慎重にならなければならない。そのため、調査終了後、スコリアの自然科学的分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

その結果、分析したスコリアは径５～ 15mm で粒径の淘汰はやや不良で、多くのスコリアの表面が風化して赤褐色を呈するものの、新鮮なものは灰褐色を呈し、発泡のやや良好なものと灰黒色で発泡の不良なものとが混在した。この特徴は、沼津市雌鹿塚遺跡で認められた大淵スコリアの特徴（沼津市教委 1990）に類似することなどから、本遺跡で採取したスコリアは大淵スコリアに由来する可能性が指摘された。しかし、採取層位が不明であることは残念である。

（佐藤・服部）

参考文献

佐藤祐樹 2011「富士市岩倉Ａ遺跡出土の弥生土器」『平成 21 年度富士市内遺跡発掘調査報告書』

中野国雄 1969『富士市史』上巻

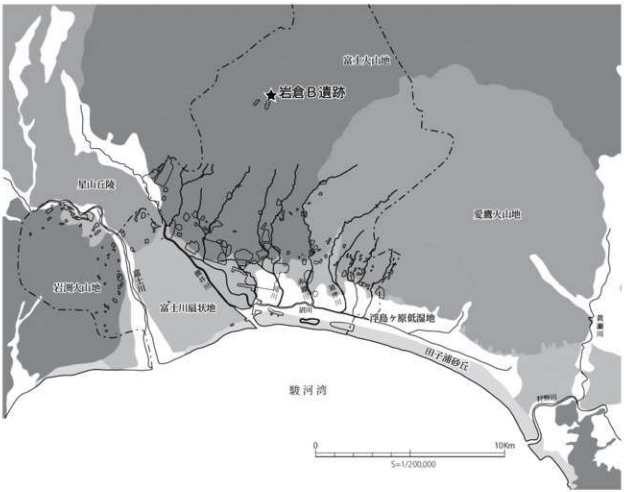
沼津市教育委員会 1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』

富士市教育委員会 2008『祢宜ノ前遺跡』

富士市教育委員会 2012『宇東川遺跡Ａ地区』

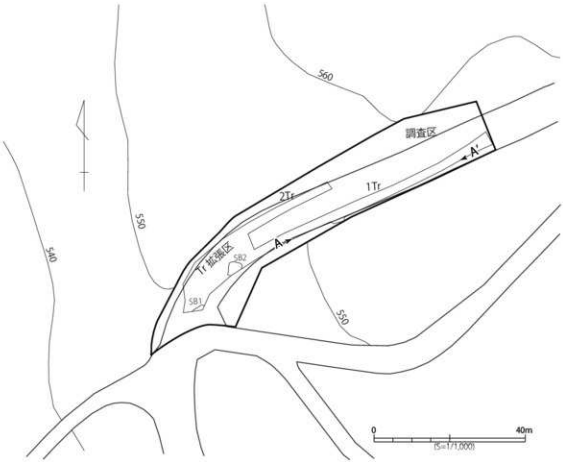
富士宮市教育委員会 2005『村山浅間神社調査報告書』（遺跡範囲確認調査編）

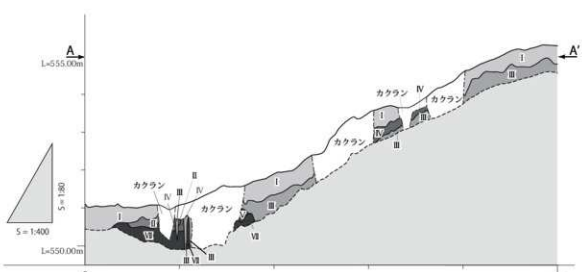
若林淳之 2005「村山浅間神社の歴史」『村山浅間神社調査報告書』富士宮市教育委員会



第 3 図　周辺遺跡分布図

第 4 図　調査位置図 (1/5,000)





層	色調	発泡スコリア	赤色スコリア	粘性	しまり	備考
Ⅰ	赤土層	多量	―	あり	弱	
Ⅱ	暗黄褐色土	多量	少量	あり	強	
Ⅲ	灰褐黄褐色土	多量	多量	強	強	
Ⅳ	黄褐色	微量	多量	強	強	
Ⅴ	灰黄褐色土	微量	多量	強	強	
Ⅵ	黄褐色土	―	多量	強	強	
Ⅶ	灰赤黄褐色土	―	多量	強	強	赤みを帯びる

第５図　調査全体図・土層断面図

第３章　遺構と遺物

第１節　竪穴建物跡

SB01

遺構（第６図）　調査区の南端で検出された。方形を呈すると考えられる遺構のコーナー部分を検出したが、大部分が調査区外のため、竪穴建物跡でない可能性もあるが、出土遺物などから建物跡と判断した。主軸は N-14°-E、残存規模は南北 2.3m、東西 0.8m を測る。カマドなどの燃焼施設は検出されなかった。

遺物（第９図１～８・29）　土師器７点、灰釉陶器１点、須恵器片１点を図示した。１～５は皿・坏の破片である。１は器壁が薄く、胎土も精練され赤色粒子を含む。体部下半に稜を有するが、これは底部方向からのヘラケズリによって作り出されたものと考えられる。甲斐型皿の最終段階で 10 世紀前半のものと考えられる。２は口縁部の形状などが１に似るものの、器壁が厚く、残存部分にはヘラケズリの痕跡は確認されない。色調も１に比べて赤色を呈する。３は胎土に砂粒が多く、器面荒れが著しく、調整などは明らかでない。他の土器と比べて明らかに胎土が異なる。底部外面に回転糸切り痕が一部観察されるが、その後ヘラケズリが施されかき消されている。４は底部外面に不明瞭ながらヘラケズリ、内面にはヘラミガキが施される。回転糸切りの痕跡は確認できない。５は、底部外面にヘラケズリのようなものも観察されるが、小破片のため確実ではない。６は灰釉陶器の高台部・底部で、内外面の一部に釉が認められる。高台は内面が強くナデられ内湾して高く、端部は比較的丸く仕上げられている。底部は回転糸切り後、未調整である。O－53 窯式前後のものと考えられるが高台部分のみのため断定できない。７は底部に木葉痕が認められることから甕の破片と考えられる。８は坏もしくは皿のようなものと考えられるが、明らかでない。器面荒れが著しい。29 は、須恵器の破片である。大甕の胴部片を人為的に打ち欠くことで長方形に成形されて二次的な転用が図られている。内面には、黒色物質の刷毛塗りが認められるが、これがどのような物質なのか、また、何を目的としたものかは明らかでない。刷毛塗り後、二次転用のために打ち欠き成形が行われているが、それらに因果関係は認められず、別の要因によるものと考えられる。前者については明らかでないものの、二次的な転用については、内面の擦り減り具合、破片外面の中央部の摩耗具合から、硯に転用された可能性が指摘できる。もしそうであるのならば、外面中央部の摩耗は、硯が手持ちではなく、置かれて使用されていたことを推測させる。

時期　出土遺物より 10 世紀前半の建物跡と考えられる。

SB02

遺構（第７・８図）　調査区南西端で検出された。北壁にカマドを有する竪穴建物跡で平面は方形を呈する。東西 3.4m、南北 3.7m、主軸は N-13°-E を測る。検出面から床面までの深さは 25cm 程度である。

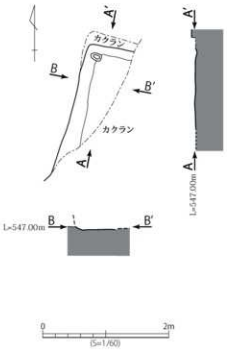
カマドは北壁やや西よりに存在する。上面の削平に加え、両袖部ともに攪乱を受けており、残存状況は良好とはいえない。残存長 123cm、中央部内寸幅 34cm、外寸幅 53cm を測る。燃焼室内には炭化物を含む茶褐色土が堆積していた。袖部の構築などについては調査時の図面からは確認することができなかった。

遺物（第９図９～28）　土師器 17 点と灰釉陶器２点を図示した。27・28 を除く土師器はすべて坏の破片である。９は、器壁の厚い坏で、底部外面に下方からのヘラケズリの痕跡が認められる。口唇端部内面を若干肥厚させ、内側を摘みだしながらヨコナデが施されている。10 の底部は板状工具の小口で粘土を削り取ったのち、底部の縁および外面がヘラケズリ調整されている。11 も小破片ながら底部外面にヘラケズリおよび墨書が確認される。12～14 はいずれも底部の破片で器壁が厚く作られている。底部には回転糸切りの痕跡が残り、その後の底部調整の痕跡は認められない。15 は胎土が砂質のため表面の調整が確認されない。13 は胎土と色調が９に酷似するものの、口縁端部の形状に相違がみられる。21 は内面が黒色を呈するが、ヘラミガキの痕跡や光沢がないことから黒色処理ではなく、焼成後の被熱と判断した。また、25 も内外面ともに黒色を呈するが、煤の付着から焼成後の被熱と判断した。20・22 は胎土と色調から同一個体の可能性もある。27 は甕、28 も小型の甕である。27 は内面に粗いヨコハケが認められ、甲斐型の甕と考えられ、10 世紀前半のものと考えられる。

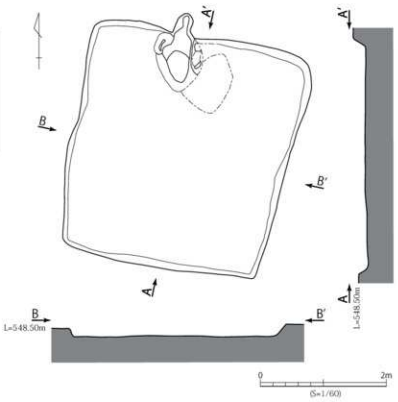
24・26 は灰釉陶器の碗の破片である。24 の高台は内面が強くナデられ、内湾して低い三日月高台を呈する。O－53 窯式前後のものと考えられるが、高台部分のみのため断定できない。

時期　出土遺物より 10 世紀前半の建物跡と考えられる。

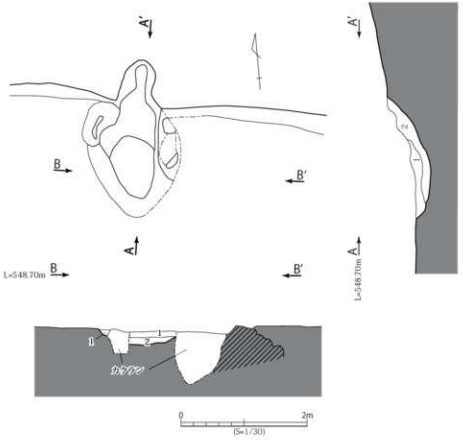
（佐藤）



第６図　SB01 実測図

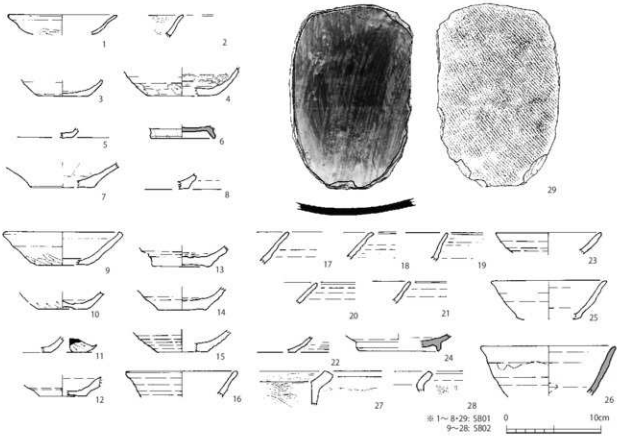


第７図　SB02 実測図



層	色調	ObSc	赤色Sc	焼土	カーボン	粘土	粘性	しまり	備考
1	暗茶褐色土	―	少量	微量	微量	弱	弱	やや強	
2	茶褐色土	―	―	極多量	やや多い	弱	―	ふつう	燃焼室内

第８図　SB02 カマド実測図



第 9 図　SB01・SB02 遺物実測図

第 2 節　遺構外出土遺物

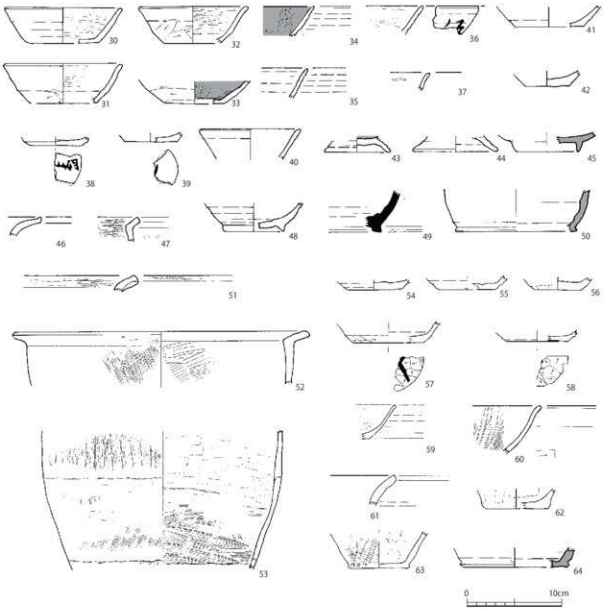
遺物概要と時期

遺構外から出土したものや調査時に表面から採集された土師器 21 点、須恵器 1 点、灰釉陶器 2 点を図示した。いずれも、9 世紀後半から 10 世紀前半にかけての限られた時期の遺物と考えられる。

土師器（第 10 図 30 ～ 44・46 ～ 48・51 ～ 53）　30 ～ 42 は坏の破片である。30 ～ 32 は「皺東坏」の破片で、いずれも 10 世紀を前後する時期の破片である。31・32 は外面下半にヘラケズリが認められる。33 は器壁が薄く、胎土に赤色粒子を含む。底部外面は回転ヘラケズリ、内面には放射状の細かいヘラミガキ・黒色処理が認められる。また、34 も同じく黒色処理が認められ、ともに甲斐型の坏で 9 世紀後半から 10 世紀前半と考えられる。35 はにぶい黄橙色を呈し、30 ～ 32 の「皺東坏」の胎土とは明らかに異なる。形状から、灰釉陶器の碗を模倣したものと考えられ、9 世紀まで遡る遺物とは考えられない。36・38・39 は墨書が認められる「皺東坏」である。36・39 ともに何と書かれていたのかは明らかでないが、38 は「澤」もしくは「翠」のようにも見える。41・42 は底部回転糸切り後未調整の坏の破片である。小破片のため時期決定はできないが、10 世紀前半頃の破片である。43・44 は足高高台坏の破片である。43 は底部内面が黒色処理されている。胎土は「皺東坏」の胎土と変わらない。47・51・52 は甲斐型の甕の破片である。中でも 52 は「薄口縁型」で古い様相を示す。53 は長胴の甕の胴部片である。長胴のため、2 回の乾燥工程が確認でき、内外面の調整後、乾燥させさらに輪積みを行っていく様子が観察できる。9 世紀後半から 10 世紀にかけての遺物と考えられる。

須恵器・灰釉陶器（第 10 図 45・49・50）　45 は灰釉陶器の碗である。内面が強くナデられ、内湾する三日月高台を呈する。9 世紀後半から 10 世紀前半の遺物と考えられる。49 は須恵器の壺、50 は灰釉陶器の壺と考えられるが、時期決定はできない。

採集土器（第 10 図 54 ～ 64）　土師器 10 点、灰釉陶器 1 点を図示した。54 ～ 60 は坏の破片だが、いずれも小破片のため、全体が復元できる資料はない。54・55 は外面の立ち上がりが残存している部分が少ないため、底部外面のヘラケズリの有無については保留せざるを得ない。一方 56・57 についてはヘラケズリの痕跡が明瞭に観察される。57 は底面に墨書が認められるが、判読できるほど



第 10 図　遺構外出土遺物実測図

破片が残存しない。59 は径が復元できないものの、底部から口縁部まで図上で復元される唯一の坏である。内面が丁寧にヘラミガキされ、色調は赤みがかり、他の破片と異なる。また、60 の破片も他の土器と異なり、薄く丁寧に仕上げられ胎土に赤色粒子を含む。内面は放射状の細いヘラミガキが施され、底部外面下半にはヘラケズリが認められることから「甲斐型坏」の破片と考えられる。

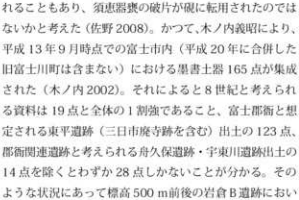
61 ～ 63 は甕の破片である。63 は内外面にハケメ調整が認められる。64 は灰釉陶器の壺の破片と考えられる。

以上の土器は一括性があるわけではなく年代的位置づけを行える資料は少ないが、多くが９世紀後半から 10 世紀前半に位置付けられる。（佐藤）

第４章　総括

遺構・遺物の年代　今回の調査では竪穴建物跡２軒を検出した。遺構の年代については、９世紀後半の可能性は否定しえないものの、10 世紀前半と判断した。従来は資料不足の関係で、底部に回転糸切り痕を残し、外面下半にヘラケズリが施される坏（第９図 12 ～ 15）などについて、11 世紀に降るのではないかという見解が示されたこともあった（渡井 2005）。しかし、近年調査された富士市弥宜ノ前遺跡第６号住居址出土資料から、Ｏ－ 53 窯式とされる灰釉陶器とともに、前述の坏が伴うことが明らかとなった（富士市教育委委員会 2008）。ただし、それらが９世紀後半まで遡るかについては型式学的な検討が済んでいないため、現段階では 10 世紀前半とするのが妥当なように思われる。ただし、採集資料の中に９世紀後半に遡ると考えられる甲斐型土器の甕の破片（第 10 図 52）も存在し、遺跡の初現は９世紀後半の可能性もある。

二次転用された甕と墨書土器　SB01 の北西隅から須恵器の甕を意識的に長方形に打ち欠いた破片が出土した（第９図 29）。今回、岩倉Ｂ遺跡において出土した 64 点の遺物全点を報告したが、その中に６点もの墨書土器が認められることもあり、須恵器甕の破片が硯に転用されたのではないかと考えた（佐野 2008）。かつて、木ノ内義昭により、平成 13 年９月時点での富士市内（平成 20 年に合併した旧富士川町は含まない）における墨書土器 165 点が集成された（木ノ内 2002）。それによると８世紀と考えられる資料は 19 点と全体の１割強であること、富士郡衙と想定される東平遺跡（三日市廃寺跡を含む）出土の 123 点、郡衙関連遺跡と考えられる舟久保遺跡・宇東川遺跡出土の 14 点を除くとわずか 28 点しかないことが分かる。そのような状況にあって標高 500 m前後の岩倉Ｂ遺跡において、６点もの墨書土器が出土したことは特筆される。



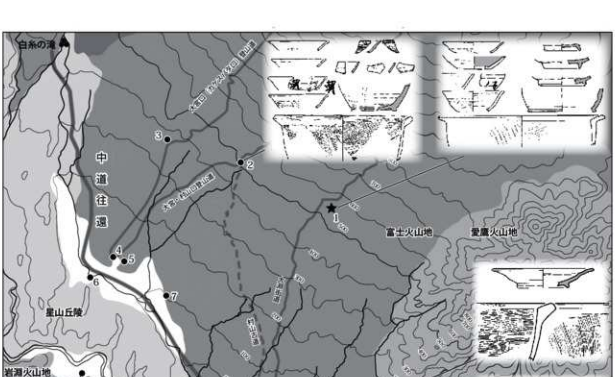
第 11 図　弥宜ノ前遺跡　第６号住居址出土土器

駿東型土器と甲斐型土器　律令制下では、旧国に近い範囲において特徴的な土器生産が認められるという「国別タイプ」（河野 1976）の土器生産が指摘されており、静岡県東部地域では「駿東型土器」が、山梨県では「甲斐型土器」が提唱され、それぞれ活発な議論が重ねられてきた経緯がある。いまそれらについて整理することが目的ではないため、詳細は触れないが、８世紀後半以降、静岡県下において甲斐型土器が多く見られるようになる。田尾誠敏の分析によれば、「８世紀段階から９世紀前半にかけての出土数が多く、９世紀中葉以降、減少していく傾向にある」という（田尾 2008）。

岩倉Ｂ遺跡では、甲斐型土器が８点出土している。そのうち、煮沸具である甕の破片が５点（第９図 27・28、第 10 図 47・51・52）と半数を占めることは、甲斐型土器の坏が多く流通する中にあって、注意しなければならない。また、甲斐型土器が多く流通する８世紀から９世紀前半の時期の遺跡ではなく、９世紀後半から 10 世紀初頭にかけての遺跡である点も共通するのが、富士市（旧富士川町）浅間林遺跡である。浅間林遺跡は富士川西岸において９世紀後半に集落活動が再開し、10 世紀代に終息し、甲斐・信濃地域との交流交易に関与した集落であることが指摘されている（佐野 2010）。さらに、田尾誠敏により、浅間林遺跡は駿河国における甲斐型土器の流通拠点として位置づけられており、海路により、伊豆半島のつけ根にあたる狩野川河口まで運ばれていたことが推測されている（田尾 2008）。

第１表　平安時代の富士山噴火

元号	西暦	内容	出典
天応元年	781	富士山の噴火により灰が降り、灰の及んだ地域で農作物が枯れる被害	続日本紀
延暦 19 年	800	噴火が約一か月間続き、昼は噴煙が空を覆って周囲を暗くし、夜は火炎が天を明るく照らしだした。噴火は雷のようなすさまじい音を立て、灰が雨のように降り注ぎ、溶岩が山下の川に流れ込んで真っ赤に染めた。	日本紀略
延暦 21 年	802	昼夜噴火が続いて砂礫が霰のように降ったことが駿河・相模国から朝廷に報告され、朝廷は疫病の発生を防ぐため両国に鎮魂祭祭を命じる	日本紀略
天長３年	827	噴火？	郡川神社日記録
仁寿３年	853	富士山噴火	文徳天皇実録
貞観元年	859	富士山噴火	日本三代実録
貞観６年	864	貞観の大噴火。大きな地震を３回伴う。発生から１年半が過ぎてもなお続く。	日本三代実録
貞観 12 年	870	噴火？	郡川神社日記録
承平２年	932	富士山頂より溶岩が激しく噴き出され、浅間神社が消失した。	郡川神社日記録
承平７年	937	富士山が噴火し溶岩が麓に流れ込む。	日本紀略
天慶６年	952	噴火？	郡川神社日記録
正暦４年	993	噴火？	郡川神社日記録
長保元年	999	富士山噴火の報告により朝廷が卜占を行う	本朝世紀
寛仁元年	1017	噴火？	郡川神社日記録
長元５年	1032	富士山の噴火により溶岩流が山麓に至る	日本紀略
永保３年	1083	富士山の火山活動	扶桑略記



1. 岩倉Ｂ遺跡　2. 村山浅間神社遺跡　3. 山宮浅間神社遺跡　4. 浅間大社遺跡　5. 大宮城跡　6. 泉遺跡　7. 石敷遺跡　8. 浅間林遺跡
9. 破魔射場遺跡　10. 沢東Ａ遺跡　11. 中桁・中ノ坪遺跡　12. 東平遺跡　13. 宇東川遺跡　14. 医王寺経塚　15. 祢宜ノ前遺跡　16. 宮添遺跡

※ 地図中の「路」は、以下の文献および文献中の図を参考に作図した。図示した路は、中・近世以降に整備された街道であり、平安時代に存在したかについては明らかでない。
富士吉田市歴史民俗博物館 2002『企画展図録　富士の信仰遺跡』富士吉田市教育委員会
山梨県立博物館 2008『山梨県立博物館調査・研究報告2　古代の交易と道　研究報告書』
鳥羽幾八 2009『富士山 村山古道を歩く（田子の浦～村山古道～富士山頂）』NPO法人シニア大築　山菜カレッジ

第 12 図　平安時代における富士山南麓の遺跡

しかし、上記のような富士川を介した甲斐と駿河の交流という視点のみでは、山岳において見つかる甲斐型土器について理解することはできないものと考えられる。また、山の道では、御殿場市永原追分遺跡のような甲斐との交流（勝俣 2005）も想定できる。永原追分Ｃ遺跡では出土した坏の 75％が甲斐型であるなど特異な様相を示している。しかし、永原追分遺跡が東海道から分岐して甲斐に至る交通の重要な箇所に位置している点は、岩倉Ｂ遺跡と異なる。岩倉Ｂ遺跡における甲斐型土器の在り方について理解するには、広い視点で集落の動向を理解する必要があることは言うまでもないが、未だ明らかにされていない、山の道の存在を想定しなければならない。

富士山との関わり　前節までに調査によって明らかになった成果をまとめてきた。今一度整理すると以下の２点に集約されよう。

一つめは、岩倉Ｂ遺跡は、加耕地の想定できない標高 500 m の山中において、10 世紀初頭の限られた時間においてのみ人の活動痕跡が認められること。

二つ目は、出土した土器には墨書土器が多いだけではなく、甲斐型土器が一定量出土することから、孤立した集落とは考えられず、周辺の遺跡との有機的関係の中で計画的に集落が築かれることである。

岩倉Ｂ遺跡と同じ標高に位置する富士宮市村山浅間神社遺跡も、前述のふたつの特徴を示す遺跡として渡井英誉氏により注目されている（渡井 2005）。また、これらの遺跡が、富士山「貞観の大噴火」（864）以降、突如出現することから、自然災害に対する人類の対応の一端として理解し、富士山信仰成立以前の初源的な信仰への動きを想定

した（渡井2006・2008）。また、前述のような甲斐型土器や墨書土器の在り方、富士郡衙における10世紀初頭における群盗による放火（『扶桑略記』延喜2年9月26日条）などから植松章八氏が「郡司支配から国司支配への移行」と解したように（植松2008）、10世紀初頭を前後して、新たな社会構造の展開を明確にとらえることができる。その脈動は、富士山の噴火という自然災害への対応とリンクしていた可能性もあり、それが12世紀に成立する富士山信仰へと繋がっていくものと考えられる。

以上のように、岩倉B遺跡において発見されたわずか2軒の竪穴建物跡から明らかにされたことは多い。以前述べたように（佐藤2011）、今後も未発見の遺跡が発見される可能性も高く、山岳における集落の動向に注視していく必要がある。（佐藤）

参考文献

植松章八 2008「東駿河の奈良・平安時代遺跡と土器」『弥宜ノ前遺跡』富士市教育委員会
勝俣竜成 2005「御殿場市における甲斐型土器の様相」『静岡県考古学研究』37
木ノ内義昭 2002「芝南地域出土墨書土器集成」『東平遺跡』（第16地区（三日市廃寺跡）、第27地区発掘調査報告書）富士市教育委員会
河野喜映 1976「厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論」『神奈川考古』第1号
佐藤祐樹 2011「富士市岩倉A遺跡出土の弥生土器」『平成21年度富士市内遺跡発掘調査報告書』
佐野五十三 2008「駿河国富士郡における8世紀代の移住と集住」『静岡県考古学研究』40
佐野五十三 2010「富士川下流域から出土する古代土器系譜について」『静岡県考古学研究』41・42
田尾誠敏 2008「静岡県における甲斐型土器の流通」『古代の交易と道研究報告書』（山梨県立博物館調査・研究報告2）
原正人 2012「古代　遥拝から修験へ―貞観の噴火と浅間信仰―」『富士山』（山梨県富士山総合学術調査研究報告書）
富士市教育委員会 2008『弥宜ノ前遺跡』
富士宮市教育委員会 2005『村山浅間神社調査報告書』（遺跡範囲確認調査編）
山梨県考古学協会 1992『甲斐型土器』（その編年と年代）
渡井英智 2005「富士地域の関連遺跡」『村山浅間神社調査報告書』（遺跡範囲確認調査編）富士宮市教育委員会
渡井英智 2006「富士山の開発と信仰－富士浅間宮の考古学－」『考古学ジャーナル』539
渡井英智 2008「富士山麓における古代の遺跡分布」『富士学研究』第6巻第2号

出土遺物観察表

※　口径・底径の（　）内は推定値である。
　器高の（　）内は残存値である。
　残存率は図示中での残存率を示した。

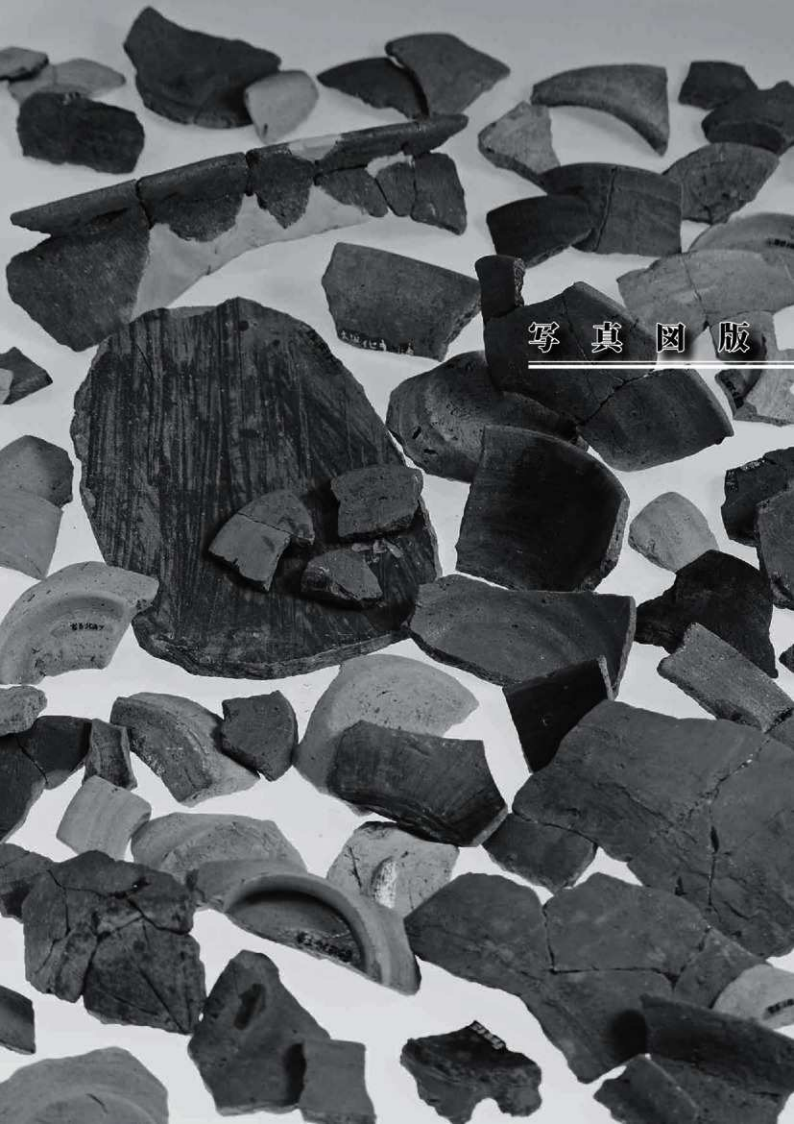
土器

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	器別	残存率	口径	器高	底径	内面色調		外面色調		備考
1	9	2	SB01	土師器	皿	(20%)	(11.6)	(2.1)	-	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	甲斐型皿
2	9	2	SB01	土師器	坏	-	-	(2.3)	-	7.5YR5/6	明褐	5YR6/6	橙	
3	9	2	SB01	土師器	坏	(50%)	-	(1.2)	(5.3)	7.5YR6/6	橙	5YR7/6	橙	
4	9	2	SB01	土師器	坏	(40%)	-	(3.2)	(7.2)	5YR4/6	赤褐	5YR5/6	明赤褐	
5	9	2	SB01	土師器	坏	-	-	(1.0)	-	7.5YR5/6	明褐	5YR5/6	明赤褐	
6	9	2	SB01	灰釉陶器	碗	(55%)	-	(1.2)	(6.6)	2.5YR6/3	にぶい黄	2.5YR6/4	にぶい黄	
7	9	2	SB01	土師器	甕	(25%)	-	(2.6)	(6.7)	7.5YR5/6	明褐	10YR5/4	にぶい黄褐	底部に木葉痕
8	9	2	SB01	土師器	坏/皿	-	-	(1.7)	-	7.5YR7/6	橙	5YR7/8	橙	
9	9	3	SB02	土師器	坏	40%	(12.4)	3.5	(5.5)	7.5YR5/6	明褐	5YR5/6	明赤褐	
10	9	3	SB02	土師器	坏	(70%)	-	(1.8)	5.4	5YR4/6	赤褐	5YR5/6	明赤褐	
11	9	3	SB02	土師器	坏	-	-	(1.7)	-	5YR5/6	明赤褐	7.5YR4/6	褐	墨書判読できず
12	9	3	SB02	土師器	坏	(20%)	-	(2.1)	5.0	10YR7/4	にぶい黄橙	2.5Y8/3	淡黄	底部回転糸切り後無調整
13	9	3	SB02	土師器	坏	(30%)	-	(2.4)	(5.0)	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR8/6	浅黄橙	底部回転糸切り後無調整
14	9	3	SB02	土師器	坏	(70%)	-	(2.2)	(6.2)	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	底部回転糸切り後無調整
15	9	3	SB02	土師器	坏	(30%)	-	(2.4)	(5.4)	2.5YR6/8	橙	5YR6/6	橙	内面に一部すす付着
16	9	3	SB02	土師器	坏	(20%)	(11.6)	(2.3)	-	5YR4/4	にぶい赤褐	7.5YR4/3	褐	
17	9	3	SB02	土師器	坏	-	-	(3.3)	-	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
18	9	3	SB02	土師器	坏	-	-	(2.8)	-	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/6	橙	
19	9	3	SB02	土師器	坏	-	-	(3.0)	-	10YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
20	9	3	SB02	土師器	坏	-	-	(2.1)	-	10YR6/4	にぶい黄橙	7.5YR7/6	橙	
21	9	3	SB02	土師器	坏	-	-	(2.2)	-	2.5Y4/1	黄灰	10YR7/4	にぶい黄橙	
22	9	3	SB02	土師器	坏	-	-	(1.8)	-	10YR6/4	にぶい黄橙	7.5YR7/6	橙	
23	9	3	SB02	土師器	坏	(20%)	(10.9)	(2.2)	-	7.5YR7/4	にぶい橙	10YR7/4	にぶい橙	
24	9	3	SB02	灰釉陶器	碗	(20%)	-	(1.8)	(8.5)	5Y7/1	灰白	5Y6/2	灰オリーブ	
25	9	3	SB02	土師器	坏	(20%)	(11.9)	(4.1)	-	7.5YR2/1	黒	5YR4/2	灰褐	
26	9	3	SB02	灰釉陶器	碗	(20%)	(13.0)	(4.9)	-	5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	灰白	
27	9	3	SB02	土師器	甕	-	-	(3.6)	-	2.5YR5/6	明赤褐	5YR4/6	赤褐	甲斐型甕
28	9	3	SB02	土師器	甕	-	-	(2.1)	-	7.5YR4/6	褐	5YR5/4	にぶい赤褐	甲斐型甕
30	10	4	表採	土師器	坏	25%	(12.3)	3.8	(7.8)	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR4/6	褐	
31	10	2	表採	土師器	坏	20%	(12.2)	(4.2)	(7.1)	5YR4/6	褐	5YR4/6	赤褐	
32	10	2	表採	土師器	坏	20%	(11.3)	(3.9)	(6.0)	2.5YR4/4	にぶい赤褐	5YR4/4	にぶい赤褐	
33	10	2	表採	土師器	坏	(25%)	-	(2.5)	(6.3)	10YR5/3	にぶい黄褐	5YR6/6	橙	甲斐型坏（内黒処理）
34	10	2	表採	土師器	坏	-	-	(3.2)	-	N3/	暗灰	5YR6/6	橙	甲斐型坏（内黒処理）
35	10	2	試掘	土師器	坏	-	-	(3.1)	-	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
36	10	5	試掘	土師器	坏	-	-	(3.0)	-	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	墨書判読できず
37	10	4	試掘	土師器	坏	-	-	(2.0)	-	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	
38	10	5	表採	土師器	坏	(20%)	-	(0.9)	(5.5)	7.5YR5/4	にぶい褐	5YR4/6	赤褐	墨書判読できず
39	10	5	試掘	土師器	坏	(25%)	-	(1.1)	(5.6)	5YR3/4	にぶい赤褐	5YR4/6	赤褐	墨書判読できず
40	10	4	試掘	土師器	坏	(25%)	11.2	(3.2)	-	7.5YR5/6	明褐	5YR5/6	明赤褐	
41	10	4	試掘	土師器	坏	(20%)	-	(2.1)	(7.5)	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	底部回転糸切り後無調整
42	10	4	表採	土師器	坏	(20%)	-	(1.6)	(4.6)	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	底部回転糸切り後無調整
43	10	4	表採	土師器	坏	(20%)	-	(1.6)	(6.6)	N2/	黒	5YR5/4	にぶい赤褐	底部内面黒色処理

遺物番号	検区	区画	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調		外面色調		備考
44	10	4	試掘	土師器	坏	(20%)	-	(1.6)	(8.8)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
45	10	4	表採	灰釉陶器	碗	(25%)	-	(2.1)	(6.6)	5Y6/2	灰オリーブ	5Y7/1	灰白	
46	10	4	表採	土師器	甕	-	-	(2.0)	-	2.5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	
47	10	4	試掘	土師器	甕	-	-	(2.6)	-	5YR4/4	にぶい赤褐	7.5YR5/4	にぶい褐	甲斐型甕
48	10	4	試掘	土師器	碗	(20%)	-	(3.1)	(6.3)	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
49	10	4	表採	須恵器	壺	-	-	(4.4)	-	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	内面自然釉
50	10	4	表採	灰釉陶器	壺	(20%)	-	(4.4)	(12.8)	2.5Y6/1	黄灰	5Y6/1	灰	
51	10	4	表採	土師器	甕	-	-	(1.7)	-	10YR5/4	にぶい黄褐	5YR5/6	明赤褐	甲斐型甕
52	10	4	表採	土師器	甕	(25%)	30.8	(5.7)	-	5YR5/4	にぶい赤褐	7.5YR5/4	にぶい褐	甲斐型甕
53	10	4	試掘	土師器	甕	(20%)	-	(14.5)	-	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR4/6	赤褐	
54	10	5	表採	土師器	坏	(30%)	-	(1.1)	(5.6)	7.5YR4/3	褐	7.5YR4/4	褐	
55	10	5	表採	土師器	坏	(20%)	-	(1.5)	(6.0)	10YR4/3	にぶい黄褐	10YR4/2	灰黄褐	
56	10	5	表採	土師器	坏	(25%)	-	(1.3)	(4.9)	10YR4/3	にぶい黄褐	5YR5/4	にぶい赤褐	
57	10	5	表採	土師器	坏	(25%)	-	(2.2)	(7.4)	5YR4/4	にぶい赤褐	7.5YR4/2	灰褐	墨書判読できず
58	10	5	表採	土師器	坏	(30%)	-	(1.2)	(6.5)	7.5YR4/4	褐	7.5YR5/4	にぶい褐	墨書判読できず
59	10	5	表採	土師器	坏	-	-	(3.6)	-	5YR4/6	赤褐	5YR4/4	にぶい赤褐	
60	10	5	表採	土師器	坏	-	-	(4.8)	-	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/6	明赤褐	
61	10	5	表採	土師器	甕	-	-	(3.3)	-	10YR5/4	にぶい黄褐	7.5YR5/4	にぶい褐	
62	10	5	表採	土師器	甕	(25%)	-	(2.1)	(6.8)	7.5YR6/6	橙	10YR5/4	にぶい黄褐	
63	10	5	表採	土師器	甕	(25%)	-	(3.9)	(6.2)	7.5YR4/3	褐	10YR4/3	にぶい黄褐	
64	10	5	表彩	灰釉陶器	壺	(20%)		(4.4)	(12.8)	2.5Y6/1	黄灰	5Y6/1	灰	

二次転用品

遺物番号	検区	区画	遺構番号	種別	細別	残存率	最大長	厚み	最大幅	内面色調		外面色調		備考
29	9	2	SB01	須恵器			19.4	0.7	12.8	10YR5/4	にぶい黄褐	2.5Y6/1	黄灰	転用硯の可能性



写真図版

図版表紙

岩倉Ｂ遺跡　第１地区 出土土器

（撮影　小田貴子）

1.　調査区全景

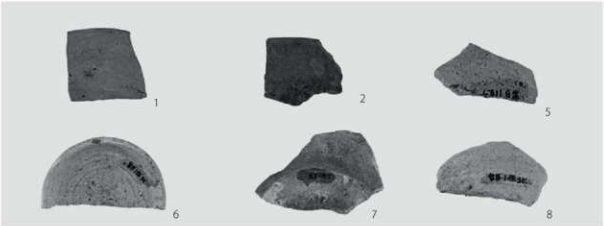
2.　SB01

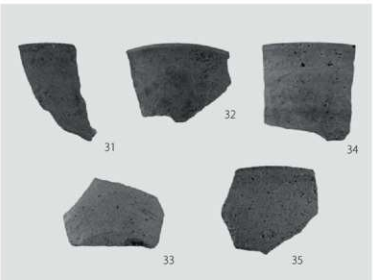
3.　SB01 遺物出土状況

4.　SB02

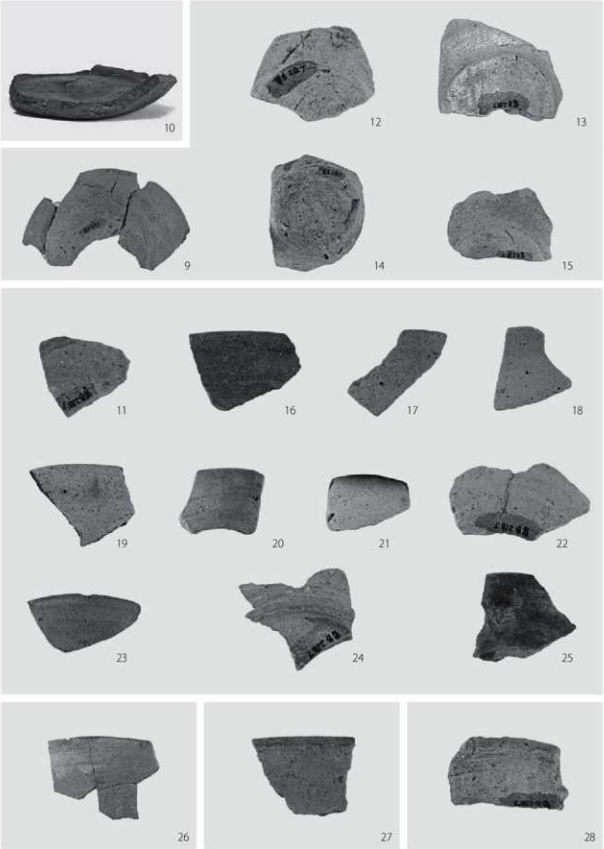
5.　SB02 カマド

PL.2　遺物



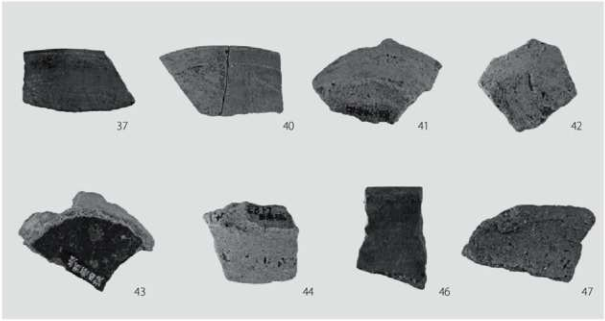


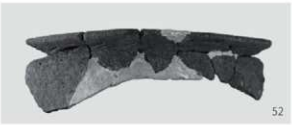
SB01

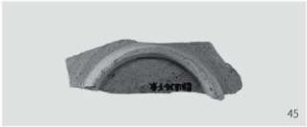


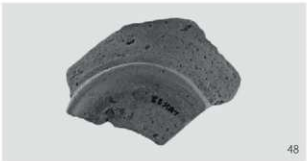
SB02

PL.4　遺物







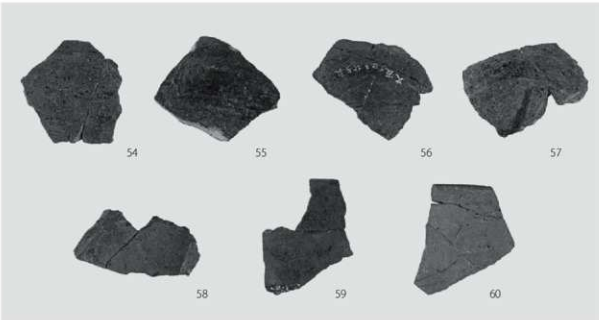


遺構外

36

39

38

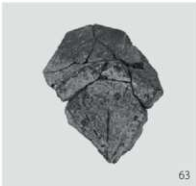

54 55 56 57 58 59 60

64

61

49

62


63

遺構外

富士市埋蔵文化財調査報告

静岡県　富士市

高徳坊遺跡

農道改良工事に伴う第２・３地区埋蔵文化財発掘調査報告書

2012 年 3 月

富士市教育委員会

例　言

1　本書は、静岡県富士市岩本字滝戸原463番地の1外に所在する高徳坊遺跡第2・3地区の発掘調査報告書である。

2　調査は、富士川用水土地改良区（理事長 鈴木清見）による高徳坊東農道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、平成4・5年に富士市教育委員会が実施した。

3　高徳坊遺跡の試掘確認調査、本調査の期間は以下のとおりである。

試掘調査　平成4年8月19日～平成4年9月9日【2地区第1次調査】
　　平成5年8月24日～平成5年9月17日【3地区第1次調査】
本 調 査　平成6年2月25日～平成6年3月30日【3地区第2次調査】

4　調査体制は以下のとおりである。

試掘調査（平成4年度）

富士市教育委員会教育長	山本　厚
富士市教育委員会教育次長	小山哲雄
文化振興課課長	小長谷秀夫
課長補佐	若林富彦
係長	佐野誠一
担当	中尾欣司
	前田勝己
	景山英之

試掘調査（平成5年度）

富士市教育委員会教育長	山本　厚
富士市教育委員会教育次長	小山哲雄
文化振興課課長	小長谷秀夫
課長補佐	若林富彦
係長	佐野誠一
担当	前田勝己
	前嶋秀張

本調査（平成5年度）

富士市教育委員会教育長	山本　厚
富士市教育委員会教育次長	小山哲雄
文化振興課課長	小長谷秀夫
課長補佐	若林富彦
係長	佐野誠一
担当	平林将信
	前嶋秀張

目　次

例言
目次
第1章　調査の経緯と概要 …… 29
第2章　遺跡の立地と環境 …… 30
　第1節　地理的歴史的環境 …… 30
　第2節　基本土層 …… 30
第3章　平成4年度の調査 …… 34
　第1節　遺構と遺物 …… 34
　第2節　遺構外出土遺物 …… 36
第4章　平成5年度の調査 …… 36
　第1節　竪穴建物跡 …… 37
　第2節　土坑 …… 43
　第3節　遺構外出土遺物 …… 44
第5章　総括 …… 45

付表　出土遺物観察表
写真図版

挿図目次

第　1　図　地質図 …… 29
第　2　図　周辺遺跡分布図 …… 31
第　3　図　調査位置図 …… 31
第　4　図　調査全体図 …… 32
第　5　図　トレンチ配置・柱状図 …… 33
第　6　図　SX01 実測図 …… 34
第　7　図　SX01 出土遺物実測図 …… 35
第　8　図　SX02 出土遺物実測図 …… 35
第　9　図　H4 試掘トレンチ出土遺物実測図 …… 36
第１０図　遺構配置図 …… 38
第１１図　竪穴建物跡　実測図 …… 39
第１２図　SB01・02 実測図 …… 40
第１３図　SB01 出土遺物実測図 …… 40
第１４図　SB02・03・05・07 実測図 …… 41
第１５図　SB03 出土遺物実測図 …… 41
第１６図　SB01・04・05・06・08 実測図 …… 42
第１７図　SB04 出土遺物実測図 …… 43
第１８図　SB05 出土遺物実測図 …… 43
第１９図　SK01・02 実測図 …… 43
第２０図　H5 試掘トレンチ出土遺物実測図 …… 44
第２１図　東海条痕文系土器 …… 45
第２２図　高徳坊遺跡にみる菊川系土器 …… 46

第１章　調査の経緯と概要

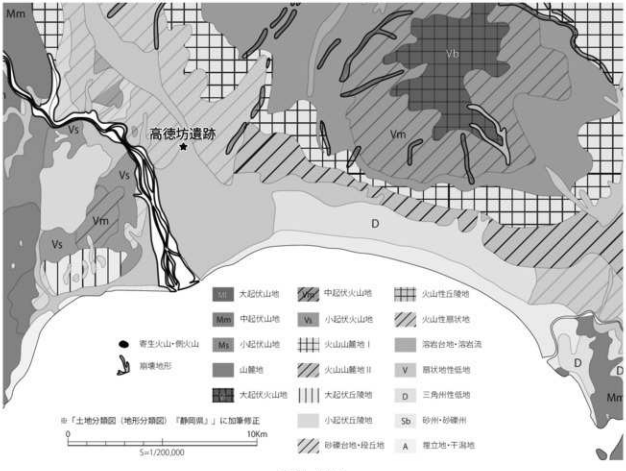
調査経緯　平成４年、富士川用排水土地改良区（理事長　鈴木清見）は、富士市岩本字滝戸原 463 番地の１外において高徳坊東農道改良工事を計画した。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「高徳坊遺跡」の範囲内に該当し、調査前の踏査においても多量の土器が採集されたことや、円墳と考えられていた滝戸原第２号墳（調査の結果、古墳でないことが明らかとなった）が存在することなどから、工事に先立ち試掘確認調査を行うこととなった。試掘調査は平成４年度、５年度に分けて行われた。

試掘・確認調査　平成４年度は、農道の東側部分を対象に行われ、テストピットを９個所を設定し掘削した。その結果、最も南側の TP02 において、弥生時代後期の性格不明土坑（SX01）１基を検出・調査した。そのほかのテストピットにおいては、遺物の出土は見られたものの遺構を検出するには至らず、遺物は斜面上方からの流れ込みであると判断された。

また、滝戸原第２号墳として登録されていた高まりは、単なる石の集積場所であることが明らかとなった。掘削面積は 157㎡である。

平成５年度は、農道の西側部分を対象に行われ、トレンチ７本を設定し掘削した。その結果、最も西側の１トレンチにおいて、複数の竪穴建物跡が切り合って検出され、弥生時代後期の土器も出土した。また、他のトレンチからも土器が出土したほか、2 トレンチからは、旧石器（先土器）時代の可能性が考えられる石器片（第 20 図１）や縄文時代早期後半の遺物が出土した。掘削面積は 80㎡である。

本調査　試掘確認調査の結果を受け、事業者との協議を重ね、複数の竪穴建物跡が検出された１トレンチ周辺の発掘調査を行うこととなった。調査の結果、弥生時代後期の竪穴建物跡８軒を検出、調査した。旧石器（先土器）時代の遺物は出土せず、また、縄文時代については数点の土器が出土したものの遺構は検出されなかった。　（佐藤）



第１図　地質図

第２章　立地と環境

第１節　地理的歴史的環境

富士市は有史以前より富士山や愛鷹山の新旧火山の影響をうけ、丘陵地を形成している。高徳坊遺跡は富士市の西部、富士川東岸にあたる星山丘陵上の南東斜面に立地している。星山丘陵は古富士泥流による堆積地で、北側や東側では河岸段丘が形成される。丘陵の南東は沖積層で構成され様相は大きく異なる。

遺跡の北は岩本山で富士宮市と隣接し、羽渕平遺跡（縄文時代中期）、奥の原Ａ・Ｂ遺跡（縄文時代中期・平安時代の灰釉陶器）が存在している。星山丘陵の南斜面沿いでは西に上井奈遺跡（縄文時代中期・弥生・古墳時代）、念信園遺跡（縄文時代中期から後期）が、東側の丘陵下には潤井川を挟み沢東Ａ・Ｂ遺跡（古墳・奈良・平安時代）がある。

また、富士川を挟んだ西側は、旧富士川町松野地区が存在する。松野地区には、浅間林遺跡、中野遺跡、清水岩ノ上遺跡など、縄文時代から、弥生時代、平安時代に至るまで連綿と遺跡が形成されている。その現象は、高徳坊遺跡をはじめとした星山丘陵上の遺跡と他地域との関係を考える上で、重要な位置を占めているものと考えられる。

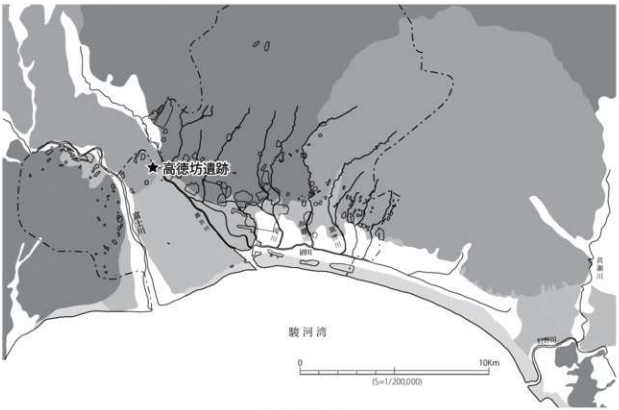
（服部）

第２節　基本土層

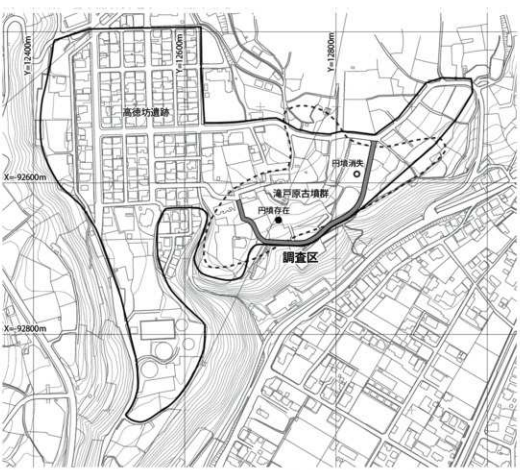
表土・盛土除去後の基本層位はⅠ～Ⅴ層が確認された。Ⅰ層は黒褐色粘質土で少量の大淵スコリアを含み遺物の包含層である。Ⅱ層は黒褐色粘質土で多量の大淵スコリアとカワゴ平パーミスを含み、弥生土器・土師器の包含層である。Ⅲ層は暗褐色粘質土でカワゴ平パーミスを含み、縄文土器の包含層である。Ⅳ層は暗黄褐色粘質土でカワゴ平パーミスを微量に含む。Ⅴ層は黄褐色粘質土でカワゴ平パーミスを微量に含む。

平成４年度の試掘調査ではTP01でⅠ～Ⅲ層、TP04でⅡ層、TP06でⅠ層を確認した。平成５年度の試掘調査のTr01中央部でⅠ・Ⅱ層、Tr02ではⅠ～Ⅴ層が確認した。平成６年度の本調査ではⅠ～Ⅲ層を指針とし遺構が検出された。

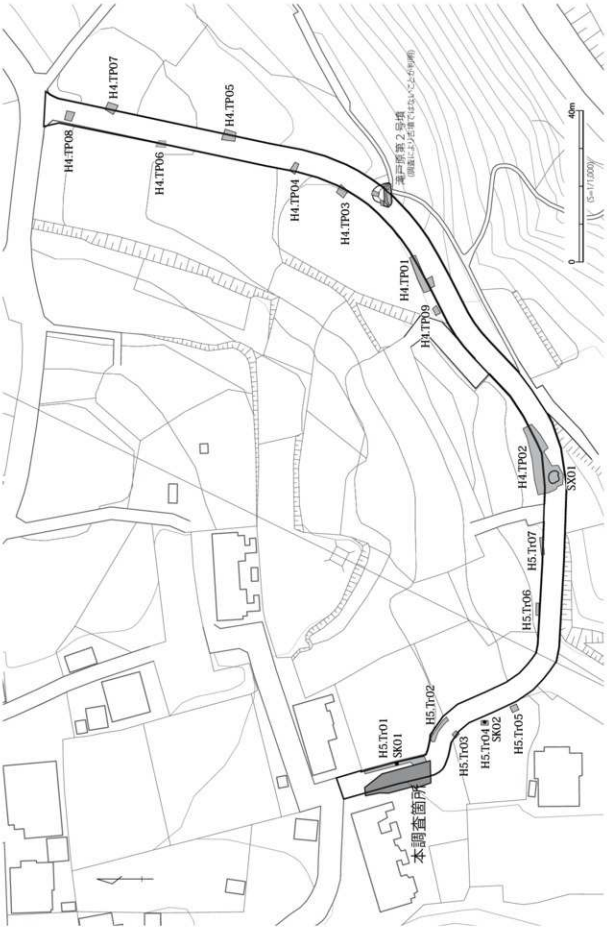
（服部）



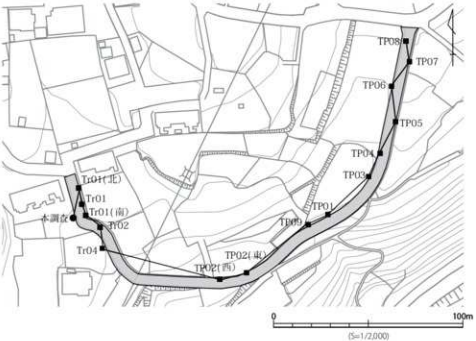
第２図　周辺遺跡分布図

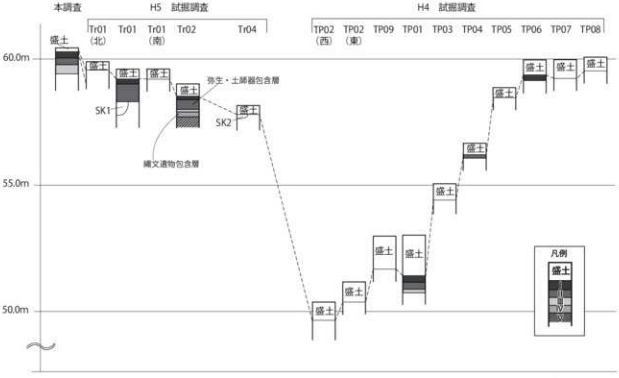


第３図　調査位置図 (S=1/5,000)


H4.TP07
H4.TP08
H4.TP05
H4.TP06
H4.TP04
H4.TP03
H4.TP01
H4.TP09
H4.TP02
SX01
H5.Tr07
H5.Tr06
H5.Tr02
H5.Tr01
SK01
H5.Tr03
H5.Tr04
SK02
H5.Tr05
本調査箇所
0
40m
(S=1/1000)

第４図　調査全体図





層	色調	※Ob5	※KgP	粘性	しまり	備考
I	黒褐色土	少量	なし	やや強い	やや弱い	遺物包含層
II	黒褐色土	多量	多量	やや強い	やや弱い	弥生・古墳時代の包含層
III	明褐色土	なし	少量	やや強い	やや強い	縄文時代の包含層
IV	明黄褐色土	なし	微量	やや強い	やや強い	
V	黄褐色土	なし	微量	強い	やや弱い	

※ Ob5：大淵スコリア
※ KgP：カワゴ平パーミス

第５図　トレンチ配置・柱状図

第３章　平成４年度の調査

TP01 ～ TP09 のテストピットを設定し試掘・確認調査を実施した。

調査の結果、TP02 から SX01 が検出され、弥生時代後期の土器もあわせて出土した。他のトレンチでは遺構は確認されなかったものの、弥生時代後期を中心として、中世の遺物まで出土した。

また、滝戸原第２号墳として登録されていた高まりは、調査の結果、単なる石の集積であることが明らかとなった。

第１節　遺構と遺物

（1）遺構と出土遺物

SX01

位置・規模・構造（第６図）　TP02 内の南西部で検出された。形状は平面が円形、断面は皿状を呈する。規模は長径 3.45m、短径 2.90m を測り、最深部は 0.15m を測る。標高は検出面で約 49.55m である。礫や炭化物などは確認されなかった。

出土遺物（第７図１～９）　土器が８点、石製品１点が出土した。第７図１～３は壺の口縁部である。１は複合口縁の壺と考えられ、口縁部に縦方向に棒状の浮文が４条認められる。頸部は弧状に彎曲し、胎土に白色粒子を含む。

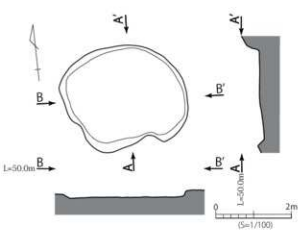
４は小型の壺と考えられ、平底の底部と胴下半が残存する。５は体部の一部であるが、摩滅が激しく不明瞭である。６は頸部が短く、胴部の張りが小さい甕である。器壁が薄く、内外面の刷毛目調整が明瞭である。７は台付甕の口縁部で、口唇部は面取りが施され、刻み目を付す。刷毛目による調整が施される。８は台付甕の台部で、ほぼ直線状に開いている。９は砥石で、磨耗した面は２面である。側面の研ぎ痕は線状に残り明瞭である。

時期　遺構からは目的・用途が判然としないため判断が困難であるが、壺の口縁部や台付甕などの遺物より弥生時代後期と考えられる。

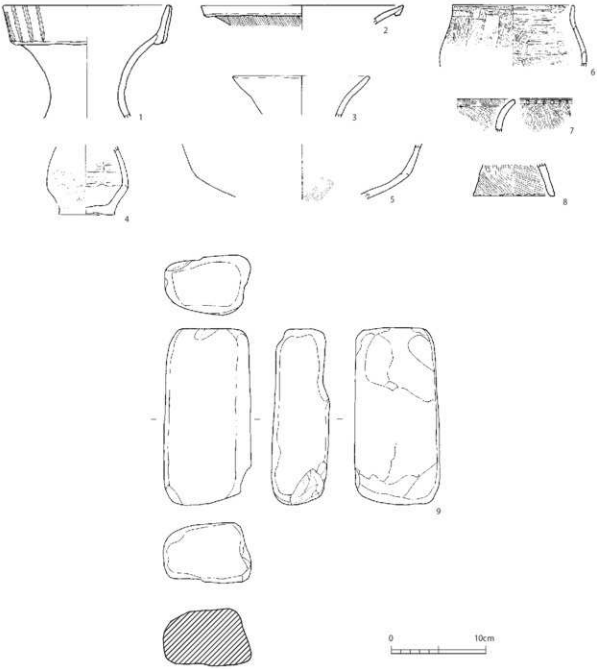
SX02

TP01 内の調査で遺構として認識していたが、後の検証から遺構ではないことが判明した。ここでは出土した遺物のみ記載する。

出土遺物（第８図１・２）　甕が２点出土した。第８図１は体部が長胴型で、頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部の張りが小さく、最大径は胴部の中位である。刷毛目調整が施され、長胴甕か台付甕と考えられる。２は球胴型で、胴部径が口径より大きい。最大径は胴部の上位から中位で、刷毛目調整が施される。台部破損の台付甕と推定される。



第６図　SX01 実測図



第７図　SX01 出土遺物実測図

第８図　SX02 出土遺物実測図

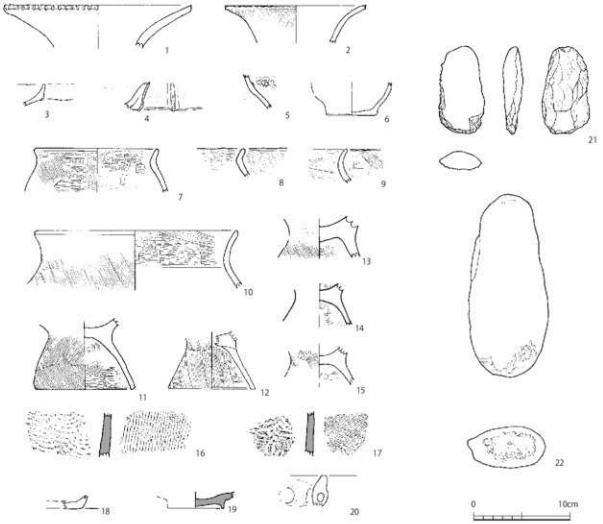
第２節　遺構外出土遺物

図化可能な 22 点を掲載した（第９図）。TP01 から２点（10・18）、TP02 から 19 点（1 ～ 9・11 ～ 17・20 ～ 22）は、TP03 から１点（19）が出土した。

1 ～ 4 は壺の口縁部である。1 は口縁部が大きく外反し口唇部に刻みを有す。外面は刷毛目があるようだが摩滅のため判然としない。2 は大きく外反し、3 は短く直立している。4 は棒状の浮文が縦に貼付される。5 は壺の肩部で刷毛目調整後に羽状縄文が施される。円形の浮文が貼付される。6 は小型壺の底部～胴部で、屈曲部分が最大径と考えられる。

7 ～ 10 は甕の破片で、内外面に刷毛目が施された口縁部である。7・8 は短い口縁部で頸部が屈曲し、9 は頸部が緩やかな弧状を呈す。10 は甕の口縁から頸部で、屈曲は緩く、内外面刷毛目調整が施される。11 ～ 15 は台付甕で、台部～接合部である。11 は台部が「ハ」の字状にやや内湾しながら垂下する。

16・17 は須恵器の甕で、体部と考えられる。16 の断面は紫色を呈している。18 は土師器、19 は陶器の底部である。20 は土師質鍋の口縁部で、把手あるいは釣手部分と考えられる。（服部）



第９図　H4 試掘トレンチ出土遺物実測図

第４章　平成５年度の調査

遺構・遺物の確認を目的に、トレンチを７か所設定し掘削を行った。その結果、対象地の西端において、竪穴建物跡が多数検出されたため、本調査を実施することとなった。本調査では、弥生時代後期の竪穴建物跡を８軒検出・調査した。

また、試掘・確認調査では、旧石器（先土器）時代のものと想定される石器や、縄文時代の土器では、東海条痕文系土器の中でも、入海式の搬入品や併行する時期の土器、後続する石山式と考えられる土器片が出土した。

第１節　竪穴建物跡

SB01

位置・規模・構造（第 11・12 図）　調査区東側に位置する。東部分の大半は調査区外であるが、主柱を有す竪穴建物跡と考えられる。SB02・SB04・SB05 と重複関係にあり、SB01 が SB02・04・05 を切っていると判断した。

規模は残存部分で南北約 4.50m、東西 1.80m が残存する。柱穴より判断した主軸は N-27°-W である。掘り込みは 10 ～ 20cm が確認された。柱穴の規模は北の柱穴で径 40 ～ 45cm、南の柱穴は 35 ～ 40cm を測る。形状は円形で柱穴の間隔は 2.95m である。燃焼施設、貼床、壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第 13 図１・２）　第 13 図１・２は壺で、折返しの口縁部に棒状浮文を縦位に貼付する。１は折返し端部の上方への引き上げが認められる。内面は縄文と斜め方向の刷毛目調整が施される。

時期　出土遺物より弥生時代後期と考えられる。

SB02

位置・規模・構造（第 11・12 図）　調査区の南東部に位置する。遺構の大半がカクランと調査区外であるが、主柱を有す竪穴建物跡と考えられる。SB01・05 と重複関係にあり、SB01 に切られ SB05 を切っていると判断した。

規模は残存部分で南北約 2.85m、東西 2.00m が残存し、平面形状は隅丸方形と推定した。柱穴より判断した主軸は N-45°-W である。掘り込みは 10 ～ 20cm が確認された。柱穴の規模は北の柱穴で径 50 ～ 60cm、南の柱穴は 40 ～ 50cm を測る。形状は円形で柱穴の間隔は 2.77m である。燃焼施設、貼床、壁溝は確認されなかった。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺構の切り合い関係から弥生時代後期と考えられる。

SB03

位置・規模・構造（第 11・14 図）　調査区の南西部に位置する。平面形状が隅丸方形の竪穴建物跡と考えられる。SB05・07 に切られ、立ち上がりの一部が残存するのみである。また、SB04・06 を切っていると判断とした。

規模は南北約 4.30m、東西約 2.30m が残存しており、主軸は N-37°-W である。掘り込みは 5cm が確認された。他の遺構との重複関係が激しく、柱穴を断定するには至らなかった。燃焼施設・貼床・壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第 15 図１～５）　第 15 図１は複合口縁部を有す壺の頸部～口縁部片である。口縁に棒状の浮文が３条貼付され、羽状（結束）縄文が施される。下端部には刻みが認められる。３の甕は口唇部に刻みを施し、内外面に刷毛目調整が認められる。４は甕の底部で、外面は粗い縦方向の刷毛目調整、内面はしぼり痕が認められる。色調が白く、胎土が他の土器と大きく異なる。５は口縁部片で、口唇部に刻みが施される。

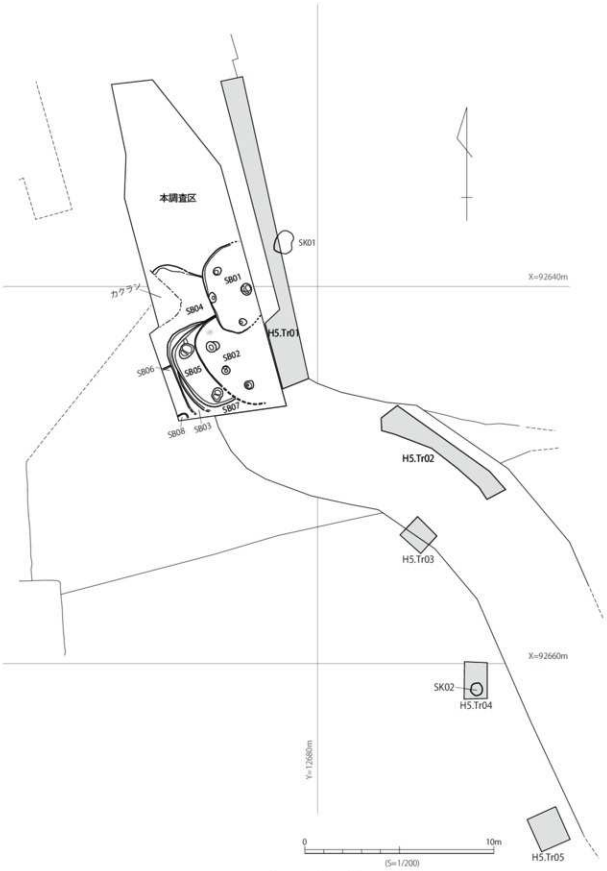
時期　出土遺物より弥生時代後期と考えられる。

SB04

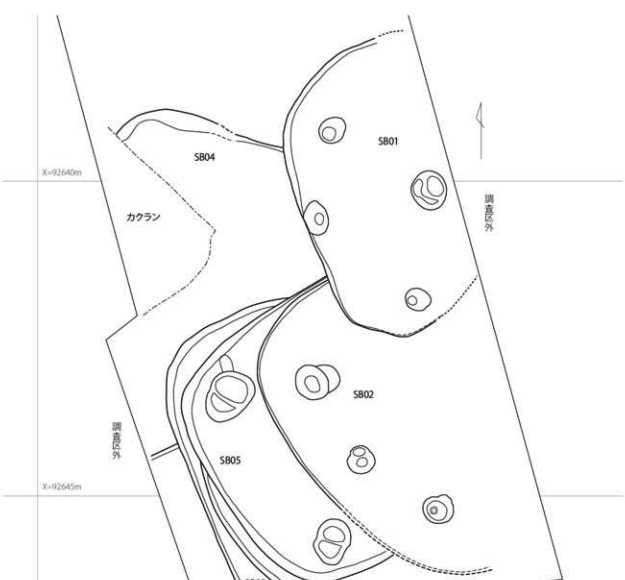
位置・規模・構造（第 11・16 図）　調査区の中央部に位置する。北側の立ち上がりの一部が確認され、平面形状が隅丸方形を呈する竪穴建物跡と考えられる。重複関係より SB01・03・05・06 に切られているため最も古いものと考えられる。主軸は N-15°-E である。

規模は残存部分で東西約 3.30m が残存する。深さは約 30cm である。燃焼施設・貼床・壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第 17 図１）　第 17 図１は折返しを有す壺の口縁部である。折返し端部の上方への引き上げが認められる。外面は口唇部に斜め方向、口縁部に横方向の刷毛目調


本調査区
SK01
X=92640m
カクラン
SB01
SB04
H5.Tr01
SB02
SB06
SB05
SB07
SB08
SB03
H5.Tr02
H5.Tr03
X=92660m
SK02
H5.Tr04
Y=12680m
0
10m
(S=1/200)
H5.Tr05

第 10 図　遺構配置図



第 11 図　竪穴建物跡　実測図

整、内面は羽状縄文が施される。口縁部の折返し部分をやや引き出す点は菊川式の影響も考えられる。

時期　出土遺物より弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（第 18 図 1）　1 は壺の口縁部で、厚い折返しを有し、口唇部は肥厚である。内外面に刷毛目調整が施される。

時期　出土遺物より弥生時代後期と考えられる。

SB05

位置・規模・構造（第 14 図）　調査区南部やや西よりに位置する。平面形状が隅丸方形の竪穴建物跡と考えられる。SB02 より古く、SB03・04・07 より新しいと判断した。

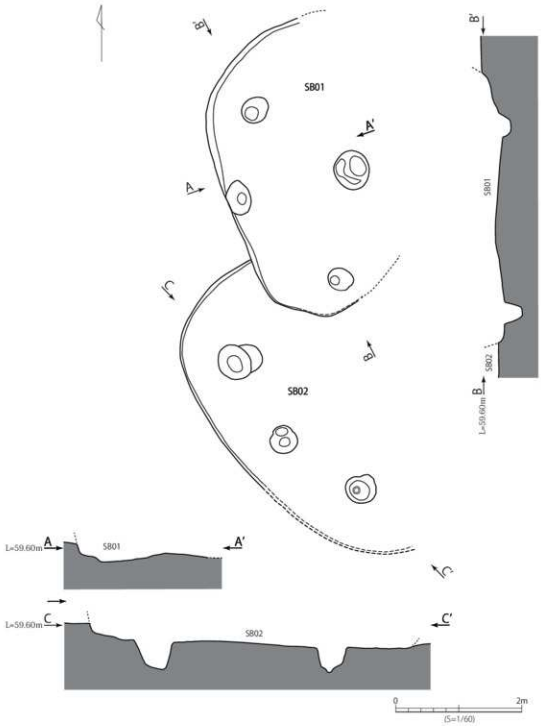
規模は残存部分で南北約 4.20m、東西約 3.00m が残存し、主軸は N-30°-W である。掘り込みは約 6cm が確認された。燃焼施設・貼床・壁溝は確認されなかった。

SB06

位置・規模・構造（第 11・16 図）　調査区の南西部に位置する。SB03 に切られ、SB04 を切っている。主軸は推定 N-65°-E である。燃焼施設・柱穴・貼床・壁溝は確認されなかった。

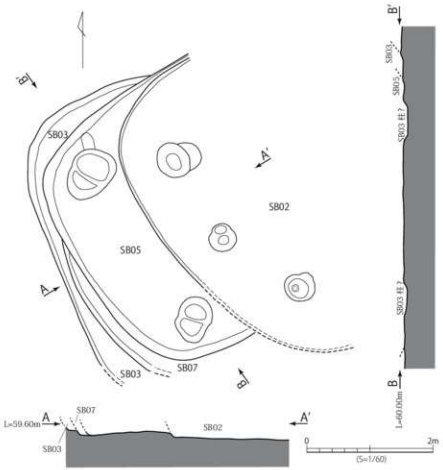
出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺構の切り合い関係から弥生時代後期と考えられる。

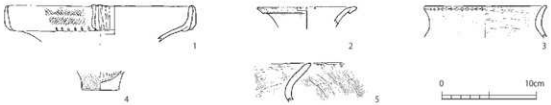


第 12 図　SB01・02 実測図

第 13 図　SB01 出土遺物実測図



第 14 図　SB02・03・05・07 実測図



第 15 図　SB03 出土遺物実測図

SB07

位置・規模・構造（第 11・14 図）　調査区の南西部に位置する。他の遺構に切られ、西側の立ち上がりの一部を検出したのみである。

計測可能なプランの規模は、南北約 2.50m、東西約 0.20m である。主軸は N-38°-W である。

燃焼施設・貼床・壁溝は確認されなかった。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺構の切り合い関係から弥生時代後期と考えられる。

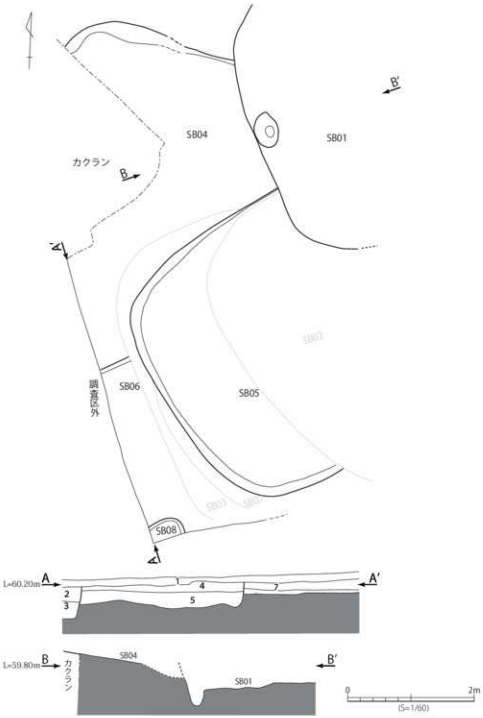
SB08

位置・規模・構造（第 11・16 図）　調査区の南西端で床面とプランの一部が検出された。竪穴建物跡と推測したが、明らかでない。重複関係では SB06 より新しいと考えられる。

計測可能なプランの規模は、南北約 030m、東西約 0.50m で、主軸は N-38°-W である。燃焼施設・柱穴・貼床・壁溝は確認されなかった。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺構の切り合い関係から弥生時代後期と考えられる。

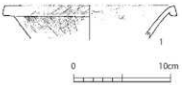


層	色調	SuZ	ObS	KgP	粘土	焼土	粘性	しまり	含有物	住居址
1	明褐色土	微量	微量	なし	なし	なし	なし	ハード		
2	明褐色土	小量	少量	なし	なし	少量	なし	ややソフト		SB08 覆土
3	明黄褐色土	なし	微量	なし	なし	なし	やや弱	ややソフト	褐色土ブロック	SB08 覆土
4	明褐色土	微量	微量	微量	なし	なし	やや弱	ややソフト	褐色土粒子	SB06 覆土
5	黒褐色土	なし	少量	微量	なし	なし	やや弱	ややハード	褐色土粒子	SB06 覆土
6	黄褐色土	なし	なし	なし	なし	なし	やや強	ややハード	黄褐色土ローム多量	SB06 掘り方埋土
7	明褐色土	微量	なし	なし	なし	なし	なし	ややソフト		SB04 覆土
8	黒褐色土	なし	微量	微量	なし	なし	なし	ややハード		SB04 覆土

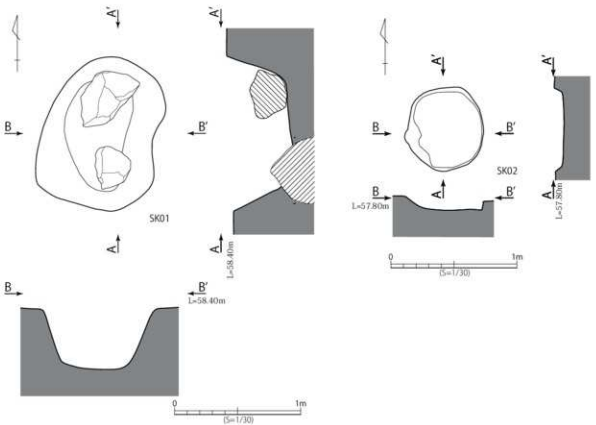
ZuN: 砂沢スコリア
ObS: 大淵スコリア
KgP: カワゴ平パミス

第 16 図　SB01・04・05・06・08 実測図

第 17 図　SB04 出土遺物実測図



第 18 図　SB05 出土遺物実測図



第 19 図　SK01・02 実測図

第２節　土坑

SK01

位置・規模・構造（第 19 図）　1 トレンチの中央に位置する。主軸は N-10°-E を指向し、規模は長径 1.20m、短径 0.87m、最深部は 0.50m を測る。形状は平面が不整形な楕円形状で、断面は逆台形状を呈する。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　時期不明

SK02

位置・規模・構造（第 19 図）　4 トレンチの中央南に位置する。規模は長径 0.66m、短径 0.62 m、最深部は 8cm を測る。形状は平面が楕円形、断面は皿状を呈する。標高は検出面で約 57.80m である。盛土直下の層から検出され、礫などは確認されなかった。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　時期不明

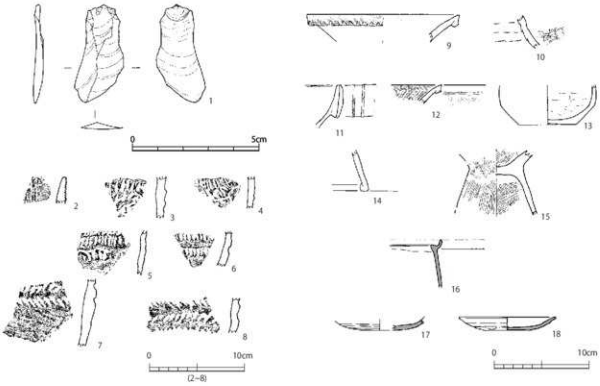
第３節　遺構外出土遺物

トレンチから 18 点が出土した。黒曜石１点、縄文土器片７点、弥生土器７点、陶器片３点である。

第 20 図１は石刃状の縦長剥片で、黒曜石製で旧石器（先土器）時代の可能性がある。

２～８は縄文土器片である。早期後半から末にかけての東海条痕文系土器の一群である。２は２条の縦位沈線が認められ、細い櫛状の施文が施される。３は体部で、爪形文が施される。ナデと鋭利な刺突が認められるが、ややばらつきが多い。内面はナデによる凹凸が認められる。石山式か、あるいは石山式に併行するものと考えられる。４は体部片で、浅い羽状の刻みと、刻目のある隆帯が貼付されている。５は波状の口縁部を有し、口唇部の直下に刻みが列状に施される。体部には、緩やかな波状の隆帯に刻みが施され貼付されている。内面にナデが認められる。４・５は入海Ⅱ式と考えられる。６は体部片で、２条の刻み目の列が施される。１条の刻みの列にはナデによるわずかな隆起が認められ、もう１条はやや深めの刻みが施される。石山式あるいは石山式併行と考えられる。７・８は半截半管状工具による刻みが列状に刺突される。石山式あるいは石山式併行と考えられる。

９～15 は弥生時代後期の遺物である。９は厚い折返しを有す口縁部で、口唇部下位に刷毛工具による刻みが施される。10 は輪積み痕が明瞭な壺の胴部で、外面は縦方向の刷毛目が認められる。11 は複合口縁を呈す壺の口縁部で、縦方向に棒状浮文が２条貼付される。12 は折返しを有す口縁部で、折り返し部分を引き上げ、口唇部を摘み上げている。内面は羽状（結束）縄文が施される。13 は壺の底部で、外面がナデ調整、内面は粗い横方向のヘラナデによる調整が施される。直線状の立ち上がりとわずかに内向気味な立ち上がりを呈する。14 は台付甕の台部で、内外面ともナデ調整が施される。15 は台付甕の台部で、やや内湾気味に下がり、外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目調整が施される。16 は陶器で、蓋物の可能性がある。17・18 は近世陶器の小皿と考えられる。（服部）



第 20 図　H5 試掘トレンチ出土遺物実測図

第４章　総括

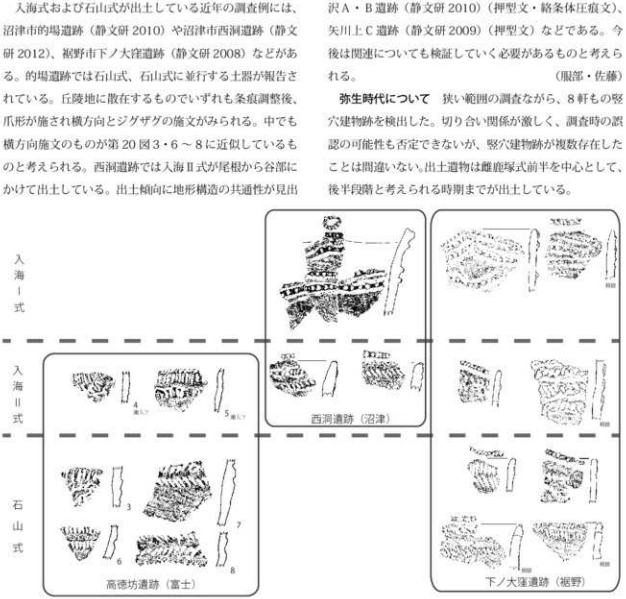
旧石器（先土器時代）について　明確な遺構は検出されなかったものの当該期の可能性が考えられる遺物（第20図１）が出土した。明らかな旧石器（先土器）時代の遺物ではないため、後述する縄文時代早期後半頃の遺物であることは否定できないが、これまで、当該期の遺物が知られていない星山丘陵において発見された意義は小さくない。出土土層が明らかでないのが、残念である。　（佐藤）

縄文時代について　旧石器（先土器）時代同様、明確な遺構を確認することはできなかった。しかし、前述のとおり入海式や石山式を中心とする早期後半から末にかけての東海条痕文系土器の出土が注目される。

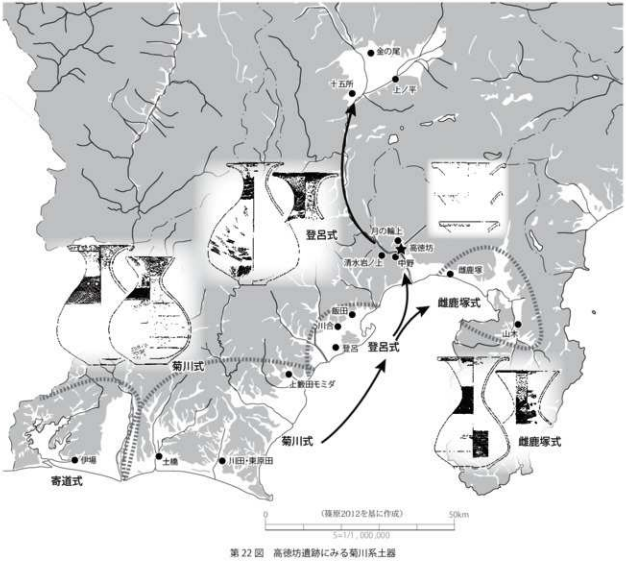
入海式および石山式が出土している近年の調査例には、沼津市的場遺跡（静文研 2010）や沼津市西洞遺跡（静文研 2012）、裾野市下ノ大窪遺跡（静文研 2008）などがある。的場遺跡では石山式、石山式に並行する土器が報告されている。丘陵地に散在するものでいずれも条痕調整後、爪形が施され横方向とジグザグの施文がみられる。中でも横方向施文のものが第20図３・６～８に近似しているものと考えられる。西洞遺跡では入海Ⅱ式が尾根から谷部にかけて出土している。出土傾向に地形構造の共通性が見出せるかは今後の課題としたい。下ノ大窪遺跡ではまとまった点数で入海Ⅰ・Ⅱ、石山式および併行の土器が出土している。「石山式模倣土器で刻目施文に角棒状の箆が使用される土器」が報告されており、第20図７・８に酷似していた。本稿では石山式あるいは石山式併行で、半截半管状工具による刻みとしている。

富士山麓から愛鷹山麓にかけては、前段階と考えられる押型文土器が出土する遺跡例もある。おなじ星山丘陵の万野遺跡（押型文・田戸式）、富士山南麓のジンゲン沢遺跡（富士市教委 2007）（野島式・鵜ガ島台式）、愛鷹山南西麓の向山遺跡（富士市教委 1991）（押型文・貝殻条痕文）、陣ヶ沢Ａ・Ｂ遺跡（静文研 2010）（押型文・絡条体圧痕文）、矢川上Ｃ遺跡（静文研 2009）（押型文）などである。今後は関連についても検証していく必要があるものと考えられる。　（服部・佐藤）

弥生時代について　狭い範囲の調査ながら、８軒もの竪穴建物跡を検出した。切り合い関係が激しく、調査時の誤認の可能性も否定できないが、竪穴建物跡が複数存在したことは間違いない。出土遺物は雌鹿塚式前半を中心として、後半段階と考えられる時期までが出土している。



第21図　東海条痕文系土器



第 22 図　高徳坊遺跡にみる菊川系土器

東駿河における弥生時代後期の土器は、壺に羽状縄文を施文する手法を採用する「雌鹿塚式土器」である。この雌鹿塚式土器の組成のなかに、遠江の「菊川式」もしくは、その影響を受けた「モミダ型」（篠原 2001）との関連を想定させる土器片（第 13・17・18 図 1、第 20 図 9）が出土したことは注目される。近年、篠原和大氏が指摘するように、弥生時代後期に西駿河を中心に成立する登呂式土器の成立には菊川式土器や中部高地系土器との強い影響・地域間交渉が考えられている（篠原 2009・2010・2012 など）。

星山丘陵の南側斜面に立地する高徳坊遺跡から菊川系土器の影響を受けた土器が出土していることは、前述のとおり地域間交渉が活発になってきたことを端的に示している。また、富士川を挟んだ岩渕火山地の先端、鉱地でも、当該期の遺跡が知られており、特に富士市（旧富士川町）清水岩の上遺跡などの存在は、「遠江系の北進」とも言える状況を示していると考えられる。

古墳時代について　今回の調査では、滝戸原第２号墳とされていた高まりが、古墳ではないことが明らかとなった。ただし、トレンチ調査ながら須恵器の破片が出土していることには注視する必要がある。特に平成４年度の試掘調査において断面がチョコレート色～紫色を示す須恵器片（第 9 図 16）が出土している。色調のみからその時期や生産地を確定することが困難かもしれないが、古墳時代中期におさまる可能性が指摘できよう。

遺跡の眼下には、潤井川を挟み沢東Ａ遺跡や沢東Ｂ遺跡が存在する。沢東Ａ遺跡では、これまでに、３点もの子持ち勾玉や多数の石製模造品が出土し、初期須恵器【TK208 型式を含む】（鈴木 1999）が比較的まとまって出土している。今回、出土した須恵器が初期須恵器であるとは断定できないが、今後、眼下の遺跡との構造的理解を試みる際の投げかけは出来たものと考えられる。

最後に　高徳坊遺跡の立地する星山丘陵上では、現在広大な面積の茶畑が広がっている。富士山と茶畑の組み合わせは、いかにも静岡県らしい風景であると言える。そのおかげで、多くの遺構や遺物は地下に守られたままの状態となっている反面、その土地のもつ歴史的情報を未だ整理できていないとも言える。それにも関わらず、貴重な調査成果の公表が遅れてしまったことは、誠に遺憾であった。

今後は、周辺の調査成果の進展と合わせ、複合的・構造的な理解を行えるように、速やかな調査成果の公表を行っていきたい。　（佐藤）

参考文献

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『下ノ大窪遺跡』中日本高速道路株式会社

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009『矢川上Ｃ遺跡』中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『天ヶ沢東遺跡・古木戸Ａ遺跡・古木戸Ｂ遺跡』中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『下高原遺跡』中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『富士山・愛鷹山麓の遺跡』中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『的場古墳群・的場遺跡』中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011『西洞遺跡Ⅰ』中日本高速道路株式会社東京支社

静岡県埋蔵文化センター 2012『西洞遺跡Ⅱ』中日本高速道路株式会社東京支社

篠原和大 2001「駿河地域の後期弥生土器と土器の移動（補遺）」『シンポジウム　弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』

篠原和大 2009「南関東・東海東部地域の弥生後期土器の地域性－とくに菊川式土器の東京湾北東岸への移動について－」『南関東の弥生土器２～後期土器を考える～』六一書房

篠原和大 2010「駿河地域の中部高地系と有東式・登呂式土器」『中部高地南部における櫛描文系土器の拡散』山梨県考古学協会

篠原和大 2012「登呂の時代の駿河と赤彩土器」『赤い土器の世界～登呂式土器の赤彩を探る～』静岡市立登呂博物館

鈴木敏則 1999「静岡県内における初期須恵器の流通とその背景」『静岡県考古学研究』No.31

富士市教育委員会 1991『向山遺跡』

富士市教育委員会 2007『ジンゲン沢遺跡』

富士市教育委員会 2008『弥宜ノ前遺跡　市立吉原商業高等学校屋内運動場改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

小林達雄編 2008『総覧縄文土器』

知多文化研究会 1997『愛知県南知多町の考古資料－南知多町誌資料編六抜刷－』

出土遺物観察表

※　口径・底径の（　）内は推定値である。
　　器高の（　）内は残存値である。
　　残存率は図示中での残存率を示した。

土器

遺物番号	縮図	図版	遺構番号	種別	器別	残存率	口径	器高	底径	内面色調		外面色調		備考
SX01-1	7	3	SX01	弥生土器	壺	(20%)	(17.6)	(12.0)	-	5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
SX01-2	7	3	SX01	弥生土器	壺	(20%)	(21.2)	(2.0)	-	10YR6/2	灰黄褐	7.5YR7/6	橙	
SX01-3	7	3	SX01	弥生土器	壺	(20%)	(14.4)	(4.5)	-	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
SX01-4	7	3	SX01	弥生土器	壺	(65%)	-	(7.2)	(5.6)	10YR4/3	にぶい黄褐	7.5YR5/4	にぶい褐	
SX01-5	7	3	SX01	弥生土器	壺	(20%)	-	(5.8)	-	7.5YR7/6	橙	5YR6/6	橙	
SX01-6	7	3	SX01	弥生土器	甕	(20%)	(12.8)	(6.5)	-	7.5YR6/6	橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
SX01-7	7	3	SX01	弥生土器	甕	-	-	(3.5)	-	5YR6/6	橙	10YR4/2	灰黄褐	
SX01-8	7	3	SX01	弥生土器	甕	(25%)	-	(3.3)	(8.6)	10YR7/6	明黄褐	10YR7/6	明黄褐	
SX02-1	8	3	SX02	弥生土器	甕	(45%)	(15.0)	(17.2)	-	2.5YR6/6	橙	2.5YR5/6	明赤褐	
SX02-2	8	3	SX02	弥生土器	甕	(25%)	(16.5)	(18.1)	-	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	
1	9	4	H4 試掘	弥生土器	壺	(20%)	(19.0)	(4.4)	-	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
2	9	4	H4 試掘	弥生土器	壺	(20%)	(14.4)	(3.8)	-	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
3	9	4	H4 試掘	弥生土器	壺	-	-	(2.2)	-	7.5YR7/6	橙	10YR7/6	明黄褐	
4	9	4	H4 試掘	弥生土器	壺	-	-	(3.0)	-	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
5	9	4	H4 試掘	弥生土器	壺	-	-	(3.6)	-	10YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR8/8	黄橙	
6	9	4	H4 試掘	弥生土器	壺	(40%)	-	(3.4)	5.2	10YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR7/6	橙	
7	9	4	H4 試掘	弥生土器	甕	(20%)	(12.8)	(4.5)	-	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	
8	9	4	H4 試掘	弥生土器	甕	-	-	(3.0)	-	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい褐	
9	9	4	H4 試掘	弥生土器	甕	-	-	(2.2)	-	7.5YR6/6	橙	7.5YR5/4	にぶい褐	
10	9	4	H4 試掘	弥生土器	甕	(20%)	(20.7)	(6.2)	-	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
11	9	4	H4 試掘	弥生土器	甕	(60%)	-	(7.2)	10.2	2.5YR5/6	明赤褐	7.5YR6/6	橙	
12	9	4	H4 試掘	弥生土器	甕	(25%)	-	(5.3)	(9.0)	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
13	9	4	H4 試掘	弥生土器	甕	(60%)	-	(3.7)	-	5YR7/4	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	
14	9	4	H4 試掘	弥生土器	甕	(70%)	-	(3.7)	-	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	
15	9	4	H4 試掘	弥生土器	甕	(90%)	-	(4.0)	-	10YR6/8	赤橙	5YR7/8	橙	
16	9	4	H4 試掘	須恵器	甕	-	-	(4.6)	-	5Y6/2	灰オリーブ	5Y6/2	灰オリーブ	断面はチョコレート色
17	9	4	H4 試掘	須恵器	甕	-	-	(4.7)	-	2.5Y5/2	暗黄褐	2.5Y5/1	黄灰	
18	9	4	H4 試掘	土師器	坏	-	-	(1.3)	-	5YR7/6	橙	5YR7/6	橙	
19	9	4	H4 試掘	陶器	碗	(90%)	-	(1.2)	5.5	7.5YR6/3	オリーブ黄	10YR8/3	浅黄橙	一部に灰釉
20	9	4	H4 試掘	土師質	鍋	-	-	(3.2)	-	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
SB01-1	13	5	SB01	弥生土器	壺	(20%)	(19.4)	(3.3)	-	5YR7/8	橙	7.5YR7/6	橙	
SB01-2	13	5	SB01	弥生土器	壺	-	-	(2.4)	-	10YR7/6	明黄褐	10YR7/6	明黄褐	
SB03-1	15	5	SB03	弥生土器	壺	(20%)	(19.5)	(4.0)	-	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
SB03-2	15	5	SB03	弥生土器	壺	(25%)	(10.3)	(2.1)	-	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
SB03-3	15	5	SB03	弥生土器	甕	(20%)	(12.5)	(3.3)	-	7.5YR7/6	橙	10YR7/6	明黄褐	
SB03-4	15	5	SB03	弥生土器	甕	(80%)	-	(2.0)	(3.9)	7.5YR8/6	浅黄橙	10YR8/6	黄橙	
SB03-5	15	5	SB03	弥生土器	甕	-	-	(4.1)	-	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	
SB04-1	17	5	SB04	弥生土器	壺	-	-	1.9	-	7.5YR6/6	橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
SB05-1	18	5	SB05	弥生土器	壺	(20%)	(17.6)	(3.4)	-	5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
2	20	6	H5 試掘	縄文土器		-	-	(2.7)	-	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/2	灰黄褐	
3	20	6	H5 試掘	縄文土器		-	-	(3.2)	-	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR3/6	暗赤褐	石山式併行か
4	20	6	H5 試掘	縄文土器		-	-	(3.2)	-	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR6/2	灰黄褐	入海Ⅱ式
5	20	6	H5 試掘	縄文土器		-	-	(4.5)	-	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	入海Ⅱ式
6	20	6	H5 試掘	縄文土器		-	-	(3.5)	-	10YR5/4	にぶい黄褐	5YR5/6	明赤褐	石山式併行か

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調		外面色調		備考
7	20	6	H5 試掘	縄文土器		-	-	(7.0)	-	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	石山式併行か
8	20	6	H5 試掘	縄文土器		-	-	(3.5)	-	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	石山式併行か
9	20	5	H5 試掘	弥生土器	壺	(20%)	(16.0)	(3.0)	-	10YR7/4	にぶい黄橙	5YR7/6	橙	
10	20	5	H5 試掘	弥生土器	壺	-	-	(3.6)	-	10YR6/4	にぶい黄橙	7.5YR7/6	橙	
11	20	5	H5 試掘	弥生土器	壺	-	-	(4.5)	-	7.5YR7/4	にぶい橙	5YR7/8	橙	
12	20	5	H5 試掘	弥生土器	壺	-	-	(2.0)	-	7.5YR7/6	橙	10YR6/4	にぶい黄橙	
13	20	5	H5 試掘	弥生土器	壺	(50%)	-	(4.2)	(6.0)	2.5Y4/1	黄灰	10YR6/6	明黄褐	
14	20	5	H5 試掘	弥生土器	甕	-	-	(4.3)	-	7.5YR6/6	橙	10YR6/6	明黄褐	
15	20	5	H5 試掘	弥生土器	甕	(80%)	-	(6.2)	-	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
16	20	6	H5 試掘	陶器	器物	-	-	(5.1)	-	5Y6/3	オリーブ黄	5Y6/3	オリーブ黄	
17	20	6	H5 試掘	陶器	皿	(20%)	-	(1.5)	4.1	5YR4/6	赤褐	5YR5/6	明赤褐	
18	20	6	H5 試掘	陶器	皿	20%	10.0	1.4	4.7	5YR4/3	にぶい赤褐	5YR4/3	にぶい赤褐	

石製品

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	重量	長さ	幅	厚さ
SX01-9	7	6	SX01	石製品	礫石	2051.39	18.5	9.2	5.8
21	9	6	H4 試掘	石製品	石斧	98.78	9.0	4.7	1.8
22	9	6	H4 試掘	石製品	敲き石	944.88	19.0	8.3	4.2
1	20	6	H5 試掘	石製品	剥片	1.75	3.9	1.9	0.3

写 真 図 版

高徳坊遺跡　第２・３地区 出土土器

（撮影　小田貴子）

1.　調査区遠景

2.　調査区全景

PL.2　遺構

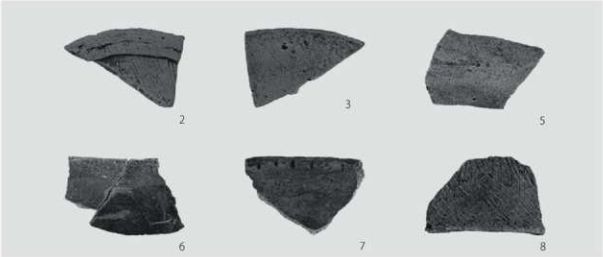
1.　SB01

2.　SB03・05・07

3.　SB03・05・06・07・08

4.　SK01

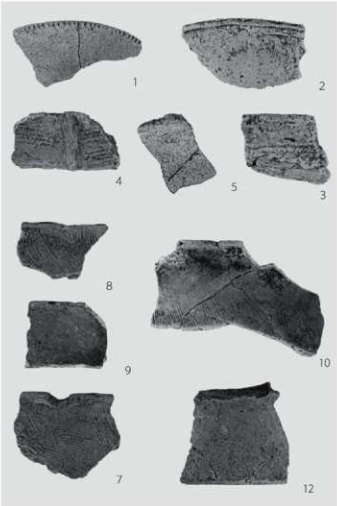
5.　調査地現状（平成 23 年）

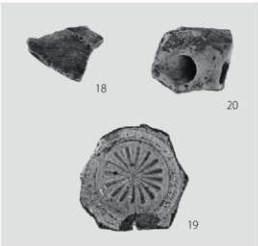


SX01

SX02

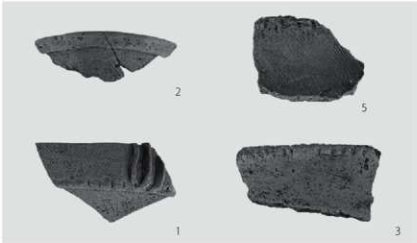
PL.4　遺物





H4 試掘

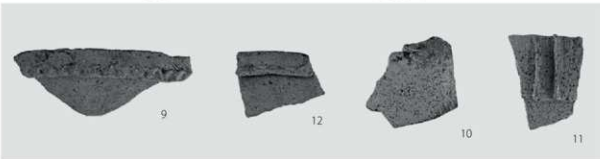
SB01



SB03

SB04

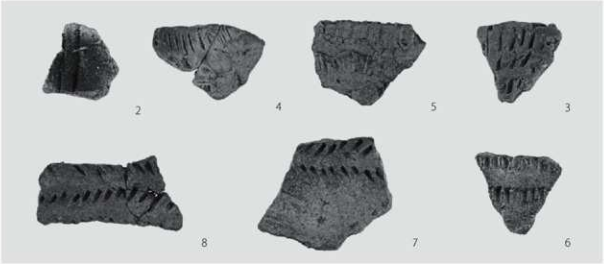
SB05



H5 試掘

SB03

PL.6　遺物



H5 試掘

SX01

H4 試掘

富士市埋蔵文化財調査報告

静岡県　富士市

沖田遺跡

店舗建設工事に伴う第 87・92 次調査地点埋蔵文化財発掘調査報告書

2012 年 3 月

富士市教育委員会

例　言

1　本書は、静岡県富士市原田字東山下56番外に所在する沖田遺跡第87次・92次調査の発掘調査報告書である。

2　調査は、久保田正幸氏による店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、平成8年度に富士市教育委員会が実施した。

3　沖田遺跡の試掘確認調査、本調査の期間は以下のとおりである。

試掘調査【87次調査】　平成8年5月1日～平成8年5月8日

本 調 査【92次調査】　平成8年9月2日～平成8年11月29日

4　調査体制は以下のとおりである。

発掘調査（平成8年度）

富士市教育委員会教育長　太田　均　　教育次長　大竹庄二

文 化 振 興 課 課 長　立田守彦　　課長補佐　平澤信子　　係長　池田晴夫

文化振興課職員　前嶋秀張・前田勝己（第87次のみ）・石川武男（第92次のみ）

目　次

例言

目次

第1章　調査の経緯と概要 …… 61

第2章　遺跡の立地と環境 …… 62

第1節　地理的歴史的環境 …… 62

第2節　基本土層 …… 62

第3章　遺構と遺物 …… 66

第1節　古墳時代 …… 66

第2節　奈良・平安時代 …… 69

第3節　中世 …… 72

第4節　その他の遺物 …… 76

第4章　総括 …… 77

付表　出土遺物観察表

写真図版

挿図目次

第 1 図　地質図 …… 61

第 2 図　沖田遺跡出土　珠紋鏡 …… 62

第 3 図　周辺遺跡分布図 …… 63

第 4 図　調査位置・トレンチ配置図 …… 63

第 5 図　検出遺構と基本土層 …… 64

第 6 図　試掘トレンチ土層柱状図 …… 65

第 7 図　古墳時代遺構全体図 …… 67

第 8 図　古墳時代　遺物出土状況図 …… 68

第 9 図　奈良・平安時代遺構全体図 …… 70

第 10 図　奈良・平安時代　遺物出土状況図 …… 71

第 11 図　中世遺構全体図 …… 73

第 12 図　出土遺物実測図（1）…… 74

第 13 図　出土遺物実測図（2）…… 75

第 14 図　試掘・表面採集　遺物実測図 …… 76

第 15 図　大畦畔　断面図 …… 77

第１章　調査の経緯と概要

調査経緯　平成８年、久保田正幸は、富士市原田字東山下 56 番外 20 筆において店舗新築工事を計画し、富士市教育委員会教育長　太田　均に「埋蔵文化財分布確認調査指導依頼書」を提出した。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「沖田遺跡」の範囲内に該当し、調査前の踏査において遺構・遺物が存在する可能性が高いことから文化庁長官の指示に従うよう回答した。その後、文化庁長官・静岡県教育委員会教育長より工事着手前に発掘調査（試掘調査）を実施するよう通知があり、富士市教育委員会により試掘・確認調査が実施されることとなった。

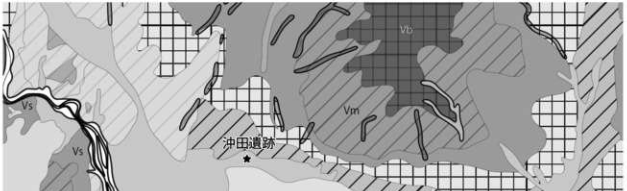
試掘・確認調査　試掘・確認調査では、敷地内に８か所のトレンチを設定し、遺構・遺物の残存状況の把握に努めた。その結果、古墳時代以降の畦畔の痕跡を残す水田面が３面以上存在し、また、須恵器・土師器・杭等がコンテナ２箱分出土した。

その結果を事業者に提示し、本調査に向けての調整を開始した。これまで、沖田遺跡では本調査の実施例が少なく、低地の遺跡であることから調査費用が通常より多くかかるなどの理由から、調整は難航したが、静岡県教育委員会文化課の指導・助言や事業者の理解により、本調査を実施することになった。

本調査　試掘・確認調査の結果から、遺構面（水田面）は、標高 1.8 m～ 3.0m の間に３面存在することが明らかとなっていた。試掘・確認調査中も壁面から大量の地下水が溢れ出て、壁面の崩落などの危険が想定された。そのため、本調査では、オープンカット工法により実施することとし、法面勾配１：１で約 2.5m 掘り下げたのち作業を行うこととなった。調査では、検出面が水没しないように、排水溝・釜場の設置、常時排水などの作業を並行して行った。

調査は平成８年９月２日に開始し、661㎡を掘削し、11 月 29 日に終了した。調査では、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の水田を検出し、特に奈良・平安時代での調査では、断面観察に留まるものの大規模な畦畔の存在が明らかとなった。

（佐藤）



第１図　地質図

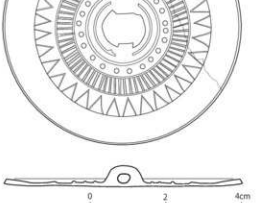
第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的歴史的環境

沖田遺跡はかつての吉原湊の北側、浮島ヶ原低地の西端に位置する。浮島ヶ原低地は、愛鷹火山地の南麓に位置し、南方には駿河湾、そして富士川河口から沼津市狩野川まで続く田子浦砂丘に取り囲まれ、その愛鷹火山地と田子浦砂丘に挟まれた低地部に存在する。現在は、水田地帯が広がっているが、近世この低地部には、富士川や愛鷹山の河川が注ぎ込み、最終的に沼川という河川のみによって駿河湾に水が排出されたため、大雨や高潮があると浮島ヶ原低地全域の 20 平方キロメートルが一大湖沼となる土地であったという。比較的安定的に耕作が行えるようになったのは昭和 18 年、沼の排水を目的として田子浦砂丘上に昭和放水路が、昭和 28 年から昭和 41 年にかけての田子浦港（旧吉原湊）、昭和 38 年に第二放水路が造られたことによるところが大きい（富士市立博物館 1984）。

弥生時代後期以降、この浮島ヶ原低地を取り囲むように集落が存在し、それぞれが密接な関係を持ちながら地域を形成していたものと考えられる。それらの地域内ネットワークの存在に欠かせない主要な「路」として考えられるのが、浮島ヶ原低地と愛鷹火山地の境に存在し、現在、富士市から沼津市を経て三島市に至る「静岡県道 22 号三島富士線」通称「根方街道」であったと考えられる。

平成８・10 年に行われた調査では、奈良時代の条里水田の畦畔が検出され（富士市教委 2000）、また、昭和 38 年には岳南排水路埋設工事に伴って、弥生時代中期に位置づけられる土器片が出土している（富士市教委 1986）。



第２図　沖田遺跡出土　珠紋鏡

また、近年、地表下４m から木棺に転用されたと考えられる古墳時代前期の準構造船が珠紋鏡とともに出土している（富士市教委 2008）。遺跡の存在する土地の地盤が沈下しているため、現在までのところ遺跡の詳細については明らかとなっていない部分もある。しかし、近年の報告により、弥生時代から平安時代に至るまで連綿と続く遺跡の様相が少しずつ明らかとなってきている（富士市教委 2011）。

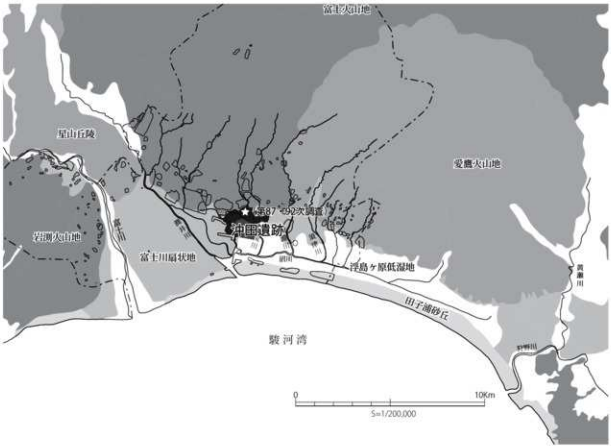
（佐藤）

第２節　基本土層

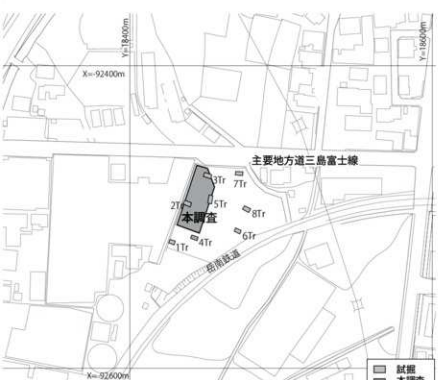
層序は１層から 34 層（第５図）に分層された。１層が客土で標高は 4m である。遺構の検出面は 13 層（中世水田）、19 層（奈良・平安時代水田）、24 層（古墳時代水田）である。また 19 ～ 20 層で大畦畔が認められた。遺物の包含層は明確に認められなかったが、19 層と 24 層から遺物が出土している。またスコリアは 23 層より上位で断片的に含有されるが、粒形の淘汰が不良であり、粗粒と細粒が混在し、発泡の特徴にばらつきが認められた。土層はシルト、砂層、礫層を中心に構成され、一部に植物の腐蝕層が混在する。

（服部）

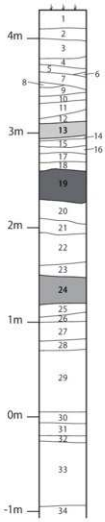
参考文献
富士市教育委員会 1986『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
富士市教育委員会 2000『沖田遺跡』
富士市教育委員会 2008『平成 17・18 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』
富士市教育委員会 2011『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市教育委員会 2012『宇東川遺跡 A 地区』
富士市立博物館 1984『浮島沼と米づくり』

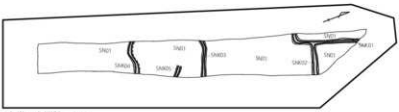


第 3 図　周辺遺跡分布図

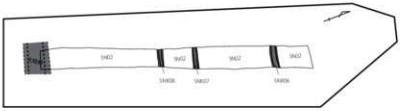


第 4 図　調査位置・トレンチ配置図 (S=1/2500)

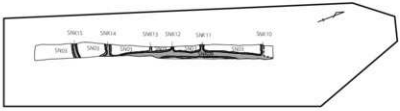




中世の水田跡　SN01
中世の畦畔跡　SNK01 ～ 05



奈良・平安時代の水田跡　SN02
奈良・平安時代の畦畔跡　SNK06 ～ 08



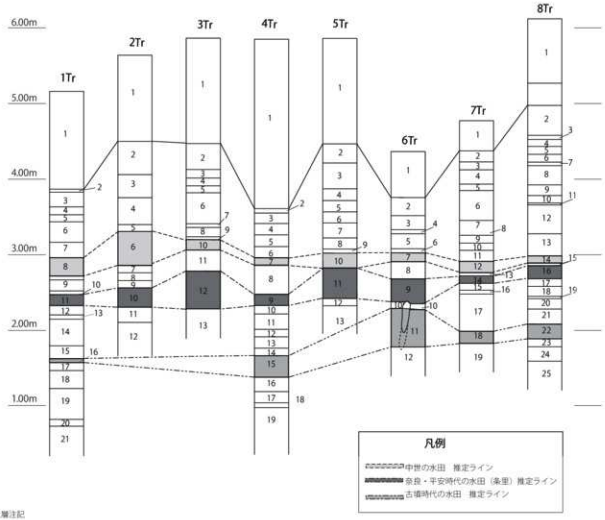
古墳時代の水田跡　SN03
古墳時代の畦畔跡　SNK09 ～ 15

0　10m
(S=1/400)

土層注記

1	青黒色シルト層	10	灰黄褐色砂層	19	黒褐色シルト層	27	黒色砂層
2	灰黄褐色シルト層	11	黒褐色腐植層	20	黒褐色シルト層	28	黒色砂層
3	灰黄褐色シルト層	12	灰黄褐色礫層	21	褐灰色シルト層	29	黒色砂層
4	黒褐色シルト層	13	黒褐色砂層	22	黒褐色シルト層	30	黒色砂層
5	明褐色礫層	14	灰黄褐色礫層	23	暗赤褐色礫層	31	黒色砂層
6	明褐色礫層	15	黒褐色砂層	24	黒褐色シルト層	32	黒色腐植層
7	黒褐色腐植層	16	暗赤褐色礫層	25	暗赤褐色礫層	33	褐灰色砂層
8	灰黄褐色砂層	17	黒褐色砂層	26	灰黄褐色砂層	34	黒褐色砂層
9	黒色腐植層	18	暗赤褐色礫層				

第 5 図　検出遺構と基本土層



土層注記

Tr 1
1 客土
2 黒色土
3 暗黒色土
4 黄褐色砂礫層
5 暗茶褐色砂層
6 暗黄褐色
～黒色砂礫層
7 暗茶褐色粗砂礫層
8 暗茶褐色砂層
（腐蝕植含）
9 暗茶褐色細砂層
（シルトに近い・
腐食層含）
10 暗茶褐色細砂層
11 黒褐色腐蝕土
12 暗褐色腐蝕土
13 暗茶褐色細砂礫層
14 黒色腐蝕土
（暗褐色腐蝕土が
細かく混入）
15 暗茶褐色細砂層
16 黒褐色腐蝕土
17 暗茶褐色粗砂層
18 暗茶褐色砂礫層
19 暗茶褐色腐蝕土
20 黒色～暗茶褐色シルト
21 暗茶褐色砂礫層
（砂利層）

Tr 2
1 客土
2 黒色土
3 褐色土
4 黒褐色土
5 暗茶褐色粗砂層
6 黒褐色腐蝕土
7 暗茶褐色砂層
8 黒褐色腐蝕土
9 暗茶褐色砂層
10 黒色腐蝕土
（シルトに近い）
11 暗褐色砂層
12 暗茶褐色細砂層

Tr 3
1 客土
2 暗黒色土
3 褐色土
4 黒褐色腐蝕土
（砂礫混在）
5 黒褐色粗砂層
6 黒褐色腐蝕土
7 暗茶褐色砂層
8 黒色腐蝕土
9 暗茶褐色細砂層
10 黒褐色腐蝕土
11 黒褐色砂礫層
12 黒褐色腐蝕土
13 暗茶褐色細砂礫層
（砂利層）

Tr 4
1 客土
2 黒色土
3 暗褐色土
4 褐色土
5 黒褐色腐蝕土
（砂混在）
6 暗茶褐色細砂層
7 黒色腐蝕土
8 黒褐色腐蝕砂質土
9 黒褐色粗砂層
（腐蝕植含有）
10 黒褐色腐蝕土
（砂礫混在）
11 黒褐色砂礫層
12 黒褐色粗砂層
13 黒褐色砂層
14 黒褐色細砂層
15 黒色シルト層
16 暗茶褐色砂層
17 暗茶褐色腐蝕土
18 黒褐色腐蝕土
19 暗褐色シルト

Tr 5
1 客土
2 黒色土
3 褐色土
4 褐色砂礫層
5 黒色粗砂層
6 黒褐色腐蝕土
7 黒色シルト
8 黒褐色シルト
9 暗茶褐色砂層
（腐食層含有）
10 黒色腐蝕土
11 黒褐色腐蝕土
（シルトに近い）
12 暗茶褐色砂層
13 暗茶褐色砂礫層
（遺物出土）

Tr 6
1 客土
2 砂礫層
3 黒褐色土
4 耕作土
5 黒色耕作土
6 砂
7 黒色腐蝕土
8 砂利
9 黒褐色腐蝕土
（耕作土）
10 砂
（抗上部）
11 耕作土
12 砂利
（抗下部埋入れ）

Tr 17
1 客土
2 黄褐色砂礫層
3 黒褐色砂礫層
4 黒褐色腐蝕土
5 黒褐色粗砂層
6 黒褐色腐蝕土
7 暗茶褐色粗砂礫層
（シルトに近い）
8 暗茶褐色細砂層
9 黒色腐蝕土
10 暗茶褐色粗砂層
11 暗茶褐色砂礫層
12 黒褐色腐蝕土
13 暗茶褐色細砂礫層
14 黒色腐蝕土
15 暗茶褐色細砂層
16 黒褐色腐蝕土
17 黒褐色砂層
18 黒褐色腐蝕土
19 暗茶褐色砂礫層
（砂利混在）

Tr 8
1 客土
2 褐色土
3 黒褐色砂層
4 黒褐色腐蝕土
5 黒褐色粗砂層
6 黒褐色腐蝕土
7 黒褐色砂層
8 黒褐色腐蝕土
9 黒褐色砂層
10 黒色腐蝕土
11 暗茶褐色粗砂層
12 黒褐色腐蝕土
13 黒褐色砂礫層
14 黒褐色腐蝕土
15 暗茶褐色細砂層
16 黒褐色腐蝕土
17 黒褐色砂層
18 黒褐色腐蝕土
19 暗茶褐色細砂層
20 黒褐色腐蝕土
21 黒褐色砂層
22 黒褐色腐蝕土
23 黒色腐蝕土
24 茶褐色細砂層
（黒色土混在）
24 黒色腐蝕土

第 6 図　試掘トレンチ土層柱状図

第３章　遺構と遺物

第１節　古墳時代

遺構（第７図）　古墳時代の遺構には基本土層24層の水田が対応するものと考えられ、水田遺構（SN03）と、小畦畔７条（SNK09 ～ 15）が検出された。

水田遺構　水田跡は調査区全域にわたっていた。小畦畔は南北方向１条、東西方向６条で構築され、SNK09から派生し、結合している。杭や木材等の構築材は確認されなかった。盛土を施しただけの盛土畦畔と考えられる。取水を示す水口や足跡などの凹凸は検出されなかった。調査区北側を中心に遺物が出土した。

大畦畔は検出されず、水田遺構（SN03）は、小畦畔（SNK09 ～ SNK15）によって区切られた構造の小区画水田である。個々の水田規模にはばらつきが大きく、全体としてN-21°-Wを指向する。検出面の標高は1.80mで水平が保持されていた。耕作土は23層のにぶい赤褐色（Hue5YR4/3）の礫層で植物遺体を含む。

小畦畔　SKN09は調査区北東端から南部にかけて南北方向に延びている。わずかに弧状を呈し、西側でSNK10 ～ 15に接続する。方向はN-24°-Eを指向する。規模は長さ（南北）が約15.0m、幅が天井部で約0.50m、水田との設置面では約0.70mを測る。２本の杭が出土しているが、規則性は認められないため、流れ込んだものと考えられる。

SNK10は調査区北部に位置し、東西方向に延びる。東端でSNK09に接続する。方向はN-70°-Wを指向する。規模は長さ（東西）が約1.00mを測る。遺構の北側が消失していたため明らかではないが、天井部が約0.30m、水田との設置面で約0.60mが推定される。

SNK11は調査区中央部に位置し、東西方向に延びている。東端でSNK09に接続する。方向はN-66°-Wを指向する。規模は長さ（東西）が0.60m、幅が天井部で約0.30m、水田との設置面で約0.40mを測る。

SNK12は調査区中央部に位置し、東西方向に延びている。東端でSNK09に接続する。方向はN-68°-Wを指向する。規模は長さ（東西）が0.30 ～ 0.40m、幅が天井部で約0.12m、水田との設置面で約0.30mを測る。

SNK13は調査区中央部に位置し、東西方向に延びている。東端でSNK09に接続する。水田設置面は確認されたが、天井部は消失していた。方向はN-66°-Wを指向する。規模は長さ（東西）が0.50m、幅は水田との設置面で約0.30mを測る。

SNK14は調査区南部に位置し、東西方向に延びている。東端でSNK09に接続する。方向はN-74°-Wを指向する。規模は長さ（東西）が約1.00m、幅が天井部で約0.40m、水田との設置面で約0.60mを測る。

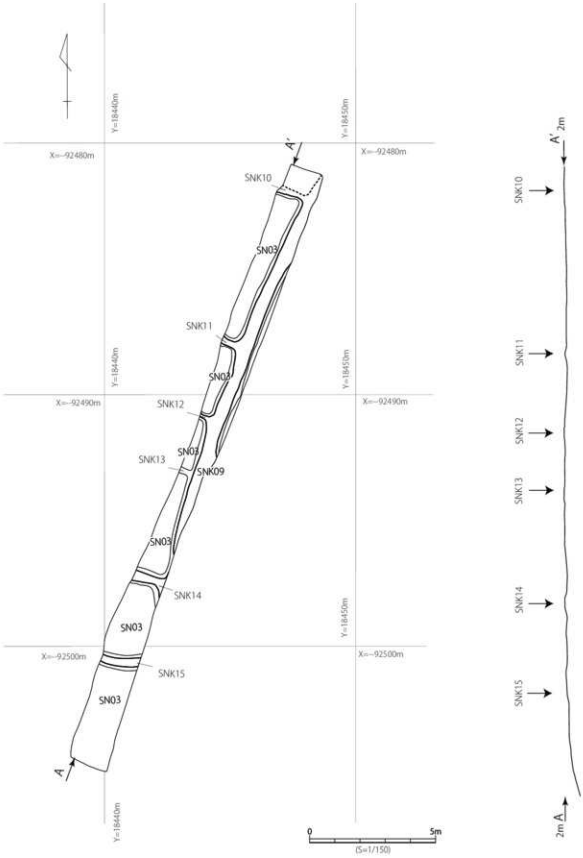
SNK15は調査区南部で東西方向に延びている。東端でSNK09に接続すると推測される。方向はN-83°-Wを指向する。規模は長さ（東西）が1.50m、幅が天井部で約0.40m、水田との設置面で約0.60mを測る。緩い傾斜面を法面とし、断面形状は台形状を呈すが明瞭ではない。盛り上がりの高さは約7cmを測る。

遺物（第12図１～９・14）　調査区北部にて、土師器・須恵器が集中して出土している。

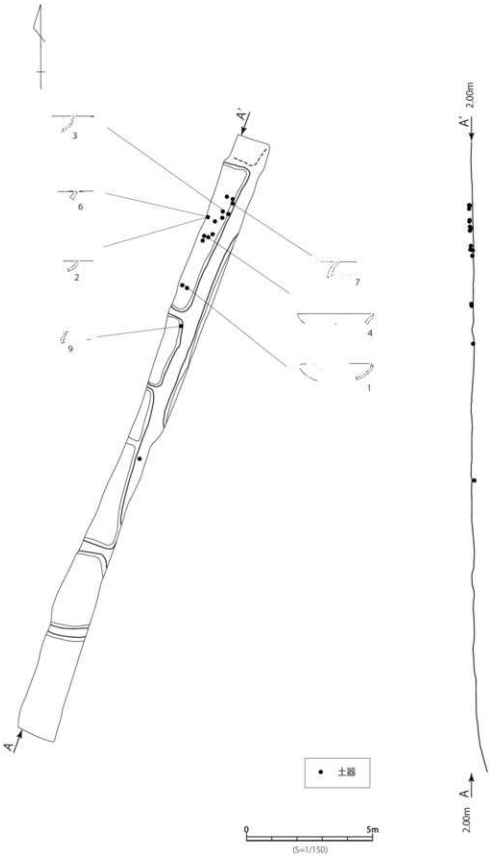
１～３は坏の破片で、ともに白色粒子を多量に含む。口唇部が内湾しながら立ち上がる。横方向のヘラミガキが施される。４～６は高坏である。坏の破片に比べて厚みがある。坏同様、ヘラミガキで調整されている。

９は小型壺の口縁部の破片である。14の砥石もこの土層からの出土である。

いずれも古墳時代中期後半から後期前半にかけての遺物である。



第 7 図　古墳時代遺構全体図



第8図　古墳時代　遺物出土状況図

第２節　奈良・平安時代

遺構（第９図）　奈良・平安時代の遺構には、基本土層19 層の水田が対応するものと考えられ、水田遺構（SN02）と３条の小畦畔（SNK06 ～ 08）が検出された。また、調査区の南端では断面観察ながら大畦畔と考えられる高まりが検出された。

水田遺構　水田遺構は調査区全域にわたる。小畦畔からは杭や木材等の構築材は確認されなかったため、盛土を施しただけの盛土畦畔と考えられる。取水を示す水口は検出されなかった。また、人と、馬あるいは牛の足跡が凹凸は検出されたものの（第 10 図）、明確な規則性は認められない。

水田遺構は N-78°-W を指向し、検出面の標高は 2.50 ～ 2.60m で調査区内での水平は保持されているものと考えられる。東西方向の小畦畔（SNK06 ～ 08）によって南北に区割りされるが、南北方向の畦畔は検出されなかった。耕作土は 19 層の黒褐色（Hue7.5YR3/2）シルト層で、少量の礫と粗砂・細砂で構成される。植物遺体を少量含み、しまりがやや強い。

小畦畔　SNK06 は調査区北部に位置し、東西方向に延びる。方向は N-78°-W を指向し、断面形状は明瞭ではないが緩やかなアーチ形を呈する。規模は長さが約 2.30m、幅が天井部分で約 0.50m、水田設置面では約 0.75m を測る。盛り上がりの高さは約５～ 7cm を測り、検出面の標高は 2.57 ～ 2.67m である。

SNK07 は調査区中央部に位置し、東西方向に延びる。方向は N-76°-W を指向する。断面形状は明瞭ではないが緩やかなアーチ形を呈する。規模は長さが約 2.30m、幅が天井部分で約 0.40m、水田設置面では約 0.60m を測る。盛り上がりの高さは約５～ 7cm を測り、検出面の標高は 2.57 ～ 2.67m である。

SNK08 は調査区中央部に位置し、東西方向に延びる。方向は N-75°-W を指向する。断面形状は明瞭ではないが緩やかなアーチ形を呈する。規模は長さが約 1.85m、幅が天井部分で約 0.30m、水田設置面では約 0.60m を測る。盛り上がりの高さは約５～ 7cm を測り、検出面の標高は 2.57 ～ 2.67m である。

大畦畔は調査区最南部の断面から検出され、北西から南東方向に延びるものと考えられる。調査の制約によりすべてを明確にすることできなかったため、平面プランは推定のラインにとどめることとした。推定で主軸の方向は N-75°-W を指向し、規模は幅が天井部分で約 1.80m、水田設置面で約 2.70m と考えられる。

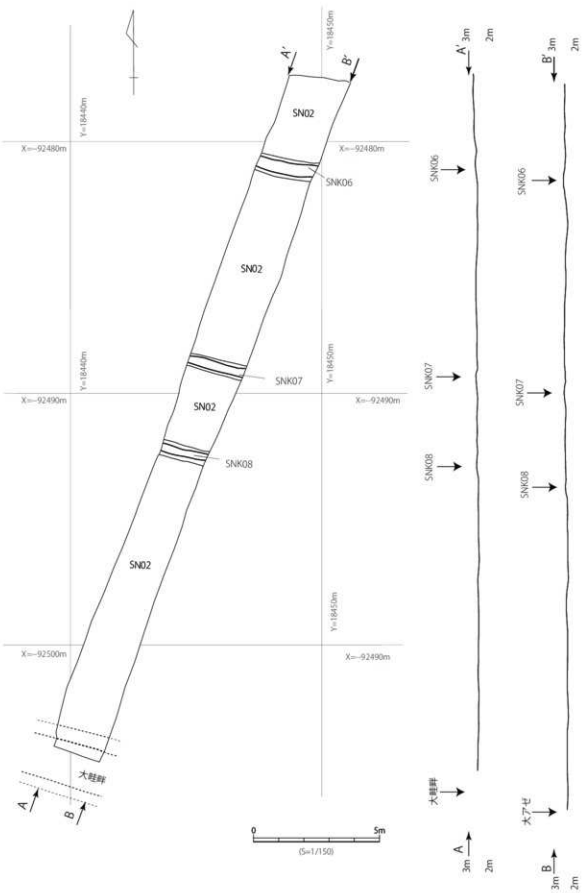
遺物（第 12 図 10 ～ 13・15 ～ 17）　土師器、須恵器、木製品が出土している。出土は標高 2.30m 前後に集中し、水田・小畦畔の標高約 2.50 ～ 2.60m に比べ、0.30m ほど低い地点である。

10 はつまみを有す須恵器の坏蓋で、外面に稜線が認められる。11 は断面が方形の高台を付す高台坏の底部で、回転糸切り痕が残り、暗青灰色を呈す。高台径は 7.5cm である。10・11 は特徴から８世紀の所産と考えられる。12 は坏の口縁部で、わずかに外反している。外面ナデと内面縦方向のミガキが施される。13 は土師器の甕の底部で木葉痕が残り、体部は直線的に立ち上がり、指押痕が認められる。

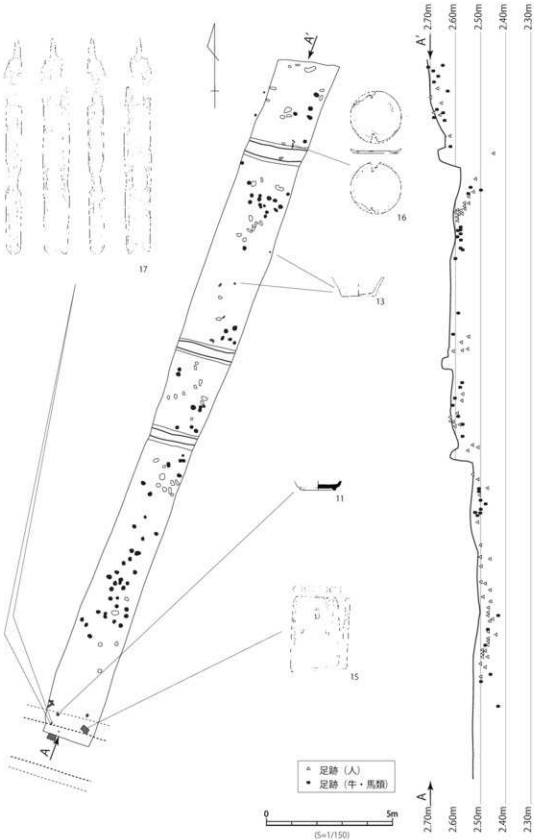
15 から 17 は木製品である。15 は、前端の中央と中央よりの左右に１孔ずつ穿孔されている。一般的な田下駄と形態、穿孔状態が異なることから『曲金北遺跡』（静埋研 1997）にならい下駄状木製品とした。縦の長さは 34㎝、幅 23㎝、厚さ２～ 2.5㎝、表面積 750㎠を測る。この形態の木製品は、富士市浮島沼周辺でアゼブクリ、アーラオコシと呼ばれていたものに似ており、民俗例にならうと、肥料や荷物を運搬する際に田の畦を傷めないために履く製品と考えられている（静埋研 1997）。16 は木皿である。口径 163㎝、高さ 1.5㎝、底径 13.9㎝を測る。器面は丁寧に調整され、チョウナの痕跡もほとんど目視できない。17 は、一個体に復元される不明木製品である。横架材などの建築部材とも考えられるが、明らかでない。長さ 122㎝（復元残存値）、幅 12.5㎝、厚さ 7.5㎝を測る。片側の端部は荒れており、当初の形態を残しているのか明らかではないが、他の部分は比較的良好に遺存する。ホゾ穴は２箇所もつが、片方は破片同士が接合せず、大きさは不明。残存するホゾ穴は長さ 13㎝、幅 9㎝を測り、ホゾ穴間の長さは 29㎝である。ホゾ穴間の表面と裏面の両面から方形の欠き込みが認められ、いずれも長さ 5㎝、幅約 4㎝、深さ 2㎝を測る。また、側面にも同様の欠き込みが認められる。

参考文献

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『曲金北遺跡（遺物・考察編）』



第 9 図　奈良・平安時代遺構全体図



第 10 図　奈良・平安時代　遺物出土状況図

第3節　中世

遺構（第 11 図）　中世の遺構には、基本土層 13 層の水田が対応するものと考えられ、水田遺構（SN01）と 5 条の小畦畔（SNK01 ～ 05）が検出された。

水田遺構　水田遺構（SN01）は掘削した調査区全域にわたる。形状は未確定ながら方形と推定されるが、小区画の規模は画一性がない。方向は N-20°-W を指向し、検出面の標高は北側で 3.00m、南側で 3.15m を測り、南側から北側に向って緩やかな傾斜が認められる。耕作土は 13 層の黒褐色（Hue10YR3/1）砂層で、少量の礫と粗砂・細砂で構成され、葉や茎の植物遺体を含む。

小畦畔　小畦畔は調査区北部の SNK01・02 と中央部を横断する SNK03 ～ 05 に大別される。小畦畔から杭や木材等の構築材は確認されなかったため、盛土を施しただけの盛土畦畔と考えられる。取水を示す水口や足跡などの凹凸は検出されなかった。

SNK01 は調査区北西部に位置している。南端部は直角に近い角度で曲がりさらに西へと延長する。検出された規模は、南北約 7.00m、東西は約 1.00m を測る。幅は天井部分で約 0.20m、水田設置部分が 0.40m を測る。盛り上がりの高さは約 5cm を測り、検出面の標高は約 3.00m である。南北部分は N-19°-E を指向する。東側で「T」字状に SNK02 と接続している。

SNK02 は調査区北東部に位置し、東西方向に延びる。方向は N-74°-W を指向し、西端部が SNK01 に接続する。規模は長さ約 3.20m、幅は天井部で約 0.40m、水田設置面で約 0.70m を測るが、SNK01 との接続部分ではわずかに縮小する。

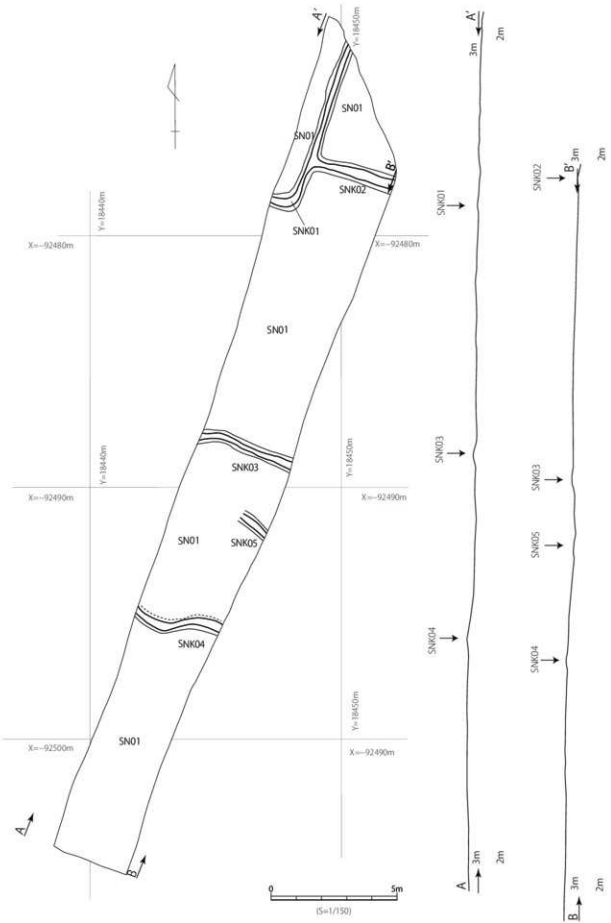
SNK03 は調査区中央部に位置し、東西方向に延びて調査区を横断する。調査区西より約 1m 地点で反時計回りに 25°方向を変換する。規模は長さが約 4.00m、幅は天井部で約 0.20m、水田設置面で約 0.50m を測る。方向は N-70°-W を指向する。検出面の標高は約 3.20m、盛り上がりの高さは約 8 ～ 9cm を測る。断面形状は明瞭ではないが緩やかなアーチ形状を呈す。

SNK04 は調査区中央部やや南に位置している。蛇行しながら東西方向に延び、調査区を横断する。北側の下端は不明瞭で、消失した可能性がある。規模は長さが約 3.40m、幅は天井部で約 0.30m、水田設置面は推定で約 0.60m を測る。主軸の方向は N-73°-W を指向する。検出面の標高は約 3.40m、盛り上がりの高さは約 5 ～ 7cm を測る。断面形状は明瞭ではないが緩やかなアーチ形状を呈す。

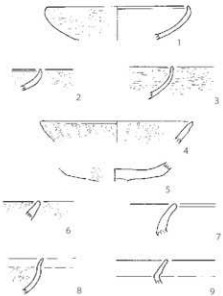
SNK05 は調査区中央部で、SNK03 と SNK04 の間に位置する。南東～北西方向に延びる。東部分で一部が検出された。規模は長さが約 1.40m、幅は天井部で約 0.30m、水田設置面で約 0.50m を測る。方向は N-49°-W を指向する。検出面の標高は約 3.15m、盛り上がりの高さは約 5 ～ 7cm を測る。断面形状は明瞭ではないが緩やかなアーチ形状を呈す。

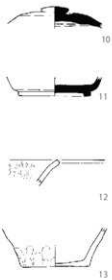
出土遺物がないため、それら水田遺構の所属時期は明確ではないが、ここでは、中世遺構として捉えることとした。

（佐藤・服部）

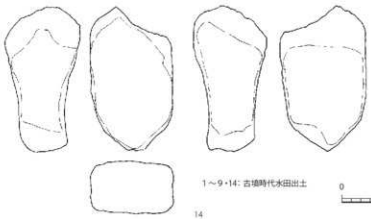


第 11 図　中世遺構全体図



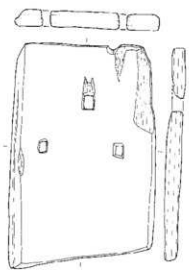


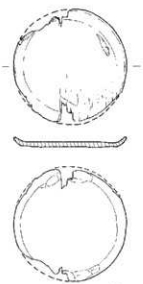
10～13：奈良平安時代の水田



1～9・14：古墳時代水田出土

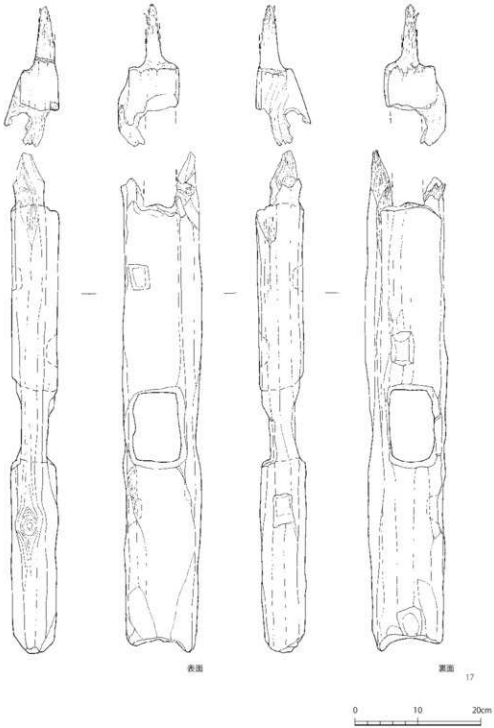
0　10cm
（1～14）





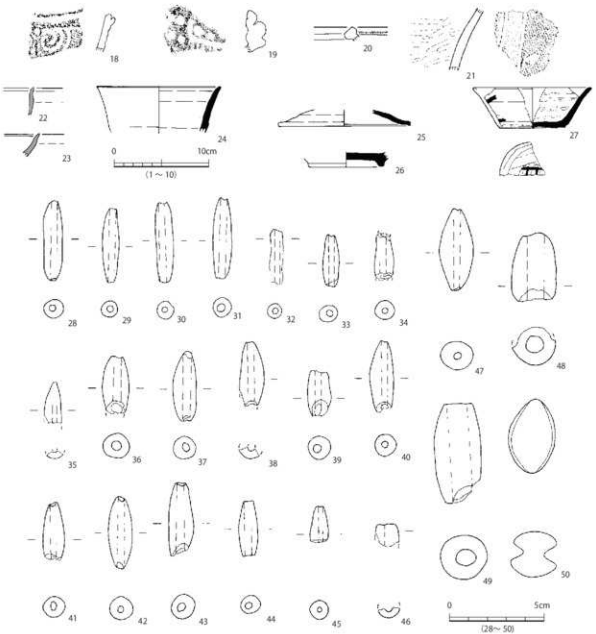
0　10　20cm
（15・16）

第12図　出土遺物遺物実測図（1）



第 13 図　出土遺物実測図（2）

第 4 節　その他の遺物



第 14 図　試掘・表面採集　遺物実測図

試掘・確認調査の際に表面より多数の遺物が採集された。

土器（第 14 図 18 ～ 27）　18・19 は縄文土器で口縁部の小片である。1 は L 字状の沈線と穿孔、2 は渦巻き文が施される。20 は縄文土器の口唇部で鉢？の一部と考えられる。21 は縄文土器の体部で 2 本の沈線と、LR の結節縄文に一部磨り消しが認められ、内面にヘラナデ調整が施される。22・23 は灰釉陶器の口縁部で、口唇部が外反する。24 は須恵器の口縁部で坏である。25 は土師器の坏蓋で、上部が欠損している。26 は須恵器の底部で、高台を有す。27 は土師器の坏で、底部と体部に墨書が認められ、高台を付す。内外面ともヘラ削りが施される。

土錘（第 14 図 28 ～ 50）　土師質で 23 点が確認された。紡錘形の形状を呈する管状のもので中型か細長いタイプが大半で、大型タイプ（48・49）が 2 点である。管状以外では有溝型（50）が 1 点である。釣り、魚網による漁撈の痕跡が伺えるが使用の場所は不明である。

（服部）

第 4 章　総括

自然化学分析　調査中、水田遺構と考えられる土層の植物珪酸体分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析から多くの時間が経ち調査時の成果をそのまま公表することは出来ないが、以下では、分析結果の一部を引用し掲載する。

「24 層ないし 23 層では、古墳時代後期の小区画水田が検出されている。両層の植物珪酸体の出現傾向をみると、24 層ではイネ属が全く検出されなかったが、23 層では多産した（特に機動細胞珪酸体）。したがって、23 層が水田耕作土に相当すると考えられる。なお、23 層では、流水不特性種を中心とするが、*Achnanthes lanceolata* などの流水性種、*Navicula contenta* などの陸生珪藻も比較的多く産出した。このような特徴は、河川の氾濫堆積物で認められる特徴であるが、乾田水型の水田耕土で認められる特徴でもある。

19 層より上位では、草本花粉においてイネ科の占める割合が高くなる。イネ属珪酸体が出現率の多少の増減があるものの、連続して検出される。これらのことから、19 層堆積以降も調査地点近傍で稲作が行われていたことが推定される。珪酸化石で様々な環境に生育する種類が低率に検出され、その珪藻化石のなかに *Achnanthes exigua*、*Sellaphora pupula* などの好汚濁性種が若干産出する。ここでの珪藻化石群集が水田の水質を反映しているとすれば、富栄養となる原因として施肥などの影響を考える必要がある。また、花粉化石で産出したサジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属などは近年まで水田雑草として普通に認められた種類であり、当時も水田雑草として分布していた可能性がある。なお、大畦畔を構築する 19 層と 20 層に挟まれたシルト質砂層ではイネ属が認められなかった。この点は、沖田遺跡第 84・88・104 次調査［大昭和紙工産業店舗建設］（パリノ・サーヴェイ株式会社 2000）や沖田遺跡第 90・93 次調査［今泉小学校プール］で認められた畦畔の構築土層の植物珪酸体の産状とは異なっている。大畦畔を構築する他の土層についても同様な調査を行う必要があるが、本調査区の大畦畔は周辺の水田耕土を用いず、異なる場所から土壌を搬入して構築した可能性がある。

中世の水田面である 13 層では、イネ属珪酸体の出現率は他の層位と比較して極端に少なかった。これは、収穫後

1　10BG2/1 青黒色シルト層（粘性やや強く、しまりやや弱い）
2　10YR5/2 灰黄褐色シルト層（粘性やや強く、1 よりしまり強い）
3　10YR4/2 灰黄褐色シルト層（粘性やや強く、1 よりしまり強い）
4　10YR3/1 黒褐色シルト層（粘性やや強く、1 よりしまり強い）
5　7.5YR5/6 明褐色礫層（しまり強い）
6　10YR2/1 黒色礫層（しまりやや強い）
7　7.5YR5/6 明褐色礫層（しまり強い）
8　10YR3/1 黒褐色粘質土層（しまりやや強い）
9　10YR5/2 灰黄褐色砂層（しまりやや強い）
10　10YR2/1 黒色腐植土層（しまり弱い）
11　10YR5/2 灰黄褐色砂層（しまりやや強い）
12　10YR5/2 灰黄褐色砂層（しまりやや強く、腐植が多い）
13　10YR5/2 灰黄褐色砂層（しまりやや強く、9 層に酸似の砂を含む）
14　10YR3/1 黒褐色腐植土層（しまり弱い）
15　10YR5/2 灰黄褐色礫層（しまり強く、腐植が多い）
16　10YR5/2 灰黄褐色礫層（しまり強く、腐植が少ない）
17　10YR3/1 黒褐色シルト層（しまり強い）
18　10YR5/2 灰黄褐色砂層（しまり強い）
19　10YR5/2 灰黄褐色礫層（しまり強い）
20　5YR4/3 暗赤褐色シルト層（しまり強く大凝スコリアを少量含み、やや明るい）
21　5YR4/3 暗赤褐色シルト層（大凝スコリアをやや多く含み、やや明い）
22　5YR4/3 暗赤褐色シルト層（大凝スコリアを多く含み、21 より明い）
23　5YR4/3 暗赤褐色シルト層（しまり強い）
24　7.5YR3/2 黒褐色シルト層（しまりやや強い）
25　5YR4/3 暗赤褐色シルト層（大凝スコリアを少量含み、22 より明い）
26　7.5YR3/2 黒褐色シルト層（しまりやや強い、古墳時代の水田面）

第 15 図　大畦畔断面図

のイナワラの持ち出しや施肥の有無など耕作の様態や稲作の期間などに起因する可能性がある。今後、同時期の水田層について同様な調査を行い、地域的に検討していきたい。」

まとめ　今回の調査では、古墳時代中期後半から後期前半、奈良・平安時代、中世の三時期の水田遺構を検出することができた。それぞれの水田遺構が検出された標高は、1.8m、2.5m、3.1mである。調査前の地表面の標高が6m程度であったことを考えると、古墳時代の水田遺構は地表下4m以上から検出されたことになる。そのため、調査は安全対策などに細心の注意を払いながら行われた。前述のとおり沖田遺跡では、遺構の検出層位が低いことなどから、これまであまり本発掘調査が行われてこなかった。しかし、そのような状況の中、今回は事故なく調査を行うことができたことは、大きな成果であった。今後、周辺での試掘・確認調査の成果を地図上で整理し、未だ実態の見えない沖田遺跡の生産域について迫っていく必要があるが、それについては改めて検討していくこととしたい。

（佐藤）

参考文献

パリノ・サーヴェイ株式会社 2000「沖田遺跡の自然科学分析」『沖田遺跡』富士市教育委員会

出土遺物観察表

※　口径・底径の（　）内は推定値である。
　　器高の（　）内は残存値である。
　　残存率は図示中での残存率を示した。

土器

遺物番号	検区	図版	遺構番号	種別	器形	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
1	12	4	SN03	土師器	坏	(20%)	15.0	(3.5)	-	2.5YR5/6　明赤褐	2.5YR6/6　橙	
2	12	4	SN03	土師器	坏	-	-	(2.3)	-	7.5YR6/3　にぶい褐	7.5YR5/3　にぶい褐	
3	12	4	SN03	土師器	坏	-	-	(3.5)	-	5YR6/6　橙	5YR6/6　橙	
4	12	4	SN03	土師器		(20%)	16.0	(2.3)	-	5YR5/4　にぶい赤褐	5YR6/3　にぶい橙	
5	12	4	SN03	土師器	高坏	(20%)	-	(2.0)	-	10R5/6　赤	2.5YR5/4　にぶい赤褐	
6	12	4	SN03	土師器		-	-	(2.0)	-	7.5YR5/4　にぶい橙	7.5YR5/4　にぶい橙	
7	12	4	SN03	土師器	甕	-	-	(3.5)	-	N7/　灰白	N7/　灰白	
8	12	4	SN03	土師器		-	-	(3.7)	-	2.5YR5/8　明赤褐	2.5YR6/8　橙	
9	12	4	SN03	土師器	坩	-	-	(2.4)	-	2.5YR4/3　にぶい赤褐	2.5YR4/3　にぶい赤褐	口縁部
10	12	4	SN02	須恵器	坏蓋	(70%)	-	(2.4)	-	N6/　灰	N5/　灰	
11	12	4	SN02	須恵器	坏	(90%)	-	(2.0)	7.6	5PB4/1　暗青灰	5PB3/1　暗青灰	
12	12	4	SN02	土師器	坏	-	-	(2.7)	-	10R5/3　赤褐	10R5/3　赤褐	内面縦ミガキ・外面ナデ
13	12	4	SN02	土師器		(30%)	-	(4.0)	7.2	7.5YR3/1　黒褐	7.5YR4/3　褐	外面指押痕・底部木葉痕
18	14	4	試掘	縄文土器	鉢?	-	-	(2.9)	-	2.5Y6/3　灰黄	7.5YR7/6　橙	
19	14	4	試掘	縄文土器	鉢?	-	-	(4.8)	-	2.5YR3/6　暗灰褐	2.5YR3/6　明赤褐	
20	14	4	試掘	縄文土器	鉢?	-	-	(1.5)	-	2.5YR5/6　明赤褐	2.5YR4/6　赤褐	
21	14	4	試掘	縄文土器	鉢?	-	-	(7.0)	-	2.5YR4/3　にぶい赤褐	5YR3/3　明赤褐	
22	14	4	試掘	灰釉陶器	坏	-	-	(2.9)	-	7.5YR6/1　灰	7.5Y6/1　灰	
23	14	4	試掘	灰釉陶器	坏	-	-	(2.5)	-	5Y7/2　灰白	5Y6/3　オリーブ黄	
24	14	4	試掘	須恵器	坏	(20%)	13.0	(4.8)	-	N4/　灰	N3/　暗灰	
25	14	4	試掘	土師器	蓋	(20%)	-	(4.5)	-	7.5YR5/3　にぶい褐	7.5YR5/4　にぶい褐	
26	14	4	試掘	土師器	坏	(25%)	-	(1.5)	8.0	5YR5/4　にぶい赤褐	5YR5/4　にぶい赤褐	
27	14	4	試掘	土師器	坏	(20%)	-	(4.3)	-	2.5YR4/3　にぶい赤褐	2.5YR2/3　極暗赤褐	墨書

土製品

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	残存率	長さ	最大径	口径	重量	色調
28	14	6	表面採集	土製品	土錘	100%	4.2	1.1	0.4	4.34	5YR6/6	橙
29	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**100%**	**3.9**	**0.8**	**0.3**	**2.97**	**2.5YR6/8**	**橙**
30	14	6	表面採集	土製品	土錘	100%	4.2	0.9	0.3	3.90	5YR6/6	橙
31	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**100%**	**4.2**	**1.0**	**0.5**	**4.40**	**2.5YR5/6**	**明赤褐**
32	14	6	表面採集	土製品	土錘	70%	(2.9)	0.7	0.3	1.69	2.5YR6/4	にぶい橙
33	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**80%**	**(2.8)**	**0.9**	**0.3**	**1.83**	**7.5YR7/4**	**にぶい橙**
34	14	6	表面採集	土製品	土錘	50%	(2.5)	1.0	0.3	2.37	7.5YR6/4	にぶい橙
35	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**20%**	**(2.2)**	**(0.9)**	**(0.3)**	**0.65**	**5YR6/6**	**橙**
36	14	6	表面採集	土製品	土錘	70%	(3.1)	1.4	0.5	5.02	2.5YR5/6	明赤褐
37	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**90%**	**(3.7)**	**1.2**	**0.4**	**5.47**	**10YR7/4**	**にぶい黄橙**
38	14	6	表面採集	土製品	土錘	60%	(3.4)	1.2	0.4	3.65	5YR6/6	橙
39	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**50%**	**(2.4)**	**1.2**	**0.5**	**3.47**	**2.5YR6/6**	**橙**
40	14	6	表面採集	土製品	土錘	80%	(3.3)	1.3	0.4	4.82	5YR5/4	にぶい黄褐
41	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**60%**	**(3.1)**	**1.2**	**0.4**	**3.61**	**5YR6/6**	**橙**
42	14	6	表面採集	土製品	土錘	100%	3.8	1.3	0.4	6.07	7.5YR7/4	にぶい橙
43	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**70%**	**(3.6)**	**1.2**	**0.4**	**5.95**	**7.5YR4/2**	**灰褐**
44	14	6	表面採集	土製品	土錘	100%	2.9	1.0	0.3	3.10	7.5YR7/4	にぶい橙
45	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**50%**	**(1.9)**	**1.0**	**0.3**	**1.54**	**2.5YR5/6**	**明赤褐**
46	14	6	表面採集	土製品	土錘	-	(1.2)	(1.2)	(0.3)	0.86	2.5YR5/6	明赤褐
47	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**100%**	**4.3**	**1.7**	**0.4**	**8.61**	**10YR8/3**	**浅黄橙**
48	14	6	表面採集	土製品	土錘	40%	(3.5)	2.4	0.9	9.86	2.5YR6/6	橙
49	**14**	**6**	**表面採集**	**土製品**	**土錘**	**90%**	**(5.2)**	**2.4**	**1.0**	**32.52**	**2.5YR4/8**	**赤褐**
50	14	6	表面採集	土製品	土錘	100%	3.9	2.5	1.2	20.07	5YR7/6	橙

石製品

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	重量	長さ	幅	厚さ
14	12	6	SN03	石製品	砥石	1428.68	15.4	8.7	5.5

木製品

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	長さ	幅	厚さ	備考
15	12	5	SN02	木製品	下駄状木製品	(36.0)	23.0	2.5	穿孔 3 点あり
17	**13**	**5**	**SN02**	**木製品**	**建築部材？**	**(122.0)**	**12.5**	**7.5**	**ホゾ穴あり**

遺物番号	挿図	図版	遺構番号	種別	細別	口径	器高	底径	備考
16	12	5	SN02	木製品	木皿	16.3	1.5	13.9	

写真図版

沖田遺跡　第 87・92 次調査地点 出土土器

（撮影　小田貴子）

1.　中世の水田・畦畔跡（南南西から）

2.　奈良・平安時代の水田・畦畔跡（南南西から）

PL.2　遺構

1.　古墳時代の水田・畦畔跡（南南西から）

2.　古墳時代の水田・畦畔跡（南南西から）

1.　調査区南端部土層堆積状況（大畦畔断面）

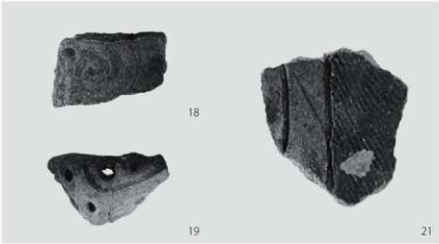
2.　奈良・平安時代の足跡（南西から）

3.　奈良・平安時代の水田・畦畔跡出土の須恵器（11）

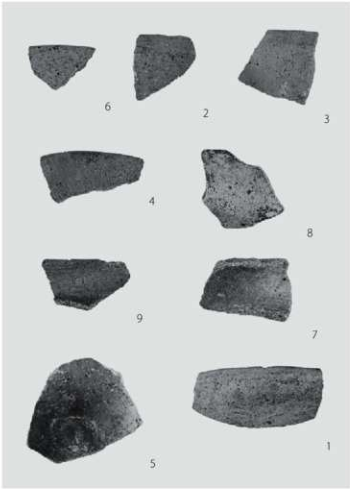
4.　奈良・平安時代の水田・畦畔跡出土の木製品（15）

5.　奈良・平安時代の水田・畦畔跡出土の木皿（16）

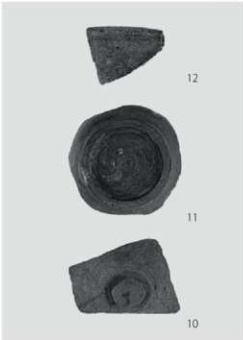
PL.4　遺物



試掘



SN03



SN02

15

15

16

17

17

PL.6　遺物

表面採集　　試掘

富士市埋蔵文化財調査報告

静岡県　富士市

沖田遺跡

今泉小学校プール改築に伴う第90・93次調査地点埋蔵文化財発掘調査報告書

2012年3月

富士市教育委員会

例　言

1　本書は、静岡県富士市今泉３丁目17番１号に所在する沖田遺跡第90・93次調査の発掘調査報告書である。

2　調査は、富士市教育委員会による今泉小学校プール改築に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、平成８年度に富士市教育委員会が実施した。

3　沖田遺跡の試掘確認調査、本調査及の期間は以下のとおりである。

試掘調査【第90次調査】　平成８年７月３日

本 調 査【第93次調査】　平成８年９月13日～平成８年10月28日

4　調査体制は以下のとおりである。【沖田遺跡第90・93次発掘調査】

富士市教育委員会教育長　太田　均　　教育次長　大竹庄二

文化振興課課長　立田守彦　　課長補佐　平澤信子　　係長　池田晴夫

文 化 振 興 課　前田勝己

目　次

例言

目次

第１章　調査の経緯と概要 …… 91

第２章　遺跡の立地と環境 …… 92

　第１節　地理的歴史的環境 …… 92

　第２節　基本土層 …… 92

第３章　遺構と遺物 …… 94

第４章　総括 …… 98

付表　出土遺物観察表

写真図版

挿図目次

第　１　図　地質図 …… 91

第　２　図　沖田遺跡出土遺物 …… 92

第　３　図　基本土層図 …… 92

第　４　図　周辺遺跡分布図 …… 93

第　５　図　調査位置図 …… 93

第　６　図　調査区全体図・土層断面図 …… 94

第　７　図　遺物出土状況図 …… 96

第　８　図　遺物実測図 …… 97

第　９　図　浮島ヶ原沼地周辺の古墳時代前期の主な遺跡 …… 98

第１０図　宇東川遺跡SB5032出土土器 …… 99

第１章　調査の経緯と概要

調査経緯　平成８年、富士市教育委員会では、市立今泉小学校のプール改築工事（富士市今泉３丁目 17 番１号）を計画した。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「沖田遺跡」の範囲内に該当し、かつ周辺の調査においても古墳時代中期以降の水田耕作土・土器の出土などが確認されている。

文化庁長官・静岡県教育委員会教育長より工事着手前に発掘調査（試掘調査）を実施するよう通知があり、富士市教育委員会により試掘・確認調査が実施されることとなった。

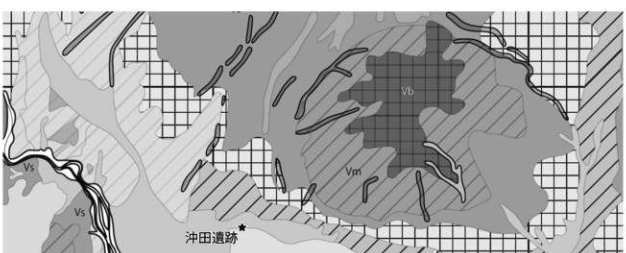
試掘・確認調査　試掘・確認調査では、敷地内にトレンチを設定し、遺構・遺物の残存状況の把握に努めた。その結果、水田面とコンテナ１箱分の土器が出土した。

その結果を基に、富士市教育委員会管理課、富士市役所営繕課と取り扱いについて協議し、調整の結果、本発掘調査を実施することとなった。

本調査　オープンカット工法により、安全勾配をつけ、重機で地表下約 1.5m の砂層まで掘り下げたのち、切梁土留工法により安全対策を行うこととした。

調査では、検出面が水没しないように、排水溝・釜場の設置などの作業を並行して行った。地表下約 2.4m まで、水田面、遺物包含層の調査を実施することとした。

調査は平成８年９月 13 日に開始し、110㎡を掘削し、10 月 23 日に終了した。調査では、古墳時代前期から中期にかけての自然流路を検出した。畦畔などについては検出されなかった。　（佐藤）



第１図　地質図

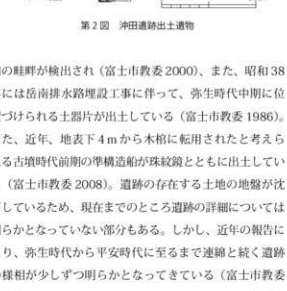
第 2 章　遺跡の立地と環境

第 1 節　地理的歴史的環境

沖田遺跡はかつての吉原湊の北側、浮島ヶ原低地の西端に位置する。浮島ヶ原低地は、愛鷹火山地の南麓に位置し、南方には駿河湾、そして富士川河口から沼津市狩野川まで続く田子浦砂丘に取り囲まれ、その愛鷹火山地と田子浦砂丘に挟まれた低地部に存在する。現在は、水田地帯が広がっているが、近世この低地部には、富士川や愛鷹山の河川が注ぎ込み、最終的に沼川という河川のみによって駿河湾に水が排出されたため、大雨や高潮があると浮島ヶ原低地全域の 20 平方キロメートルが一大湖沼となる土地であったという。比較的安定的に耕作が行えるようになったのは昭和 18 年、沼の排水を目的として田子浦砂丘上に昭和放水路が、昭和 28 年から昭和 41 年にかけての田子浦港（旧吉原湊）、昭和 38 年に第二放水路が造られたことによるところが大きい（富士市立博物館 1984）。

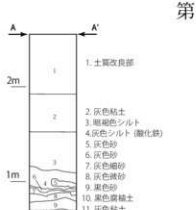
弥生時代後期以降、この浮島ヶ原低地を取り囲むように集落が存在し、それぞれが密接な関係を持ちながら地域を形成していたものと考えられる。それらの地域内ネットワークの存在に欠かせない主要な「路」として考えられるのが、浮島ヶ原低地と愛鷹火山地の境に存在し、現在、富士市から沼津市を経て三島市に至る「静岡県道 22 号三島富士線」通称「根方街道」であったと考えられる。

平成 8・10 年に行われた調査では、奈良時代の条里水田の畦畔が検出され（富士市教委 2000）、また、昭和 38 年には岳南排水路理設工事に伴って、弥生時代中期に位置づけられる土器片が出土している（富士市教委 1986）。また、近年、地表下 4 m から木棺に転用されたと考えられる古墳時代前期の準構造船が珠紋鏡とともに出土している（富士市教委 2008）。遺跡の存在する土地の地盤が沈下しているため、現在までのところ遺跡の詳細については明らかとなっていない部分もある。しかし、近年の報告により、弥生時代から平安時代に至るまで連綿と続く遺跡の様相が少しずつ明らかとなってきている（富士市教委 2011）。（佐藤）



第 2 図　沖田遺跡出土遺物

第 2 節　基本土層

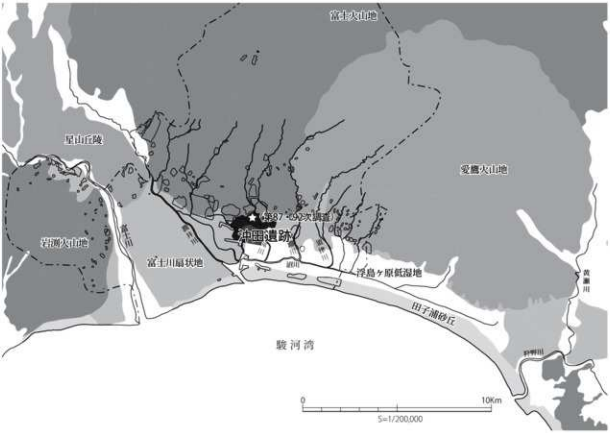


第 3 図　基本土層図

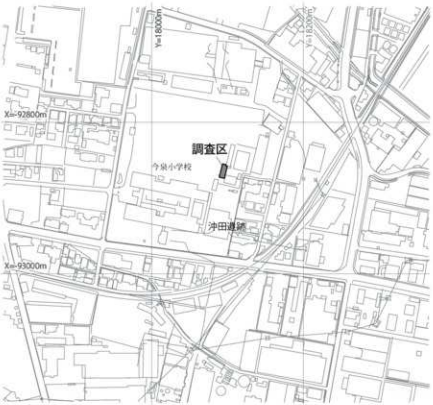
17 層に分層した（第 3 図）。2 層以下は色調が灰色～暗褐色、土質は粘土～シルト、砂質（細砂～微砂）で構成される。14 ～ 16 層のシルトに大淵スコリアが含まれ、奈良・平安時代～古墳時代後期の水田耕作土と考えられる。標高値は 0.30m ～ － 0.30m である。17 層は自然流路の中心を成す堆土で、植物腐蝕物を多く含むが、大淵スコリアは含まない。（服部）

参考文献

富士市教育委員会 1986『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
富士市教育委員会 2000『沖田遺跡』
富士市教育委員会 2008『平成 17・18 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』
富士市教育委員会 2011『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市立博物館 1984『浮島沼と米づくり』

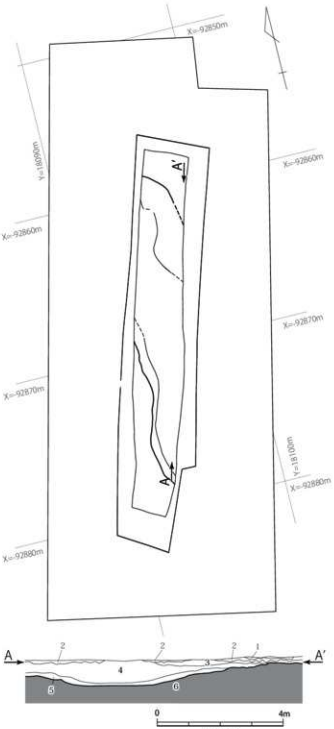


第 4 図　周辺遺跡分布図



第 5 図　調査位置図 (S=1/50000)

第３章　遺構と遺物



1　暗褐色シルト
2　黒褐色シルト　　スコリアを極めて多く含む。
3　黒褐色粘土　　植物腐敗を少量含む。
4　黒褐色微～細砂　　赤色粒子（黒井川系？）と植物腐敗を含む。遺物が含まれる。
5　黒褐色粘質シルト　　青灰色粘土を厚さ２～３cmで帯状に混じりながら含む。
6　黒褐色シルト質細砂　　植物腐敗を多く含む。

第６図　調査区全体図・土層断面図

自然流路 NR01（第６・７図）　17 層において、調査区を北西から南東方向へ貫く自然流路 NR01 が検出された。方向は N- 9°-W で、規模は長さが 3.60m、幅が上端約 8.2m、下端約 6.0m、深さは最深部約 0.55m を測る。底面は平坦で標高値は－0.55m（マイナス値）、断面形状は逆台形を呈する。埋土は微細～細砂を含む黒褐色粘質土であるが、下位では青灰色粘質土や粗砂が混じる黒褐色シルト質の微砂が堆積していた。

北側の立ち上がりは大きく蛇行しており、水が滞留したことが推定され、遺物も多く出土した。南側は比較的緩やかな弧状を呈する。流れの方向は自然流下と捉えるなら北から南と考えられる。

出土遺物（第８図７・10・11・17）　７は甕の胴部で、溝の南側より一括して出土した。外面は比較的粗いハケ調整が施され、球胴形を呈する。外面下半にススが付着している。10 は壺で折返しを有する口縁部片である。端部を肥厚させるが、貼り付けた粘土を長方形から楕円形に整形する。11 は壺の胴部で、胴中央に最大径を持ち、無花果形を呈する。外面と頸部内面に赤彩が認められる。調整は内外面とも板ナデが認められ、ヘラ状工具などによるミガキは認められない。17 は小型の壺で、北側の溝底部付近より出土した。胴部の最大径が口縁の径より小さく、口縁部高 2.3cm、胴部高 4.5cm を測る。外面は横ナデが施されるが、底部は、ヘラケズリにより作りだされている。

いずれの破片も断面の摩耗が少なく、廃棄されてから出土地点までの間に長距離の移動は想定できない。出土した場所の近くにおいて、集落の存在を伺わせる。

奈良・平安時代の水田耕作土　水田耕作土と考えられる暗～黒褐色シルトの 14 ～ 16 層（第３図）は、大澗スコリアを含み、その色調などから水田耕作土と想定される。

大澗スコリアの混入から古墳時代後期から奈良・平安時代の頃の水田耕作土と考えられる。確実にこれらの土層から出土したと記録されている土器はないが、後述する土器のなかに奈良時代のものが存在

し、前述の考えを傍証している。

その他の遺物（第８図１～６・８・９・12～16・18～23）

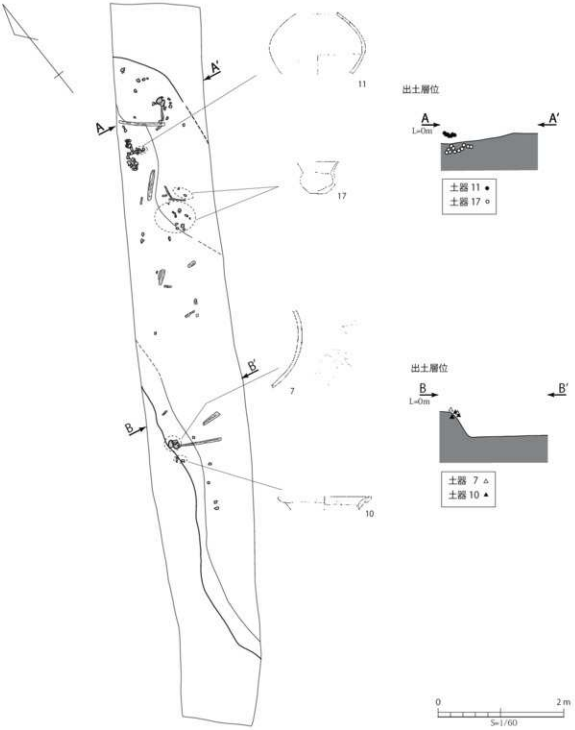
１・２はＳ字甕の破片である。１は頸部内面が平坦に仕上げられているが、ハケ調整は観察されない。全体的に丁寧な調整によって仕上げられている。２は口縁部～肩部の破片で、口唇部端部は欠損している。１に比べて器壁が厚く、外面のハケ目も粗い。３・４は台付甕の接合部である。３は、断面観察から甕底部と台部を別々に作り接合していることが分かる。５は甕の口縁部の破片である。頸部は緩やかに屈曲し、外方へ広がる。端部は薄く、明確な面取りは確認できない。内面にはハケメ調整を残す。６は甕で 70％近くが残存し、図上では全形が復元される。全体的に器壁は厚く、重量がある。外面はハケメ調整の後、板状工具によるナデが施されているが、部分的にハケメが残る。頸部の屈曲は内外面ともに明瞭で口縁部をしっかりと作り出している。８は壺の胴部～底部で、胴部の下位に最大径を有し、全体はいわゆる下膨れ形を呈するものと推測される。

９は壺の口縁部から頸部の破片である。頸部から口縁部に直線的に広がる。さらに端部を肥厚させ、断面三角形に整形する。内外面共にハケメ調整の後ヘラミガキが施される。12 は壺の頸部の破片で小破片のため径は復元できない。胎土に白色粒子を極多量に含む。13 は壺の頸部から胴部にかけての破片である。径はやや大きくなりそうだが、復元できない。頸部の屈曲は緩やかであまり肩が張らない。胴部最大径は破片下端あたりに推測される。調整は、外面、縦方向のヘラミガキ、内面はナデで頸部のみヨコハケが施される。12 同様、胎土に白色粒子を極多量に含む。

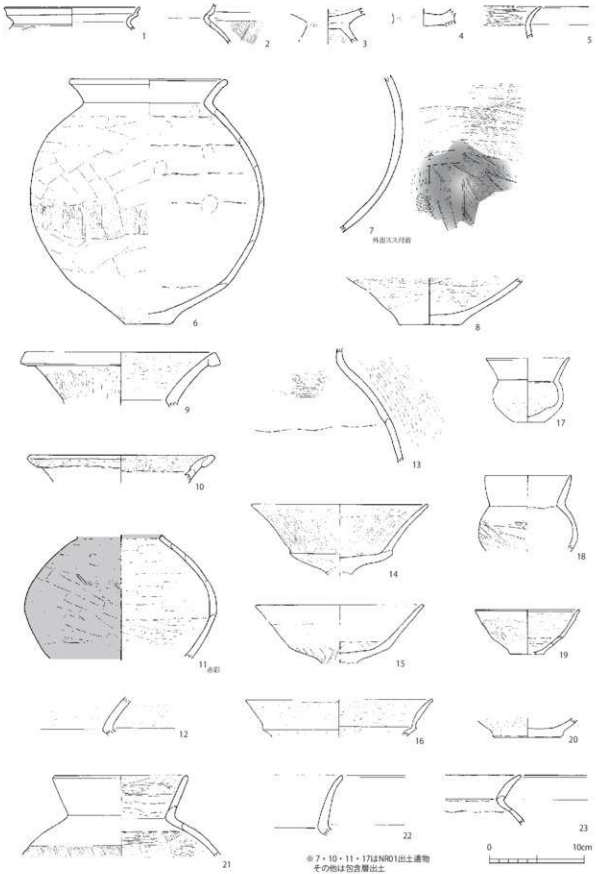
14・15 は高坏の坏部の破片である。14 は柱状脚高坏の坏部で、接合部の観察からソケット状に尖った脚端部が接合するものと考えられる。坏底部は水平方向に広がり、乾燥工程をおいた後、外反しながら口縁部に至る。端部は尖らずしっかりとした面取りが行われる。最終的にはヘラミガキで仕上げられるが、丁寧ではないため、前段階のナデやハケメが観察される。15 は 14 同様、柱状脚高坏の坏部である。14 と異なり坏底部はやや立ちながら広がり、その後、外反することなく端部に至る。内外面ともにハケメ調整が残る。16 は鉢の破片と考えられる。比較的明瞭に屈曲する頸部から外反しながら端部に至る。高坏、壺などの可能性も考えられるが、内外面の丁寧なヘラミガキ、器壁の薄さなどから鉢とした。18 は小型の壺である。頸部の屈曲は外面では緩やかだが、内面には明瞭な段差を作り出す。口縁部は厚くやや内湾しながら立ち上がる。斜め、縦方向のハケメの後、口縁部、頸部はナデが施される。外面は黒色を呈し、何らかの処理がされた可能性がある。19 は小型鉢の破片で、成形時の凹凸が残る。

21 は甕の口縁部から胴部の破片である。全体的に器壁が厚く、胎土には白色粒子をやや多く含む。内外面ともにハケメ調整の後、ヨコナデが施される。口唇部端部内面がやや盛り上がるようにナデ調整が施される。22・23 も甕の破片と考えられるが、小破片のため径は復元できない。22 は口縁部が高く、23 は頸部外面が意識的に凹ませてある。

遺物の時期　出土遺物は大きく分けて三時期に分けることができる。古墳時代前期の大廓式後半（１～４、９・10・16・19 など）、古墳時代前期後半から中期初頭の中見代Ⅰ式からⅡ式（６・14・15・17・18 など）、古墳時代後期後半から７世紀（21 ～ 23）にかけてである。


A
A′
B
B′
11
17
7
10
出土層位
A
A′
L=0m
土器11 ●
土器17 ○
出土層位
B
B′
L=0m
土器 7 △
土器10 ▲
0
2m
S=1/60

第7図　遺物出土状況図


1
2
3
4
5
6
7
外面スス付着
8
9
10
11
赤彩
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
0
10cm
※7・10・11・17はNR01出土遺物
その他は包含層出土

第 8 図　遺物実測図

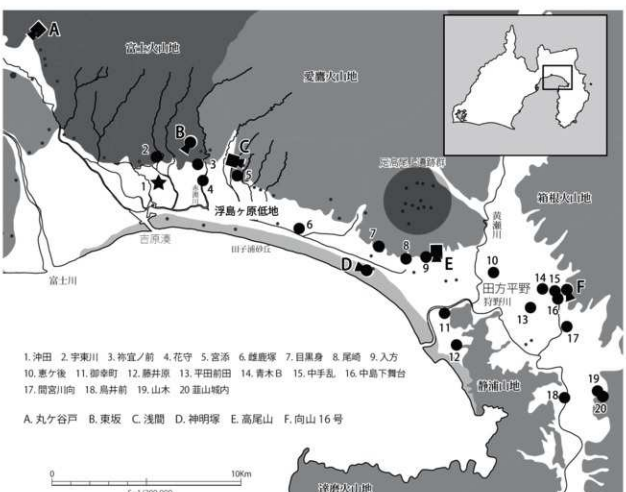
第 4 章　総括

はじめに　本調査における当初目的は、条里型畦畔の検出にあった。調査の結果、奈良・平安時代と考えられる水田耕作土を検出することは出来たが、畦畔を検出することは出来なかった。しかし、17 層において、検出された自然流路 NR01 と出土土器からも多くの情報が得られた。

自然流路　調査地点の周辺には、数多くの自然流路が存在するものと考えられ、今回検出された NR01 は、そのひとつにすぎない。形成時期は、遺構の底面付近から出土した土器（17）から古墳時代中期初頭、中見代Ⅱ式（渡井 1999・佐藤 2012a）と考えられる。また、流路の下層より大廓式後半の S 字甕（1）が出土していることからも、同様の所見を導き出すことができる。

NR01 の埋没要因については、自然環境の変化と考えられるが、富士川河口断層帯の活動により浮島ヶ原低地の水位が上昇したのではないかという考え方（小松原ほか 2007）と関係してくる可能性もあり、その年代が一致してくるかについては、今後慎重な検討を加えていかなければならない。そのため、現段階では、可能性についてのみ指摘しておくこととする。

出土土器　前述のとおり、今回の調査では、古墳時代前期から中期初頭、古墳時代後期後半から 7 世紀の土器が出土した。大廓式後半の土器では、9 の壺のように西駿河、もしくは東遠江の影響が伺える土器の存在が注目される。沖田遺跡では、市内では珍しく弥生時代中期の遺物の存在が知られ、後期でも西駿河との関係を示す土器が近年、報告されている（富士市教委 2012b）。また、狭い調査区ながら、自然流路 NR01 の埋没時期を示す中見代Ⅱ式と考えられる土器が、出土したことも注目される。これまで、古墳時代中期初頭の中見代Ⅱ式段階の土器は、その遺跡数とも関係して、ほとんど確認されてこなかった。これは、

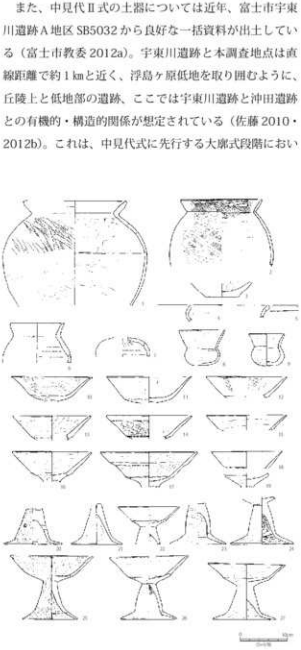


第 9 図　浮島ヶ原低地周辺の古墳時代前期の主な遺跡

東駿河に限ったことではなく、列島規模での現象であると考えられるが、その時期の土器が低地部から出土したことは、集落空白時期の問題を考えるうえで示唆的である。以前、古墳時代中期における丘陵上での集落の空白の要因を低地部開発に向けた積極的な人の移動ではないかと考えた（佐藤 2011）。今回、自然流路から出土した土器は、断面が摩耗していないことから、周辺で生活域が存在していたことを示しており、前述における考え方と大きく矛盾しない。ただし、沖田遺跡は、弥生時代中期後半から遺跡形成が開始され、古墳時代前期においても継続するものと考えられ、人の移動という単純な理由のみでは説明できないことも事実であり、今後多角的な検討が必要である。

また、中見代Ⅱ式の土器については近年、富士市宇東川遺跡 A 地区 SB5032 から良好な一括資料が出土している（富士市教委 2012a）。宇東川遺跡と本調査地点は直線距離で約 1 ㎞と近く、浮島ヶ原低地を取り囲むように、丘陵上と低地部の遺跡、ここでは宇東川遺跡と沖田遺跡との有機的・構造的関係が想定されている（佐藤 2010・2012b）。これは、中見代式に先行する大廓式段階において、想定された構図であるが、宇東川遺跡における活動が一旦途絶える、中見代Ⅱ式段階まで続いていた可能性が考えられる。

おわりに　沖田遺跡は範囲が広く、地点ごとでその様相が異なることや遺構・遺物が検出されるまでの掘削深度が深いこと、土層の対比が難しいことなどから、その実態については、あまり明らかとなっていなかった。しかし、平成 23 年までに 147 次にわたる調査経験や近年の報告により、少しずつではあるがその実態に迫ってきたといえる。今後、これまでの調査成果をまとめ上げ、沖田遺跡のもつ重要性を紐解いていく必要がある。（佐藤）



第 10 図　宇東川遺跡 SB5032 出土土器

参考文献

小松原純子ほか 2007「静岡県浮島ヶ原低地の水位上昇履歴と富士川河口断層帯の活動」『活断層・古地震研究報告』No.7

佐藤祐樹 2010「集落の動態からみた古墳出現前夜の富士山南麓」『静岡県考古学研究』41・42

佐藤祐樹 2011「弥生～古墳時代における宮添遺跡を取り巻く社会構造の変化」『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会

佐藤祐樹 2012a「SB5032 出土土器の位置付け」『宇東川遺跡 A 地区』富士市教育委員会

佐藤祐樹 2012b「高尾山古墳周辺における集落の動態と古墳築造の背景」『高尾山古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』

藤井治ほか 2007「静岡県浮島ヶ原の湿地堆積物に見られる層相変化と南海トラフ周辺の地震との関係（速報）」『活断層・古地震研究報告』No.6

藤井治ほか 2007「静岡県中部浮島ヶ原の完新統に記録された環境変動と地震沈降」『活断層・古地震研究報告』No.7

富士市教育委員会 2012a『宇東川遺跡 A 地区』

富士市教育委員会 2012b『富士市内遺跡発掘調査報告書』（平成 11・12 年度）

渡井英雅 1999「中見代式土器小考」『東国土器研究』第 5 号

出土遺物観察表

※　口径・底径の（　）内は推定値である。
器高の（　）内は残存値である。
残存率は図示中での残存率を示した。

上器観察表

遺物番号	検出	図版	遺構番号	種別	器形	残存率	口径	器高	底径	内面色調		外面色調		備考
1	8	3	包含層	土師器	S 字甕	(25%)	(14.4)	(2.5)	-	2.5YR5/4	にぶい赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	
2	**8**	**3**	**包含層**	**土師器**	**S 字甕**	**-**	**-**	**(4.2)**	**-**	**2.5YR5/6**	**明赤褐**	**10R4/6**	**赤**	
3	8	4	包含層	土師器	台付甕	(70%)	-	(3.8)	-	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/4	にぶい赤褐	
4	**8**	**4**	**包含層**	**土師器**	**台付甕**	**(70%)**	**-**	**(1.8)**	**-**	**5YR6/6**	**橙**	**10R5/6**	**赤**	
5	8	3	包含層	土師器	甕	-	-	(3.5)	-	2.5YR7/6	橙	10R6/6	赤橙	スス付着
6	**8**	**3**	**包含層**	**土師器**	**甕**	**70%**	**16.5**	**26.0**	**5.0**	**5YR4/4**	**にぶい赤褐**	**5YR4/6**	**赤褐**	
7	8	3	NR01	土師器	甕	-	-	(17.0)	-	10YR4/3	にぶい黄褐	7.5YR3/3	暗褐	
8	**8**	**3**	**包含層**	**土師器**	**甕**	**(70%)**	**-**	**(5.0)**	**6.3**	**7.5YR4/3**	**褐**	**5Y5/6**	**明赤褐**	
9	8	3	包含層	土師器	壺	(40%)	(20.0)	(5.9)	-	10R5/8	赤	7.5YR7/4	にぶい橙	
10	**8**	**3**	**NR01**	**土師器**	**壺**	**(20%)**	**(19.2)**	**(2.9)**	**-**	**10YR4/3**	**にぶい黄褐**	**5YR5/4**	**にぶい赤褐**	
11	8	3	NR01	土師器	壺	(20%)	-	(12.5)	-	5YR4/4	にぶい赤褐	7.5R3/4	暗赤	外面赤彩
12	**8**	**3**	**包含層**	**土師器**	**壺**	**-**	**-**	**(4.1)**	**-**	**10YR6/2**	**灰黄褐**	**7.5YR6/3**	**にぶい黄褐**	
13	8	3	包含層	土師器	壺	-	-	(12.5)	-	2.5YR6/3	にぶい橙	2.5YR6/5	橙	
14	**8**	**4**	**包含層**	**土師器**	**高坏**	**(80%)**	**19.0**	**(7.5)**	**-**	**2.5YR5/8**	**明赤褐**	**2.5YR5/6**	**明赤褐**	
15	8	4	包含層	土師器	高坏	(30%)	(17.6)	(6.2)	-	2.5YR4/3	にぶい赤褐	10R4/6	赤	
16	**8**	**4**	**包含層**	**土師器**	**鉢**	**(25%)**	**(19.6)**	**(4.0)**	**-**	**7.5YR7/4**	**にぶい橙**	**7.5YR4/6**	**褐**	
17	8	4	NR01	土師器	壺	90%	8.6	6.8	3.2	7.5YR6/6	橙	2.5Y4/4	オリーブ褐	
18	**8**	**4**	**包含層**	**土師器**	**壺**	**(60%)**	**9.0**	**(8.0)**	**-**	**7.5YR4/3**	**褐**	**10YR1.7/1**	**黒**	
19	8	4	包含層	土師器	鉢	50%	11.0	4.8	-	2.5YR6/6	橙	10R5/6	赤	
20	**8**	**4**	**包含層**	**土師器**	**壺**	**(60%)**	**-**	**(2.0)**	**7.0**	**7.5YR5/4**	**にぶい褐**	**7.5YR4/4**	**褐**	
21	8	4	包含層	土師器	甕	(60%)	14.4	(8.5)	-	5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	
22	**8**	**3**	**包含層**	**土師器**	**甕**	**-**	**-**	**(6.4)**	**-**	**7.5YR4/3**	**褐**	**7.5YR3/2**	**黒褐**	
23	8	4	包含層	土師器	甕	-	-	(5.3)	-	7.5YR3/4	暗褐	5YR3/3	暗赤褐	

写真図版

沖田遺跡　第 90・93 次調査地点 出土土器

（撮影　小田貴子）

NR01（北東から）

PL.2　遺構

1.　NR01 遺物出土状況（南西から）

2　NR01 遺物出土状況（南から）

3.　NR01 遺物出土状況（南から）

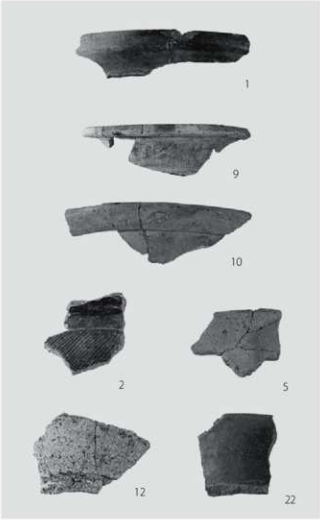
4.　NR01 遺物出土状況（南東から）

5.　NR01 遺物出土状況（南東から）

6.　NR01 遺物出土状況（西から）

7.　調査地現状　北西より（△交点が調査地）

8.　調査地現状　南西より（△交点が調査地）



NR01（7.10.11）・**包含層**（1.2.5.6.8.9.12.13）

PL.4　遺物

4

16

20

19

3

23

15

21

14

17

18

NR01（17）　　**包含層**

富士市埋蔵文化財調査報告

静岡県　富士市

児 森 遺 跡

消防水利整備事業に伴う第２地区埋蔵文化財発掘調査報告書

2012 年 3 月

富士市教育委員会

例　言

1　本書は、静岡県富士市中里 1380 番地の１に所在する児森遺跡第２地区の発掘調査報告書である。

2　調査は、富士市長　鈴木清見（担当課：消防本部警防課）による消防水利整備事業（耐震性貯水槽設置工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、平成 13 年度に富士市教育委員会が実施した。

3　児森遺跡の試掘確認調査、本調査の期間は以下のとおりである。

試掘調査【第２地区１次調査】　平成 13 年９月４日

本 調 査【第２地区２次調査】　平成 13 年９月５日～平成 13 年９月６日

4　調査体制は以下のとおりである。

【児森遺跡第２地区１次・２次発掘調査】

富士市教育委員会教育長　太田　均　　教育次長　鈴木英之

文化スポーツ課課長　村嶋政彦　　主　　幹　渡井義彦

文化財担当指導主事　田中淳一　　臨時職員　吉田博子

目　次

例言

目次

第１章　調査の経緯と概要 …… 109

第２章　遺跡の立地と環境 …… 110

第３章　遺構と遺物 …… 111

第４章　総括 …… 114

付表　出土遺物観察表

写真図版

挿図目次

第　1　図　地質図 …… 109

第　2　図　調査位置図 …… 110

第　3　図　周辺遺跡分布図 …… 110

第　4　図　SB01 遺物出土状況図 …… 111

第　5　図　調査全体図 …… 112

第　6　図　出土遺物実測図 …… 113

第　7　図　愛鷹山南西麓における居住域と墓域・路 …… 114

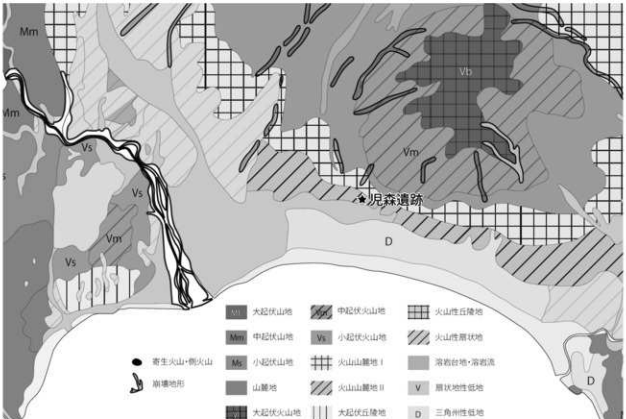
第１章　調査の経緯と概要

調査経緯　平成 13 年、富士市長　鈴木清見（担当課：消防本部警防課）は、消防水利整備の一環として、富士市中里 1380 番地の１において、貯水槽設置工事［中里町３第１耐震性貯水槽 40㎥築造工事］を計画した。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「児森遺跡」の範囲内に該当するため、工事着手前に試掘・確認調査を実施することとなった。

試掘・確認調査　試掘・確認調査では、敷地内にトレンチ１箇所を設定し、遺構・遺物の残存状況の把握に努めた。その結果、竪穴建物跡１軒と土器が出土した。

本調査　工事着手の日程も迫っていることから、試掘調査において、遺構・遺物が発見された結果を即座に静岡県教育委員会文化課に伝え、文化財の取り扱いについて、指導を求めたところ、工事によって埋蔵文化財が破壊される範囲については、本発掘調査を実施するように指示があった。そのため、富士市教育委員会では、早急に調査体制を整え、試掘調査終了の翌日より、本発掘調査を実施することとなった。

調査は、重機で地表下約 1.5m まで掘り下げたのち、人力により遺構精査・掘削を行った。調査は平成 13 年９月５日に開始し９月６日に終了した。掘削面積は約 60㎡である。調査では、７世紀の竪穴建物跡１軒と土坑、ピットなどを検出、完掘した。



第１図　地質図

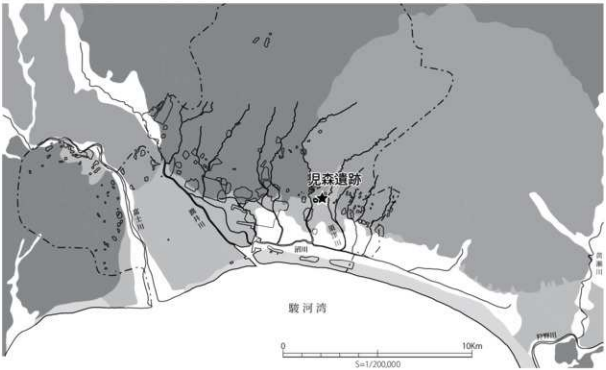
第２章　遺跡の立地と環境

児森遺跡は、富士山と愛鷹山の境を流れる赤淵川東岸の丘陵先端から須津川扇状地上に立地している。富士山南麓、愛鷹山南西麓に存在する数多くの河川が南側の浮島ヶ原低地に流れ込むことによりラグーン地帯を形成していたと考えられる。児森遺跡はそのラグーン地帯と丘陵の中間の微高地上に立地している。ラグーン地帯と丘陵の間には、現在「根方街道」が存在し、弥生時代後期以降、富士から三島方面へ至る重要な交通路であったことが伺える。

弥生時代後期以降、集落は根方街道沿いに立地し、構造的な関係を有していたものと考えられ、児森遺跡もその一翼を担っていたものと想定される。ただし、これまでの調査例が少なくその実態については明らかとなっていない。

また、児森遺跡の北東には、須津川を挟んで両岸に中里４古墳群、神谷古墳群が展開している。消滅したものや古墳でない可能性があるものを含めると、中里４古墳群では 54 基、神谷古墳群では 122 基の古墳が存在した。児森遺跡において、人が活動していた時期と前述の古墳群が展開していた時期は、短期間であれ重なっていると考えられ、古墳群成立の背景を考えるうえでも重要な遺跡といえる。

第２図　調査位置図 (S=1/5,000)



第３図　周辺遺跡分布図

第３章　遺構と遺物

遺構

SB01（第４・５図）　調査区西端で検出された。遺構の西側、南側は調査区外のため、遺構の全形は明らかではないが、方形を呈するものと考えられる。主軸はN-20°-Eを指向し、残存規模は南北約4.3m、東西約3.0mを測る。検出面から建物床面までの深さは最大60cm（A－A′ライン）を測るが、遺構覆土と上層の遺物包含層との区別は明確でない部分もある。また、立ち上がりの検出された範囲では壁溝が検出され、幅35cm、深さ30cmを測る。覆土は自然堆積によるものと考えられる。

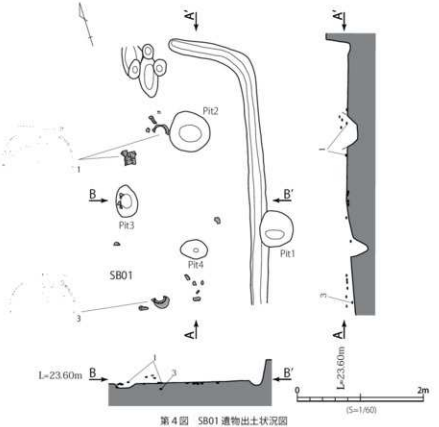
カマドが建物北壁より検出された。大部分は調査区外のため、燃焼室と袖の一部を検出したに過ぎないが検出された範囲では、多量の粘土を使用して構築されている。両袖の前面に扁平な石が立てられて検出され、その袖石の間に直方体のやや大きめな石が検出されたが、焚き口上部に架けられていた石が崩落したものと考えられる。燃焼室には多量の焼土を含む土層が堆積していた。

Pit ２～４はSB01の床面において検出されたが、すべてが建物に伴うものかどうかは明らかではない。

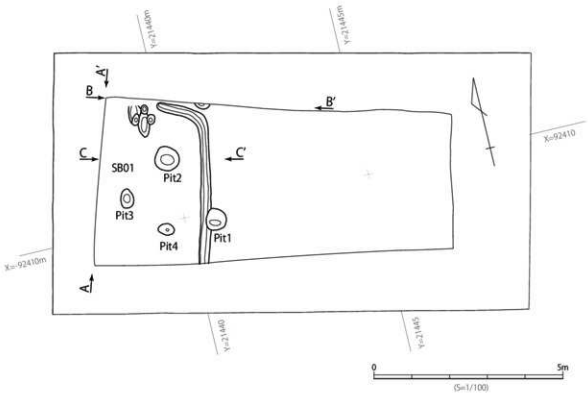
遺物（第６図１～４・７・９・10）　SB01からは土師器・須恵器片が出土している。１～４は「鍛東甕」の破片である。１はカマド前面、２はカマド西袖付近、３は建物跡南側からの出土でいずれも床面直上からの出土である。内面調整などに若干の違いが認められるものの、特徴的な口唇部内面の肥厚具合や全体的な形態など非常に似た特徴を示している。７は坏の破片である。明確な稜を持たず仕上げられている。底部と考えられる箇所にヘラケズリの痕跡が観察されるが、内外面ともに丁寧なヘラミガキで仕上げられる。カマド西袖周辺からの出土である。９は須恵器の返り蓋、10は土師器の甕の破片である。

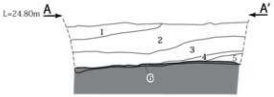
時期　床面から出土した遺物より７世紀の竪穴建物跡と考えられる。

その他の遺物（第６図５・６・８・11）　その他、包含層より遺物が出土した。５・６は坏の破片である。口唇部のみ若干立ち上がる形態を示す。６の内外面ともに黒色処理が施されている。ともに７世紀の遺物と考えられ、SB01の遺物の可能性も考えられる。８も坏の破片と考えられるが、内面の凹凸や器壁の厚さなど時期が明らかでない。11は陶器で壺の破片と考えられる。中世以降のものと考えられるが、小破片のため明らかでない。

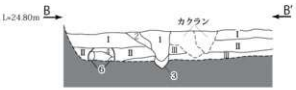


第４図　SB01遺物出土状況図

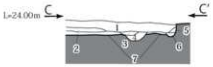




1　暗茶褐色土（埋土）
2　黒褐色土　（遺物包含層）
3　黒褐色土　（SB1覆土）
4　黒褐色土　（SB1覆土）
5　黒褐色土　（SB1覆土）
6　黒色土　（掘り方埋土）

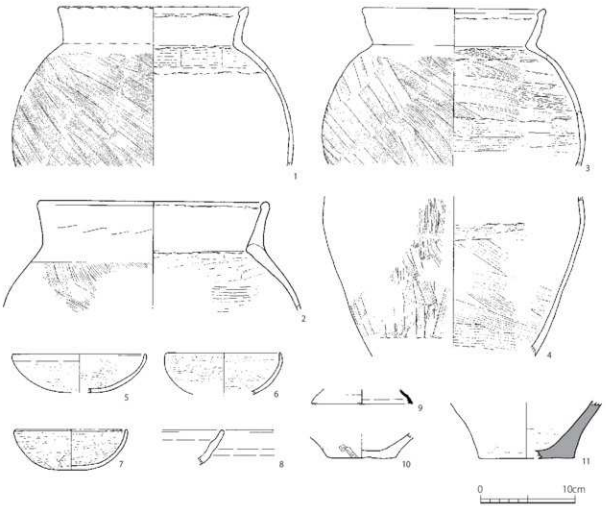


I　黒色土　　発泡 SC 多量、橙色 SC 少量含む。
II　黒色土　　発泡スコリア微量、橙色 SC 少量含む。
III　黒茶褐色土 橙色スコリア微量含む。
1　茶褐色土　発砲 SC・橙色 SC 少量含む。（Pit 覆土）
2　暗褐色土　発泡 SC 多量、橙色 SC 少量含む。（Pit 覆土）
3　茶褐色土　発泡 SC 小量、橙色 SC 微量含む。（Pit 覆土）
4　暗黄褐色土（SB01 カマド覆土）
5　暗黄褐色土（SB01 カマド覆土）
6　青灰色粘土（SB01 カマド残存）



1　黒褐色土　（SB1覆土）
2　黒褐色土　（SB1 覆土）
3　黒色土　（Pit2）
4　暗茶褐色土（Pit2）
5　暗茶褐色土（SB1 覆土）
6　黒茶褐色土（SB1 覆土）
7　暗茶褐色土（掘り方埋土）

第５図　調査全体図



第６図　出土遺物実測図

出土遺物観察表

※　口径・底径の（　）内は推定値である。
　　器高の（　）内は残存値である。
　　残存率は図示中での残存率を示した。

土器観察表

遺物番号	陣区	区画	遺構番号	種別	器形	残存率	口径	器高	底径	内面色調		外面色調		備考
1	6	2	SB01	土師器	甕	(50%)	(20.2)	(17.0)	-	7.5YR4/3	褐	5YR3/4	明赤褐	
2	**6**	**2**	**SB01**	**土師器**	**甕**	**(25%)**	**(19.7)**	**(9.4)**	**-**	**7.5YR4/6**	**褐**	**5YR3/4**	**暗赤褐**	
3	6	2	SB01	土師器	甕	(25%)	(19.0)	(16.5)	-	2.5YR4/8	赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	
4	**6**	**2**	**SB01**	**土師器**	**甕**	**(20%)**	**-**	**(17.0)**	**-**	**10YR3/4**	**暗褐**	**10YR3/1**	**黒褐**	
5	6	2	包含層	土師器	坏	(20%)	(13.9)	(4.1)	-	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR4/2	灰黄褐	
6	**6**	**2**	**包含層**	**土師器**	**坏**	**(50%)**	**(12.2)**	**(4.3)**	**-**	**5Y3/1**	**オリーブ黒**	**5Y3/1**	**オリーブ黒**	**黒色処理**
7	6	2	SB01	土師器	坏	(45%)	(12.0)	(4.3)	-	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	
8	**6**	**2**	**包含層**	**土師器**	**坏**	**-**	**-**	**(3.6)**	**-**	**10YR7/4**	**にぶい黄橙**	**10YR6/3**	**にぶい黄橙**	
9	6	2	SB01	須恵器	坏蓋	(20%)	(10.6)	(1.6)	-	5Y6/1	灰	5Y5/1	灰	
10	**6**	**2**	**SB01**	**土師器**	**甕**	**(25%)**	**-**	**(2.6)**	**(7.2)**	**10YR4/3**	**にぶい黄褐**	**2.5YR4/3**	**オリーブ褐**	
11	6	2	包含層	陶器	壺？	(20%)	-	(6.1)	(10.1)	5YR4/2	灰褐	10R4/2	灰赤	

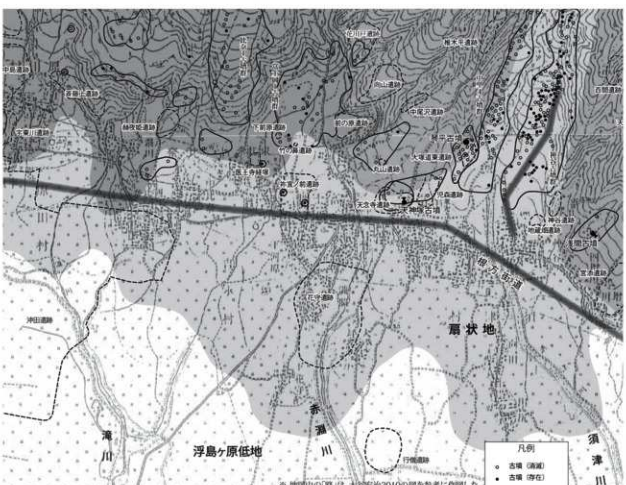
第４章　総括

はじめに　今回は、60㎡という限られた調査面積であったが、７世紀の竪穴建物跡１軒を検出・完掘した。地表下２ｍ以上からの遺構検出ということもあり、後世の改変も少なく、遺物も比較的良好な形で出土した。児森遺跡は昭和62年の分布調査で発見された比較的新しい包蔵地であるが、今回報告する調査以降は、調査する機会がなく、遺跡の広がりや遺跡の消長などについては明らかとなっていない。

周辺の集落　浮島ヶ原低地の北側に存在する「静岡県道22号三島富士線」通称「根方街道」沿いには弥生時代後期以来、現在に至るまで、断絶をはさみながら集落が営まれ続けてきた。

また、西から赤淵川、須津川、春山川などが愛鷹山から南に向かって流れ、地域を東西に区分してきた。児森遺跡は赤淵川と須津川に挟まれた中間地点に位置する。比較的大きな集落では、赤淵川を挟んだ西側に祢宜ノ前遺跡、須津川を挟んで東側には宮添遺跡が存在する。祢宜ノ前遺跡では、古墳時代前期の集落が断絶して以降、７世紀の遺構は現在のところ確認されず、８世紀に入り、集落が再開されることが明らかとなっている（富士市教委2008a）。一方、宮添遺跡では古墳時代後期から断絶を挟むことなく７世紀の集落が営まれ続けている。（富士市教委2008b、2009、2010、2011）児森遺跡で見つかった１軒の７世紀の建物跡から、集落間の関係について述べることは出来ないため、赤淵川東側集落のまとまりを指摘するにとどめておく。

周辺の古墳　須津川扇状地上には、児森遺跡のほか、集落跡があまり認められない地域である。児森遺跡の西側には、古墳時代後期初頭の前方後円墳の可能性が指摘されている天神塚古墳が存在し、古墳の旧表土、盛土中より古墳時代前期、中期の土師器が出土していることから、７世紀以前には、集落（天念寺遺跡）が存在したことが考えられる。



第７図　愛鷹山南西麓における居住域と墓域・路（S=1/25,000）

しかし、天神塚古墳築造後、集落は丘陵上に戻り扇状地上では認められない。古墳時代後期以降、児森遺跡の北東には、中里４古墳群、さらに須津川を挟んだ東側には須津古墳群が活発になり始める。中里４古墳群には、直径 31m の円墳　琴平古墳が盟主的に存在する。このように、須津川周辺が墓域化することと、扇状地上での集落が希薄なことに因果関係を認め、さらに、集落間をつなぐ「路」や古墳群内における墓道の関係から地域社会の実態を解明していく必要がある。

おわりに　冒頭に述べたように、児森遺跡の調査はこれまでほとんど行われたことがなく、遺跡の詳細は全く明らかになっていない状況にある。今後、工事立会などの小規模な調査を丹念に記録化し、墓域との関係から遺跡の存在に迫っていくことを目標としたい。　（佐藤）

参考文献

大谷宏治 2010「古墳時代後期～終末期の古墳について」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 231 集
富士市教育委員会 2008a『弥宜ノ前遺跡』
富士市教育委員会 2008b『宮添遺跡Ⅰ　個人農地改良工事に伴う宮添遺跡Ｋ地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市教育委員会 2009『宮添遺跡Ⅱ　個人農地改良工事に伴う宮添遺跡Ｇ地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市教育委員会 2010『宮添遺跡Ⅲ　個人農地改良工事に伴う宮添遺跡Ｄ地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市教育委員会 2011『宮添遺跡Ⅳ　個人農地改良工事に伴うＥ地区埋蔵文化財発掘調査報告書』

写 真 図 版

児森遺跡　第２地区 出土土器

（撮影　小田貴子）

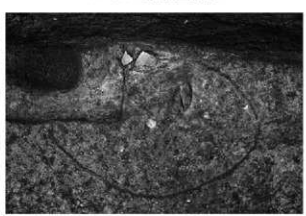
1.　調査区全景（東から）

2.　SB01（南から）

3．SB01 カマド（南から）

4．SB01 遺物出土状況 1

5．SB01 遺物出土状況 3



6．SB01 遺物出土状況 2

PL.2　遺物

SB01（1~4.9.10）・**包含層**（5~8.11）

報告書抄録

ふりがな	ふじしまいぞうぶんかざいほっくつちょうさほうこくしょ
書名	富士市埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 51 集
編著者名	佐藤祐樹（編）・服部孝信
編集機関	富士市教育委員会　（担当課：文化振興課）
所在地	〒 417-8601　静岡県富士市永田町 1 丁目 100 番地　　TEL　0545-55-2875
発行年月日	平成 24 年 3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	地区名・調査次	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
岩倉B遺跡 （いわくらびーいせき）	静岡県富士市 （しずおかけんふじし） 天間 （あまま）	22210	S-121	35°14′43″ 138°42′21″	第 1 地区－1 次	19971006 ～ 19971014	440	試掘・確認
					第 1 地区－2 次	19971015 ～ 19971121	355	記 録 保 存
高徳坊遺跡 （たかとくぼういせき）	静岡県富士市 （しずおかけんふじし） 岩本 （いわもと）	22210	S-011	35°11′03″ 138°38′15″	第 2 地区－1 次	19920819 ～ 19920909	157	試掘・確認
				35°10′58″ 138°38′22″	第 3 地区－1 次	19930824 ～ 19930917	80	試掘・確認
					第 3 地区－2 次	19940225 ～ 19940330	80	記 録 保 存
沖田遺跡 （おきた いせき）	静岡県富士市 （しずおかけんふじし） 原田 （はらだ）	22210	S-053	35°09′58″ 138°42′09″	第 87 次調査地点	19960501 ～ 19960508	48	試掘・確認
					第 92 次調査地点	19960902 ～ 19961129	661	記 録 保 存
沖田遺跡 （おきた いせき）	静岡県富士市 （しずおかけんふじし） 今泉 （いまいずみ）	22210	S-053	35°09′45″ 138°41′55″	第 90 次調査地点	19960703	37	試掘・確認
					第 93 次調査地点	19960913 ～ 19961028	110	記 録 保 存
児森遺跡 （こもり いせき）	静岡県富士市 （しずおかけんふじし） 中里 （なかざと）	22210	S-108	35°10′00″ 138°44′03″	第 2 地区－1 次	20010904	60	試掘・確認
					第 2 地区－2 次	20010905 ～ 20010906	60	記 録 保 存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩倉B遺跡 第 1 地区	集落跡	平安時代	竪穴建物跡　2	弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器 転用硯	
高徳坊遺跡 第 2・3 地区	集落跡	縄文時代 弥生時代	竪穴建物跡　8 土坑　2 性格不明　1	縄文土器・弥生土器・土師器・陶器 石製品（敲き石・砥石） 石器（石斧）・石製品（敲き石・砥石）	
沖田遺跡 第 87・92 次 調査地点	水田跡 墳墓	弥生時代 ／ 中世	水田面　3 畦畔跡　15 大畦畔跡　1	縄文土器・弥生土器・土師器 須恵器・灰釉陶器・土製品（土錘） 石製品（砥石）・木製品（田下駄・木皿・建築部材）	
沖田遺跡 第 90・93 次 調査地点	水田跡 墳墓	古墳時代	自然流路跡　1	土師器	
児森遺跡 第 2 地区	集落跡	古墳時代	竪穴建物跡　1	土師器・須恵器・陶器	

要　約

本書では、富士市内に所在する岩倉B遺跡、高徳坊遺跡、沖田遺跡、児森遺跡の 4 遺跡 5 調査地点の調査成果をまとめた。

岩倉B遺跡では、標高 500 m の山岳地帯において 10 世紀初頭の竪穴建物跡が検出され、多数の墨書土器、甲斐型土器が出土した。山岳における集落形態と富士山の噴火との関わりを考える上で重要な成果が得られた。

高徳坊遺跡の調査では、弥生時代後期における東遠江と中部高地との地域間交流の存在と、富士川東岸地域の関わりを明らかにすることができた。

浮島ヶ原低地に存在する沖田遺跡の調査では、古墳時代、奈良・平安時代、中世の 3 面の水田跡を検出し、現代まで続く生産活動の実態解明の第一歩と捉える事が出来る。また、古墳時代前期末から中期初頭の土器と自然流路の存在は、丘陵上の遺跡との有機的関係の存在を示唆するものである。児森遺跡の調査でも、集落と墓域の関係を考えさせる調査となった。

富士市埋蔵文化財調査報告　第51集

富士市埋蔵文化財発掘調査報告書

岩倉B遺跡　第1地区
高徳坊遺跡　第2・3地区
沖田遺跡　第87・92次調査地点
沖田遺跡　第90・93次調査地点
児森遺跡　第2地区

発行年月日　平成24年3月30日

編集・発行　富士市教育委員会
〒417-8601　静岡県富士市永田町一丁目100番地
TEL 0545-55-2875　FAX 0545-53-0789
E-mail:ky-bunkashinkou@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本　文光堂印刷株式会社
〒410-0871　静岡県沼津市西間門68-1

（富士市行政資料登録番号　23-58）